

もし、一目前に戻れたら…

私たち（被災者）からみなさんに伝えたいこと

—『いちにちまえ一日前プロジェクト』報告書—

平成22年3月

内閣府

はじめに

平成18年度にスタートした『一日前プロジェクト』は、「災害被害を軽減する国民運動」の一環として、多くの人々に、自然災害の脅威や、災害に事前に備えておくことの大切さに気づいてもらうことを目的としています。

本プロジェクトのテーマ、「もし、災害の一日前に戻れたら、あなたは何をしますか?」は、被災する一日前の24時間に何ができたのかを問いかけているものではありません。ここで言う『一日前』とは、被災する前の日常であり、日頃の生活を指しています。いつ襲ってくるかわからない自然災害に、日頃からどのように備えておけば良かったのかに思いを巡らせ、体験に基づく教訓を導き出してもらうことを狙いとしています。

今年度は、新たに103編の物語が誕生しました。話し手は30代から90代と幅広い年齢層の方々です。同年代の方の体験を自分に置き換えてみたり、他の地域の災害対応を自分の住む町の現状に照らし合わせたりして、読み手である皆さんが災害を自分のこととして捉え、実際の減災行動に移るようになればと期待しています。

これまでに作成された物語は、全て、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」に掲載しています。物語やイラストは、非営利の目的であれば自由に使うことができますので、地域や職場、学校等で防災について考える際の教材として、また、広報誌やパンフレットの素材として幅広くご活用ください。

内閣府（防災担当）

災害被害を軽減する国民運動のホームページ：<http://www.bousai.go.jp/km/>

目 次

I . 一日前プロジェクトの概要	P1
II . 平成 21 年度実施要領	P2
III . 一日前プロジェクトのエピソードについて	P3
平成 21 年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧	P5
〔編集後記〕	
一日前プロジェクト、みんなでやってみませんか？	P112

I. 一日前プロジェクトの概要

「一日前プロジェクト」とは？

「一日前プロジェクト」とは、被災から一定期間を経過した被災者・災害体験者のみなさまや災害対応経験者のみなさまにお集まりいただいて、「もし、災害の1日前にもどることができたら、あなたは何をしますか」をテーマに、

- ① 被災直後の行動
- ② 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- ③ もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- ④ そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー（エピソード）に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

「一日前プロジェクト」誕生の背景

わが国の経済を支える壮年層は、日々の仕事に追われ、防災教育を受講する機会や防災に関する情報に接することも少ないため、自然災害の恐ろしさを意識することなく日常生活を送っています。しかしながら、万一、大きな災害に見舞われた場合には、家屋の損壊や家族の死傷、仕事を含めた生活基盤の喪失など、経済的にも精神的にも甚大な損失を被ることが予想されています。

教育課程にある若年層の防災教育もまだ十分とは言えませんが、これら壮年層に対する防災教育の仕掛けづくりには若年層以上に難しい面があるといえます。地域のコミュニティや国民一人ひとりが日頃から災害に備えることを目的とする「**災害被害を軽減する国民運動**」の中心的な役割を果たすべき壮年層の災害に対する関心を呼び起こし、防災・減災に向けた行動や、災害への「備え」をうながすきっかけになるべく、一日前プロジェクトが誕生しました。

II. 平成21年度実施要領

	対象災害	ヒアリング実施地区		ヒアリング対象者	ヒアリング実施日
1	平成11年 台風第18号(高潮) (平成11年9月)	山口県	宇部市	住民 報道関係者	平成21年12月
2	平成21年7月 中国・九州北部豪雨 (平成21年7月)	山口県	防府市	住民	平成21年12月
3	平成20年(2008年) 岩手・宮城内陸地震 (平成20年6月)	宮城県	栗原市	住民、建築士 仮設住宅生活者	平成22年2月
4	有珠山噴火 (平成12年3月)	北海道	壮瞥町 洞爺湖町 伊達市 豊浦町	住民 病院関係者 行政職員	平成22年2月
5	平成11年6月末 梅雨前線豪雨 (平成11年6月)	広島県	呉市	住民 行政職員	平成22年2月
6	平成13年(2001年) 芸予地震 (平成13年3月)	広島県	呉市	住民 行政職員	平成22年2月

Ⅲ. 一日前プロジェクトのエピソードについて

「一日前プロジェクト」のエピソードは、国民一人ひとりが災害に備えることの大切さを自分の事として受け止め、それを行動に移すきっかけとしていただくためのエピソードであり、多様な場面での活用が期待されています。

「自分だったら」「我が家だったら」「我が社だったら」というように、自分の身の上に置きかえて読み進めてください。

また、最初から順番に読む必要はなく、年齢や性別、家庭や地域、職場などにおける役割など、自分と似かよった立場や境遇の方々のエピソードを拾い読みしたり、興味のあるタイトルにひかれて読んでみたりなど、自由に読み進めてください。

一つひとつの小さなエピソードから教訓などを感じてもらい、減災の大切さを知るきっかけとなれば幸いです。また、「おもしろい」と感じたエピソードは、ご家族、友人、ご近所、地域コミュニティ、職場の方々などへもご紹介ください。

平成21年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
地震・津波	「うちの崖、落ちそうなので、避難して」 ～下の家に呼びかけホテルへ～	中国	家庭	平成13年(2001年)芸予地震 (平成13年3月)	9
	半日まででお断り、消防団の同行取材				10
	屋根瓦、雨のように落ちてきた				11
	植えたばかりの種イモが、地震で全部飛び出した				12
	缶が転がる家で1カ月 ～避難所行かず、自閉症の子と自宅で過ごす～				13
	崩れたのは盛り土だけ ～崖の上の暮らしは難題山積～				14
	指令待たずに消防団の服を着て駆けつけ		地域・ご近所		15
	「あんたがやるんよ」 ～わざとスコップ持たずに地域の見回り～				16
	被災情報をまとめて役所へ向かう ～子供の安否はさておき～				17
	地震で上に何かあったら下へ、高潮で下に何かあったら上へ ～隣接の7自治会で助け合い～		行政		18
	運転中で地震の大きさ気付かず ～カーラジオで規模知り職場へ直行～				19
	地面がうねって見えたゴルフコース ～即座に中止し、役所に参集～				20
阪神教訓にしっかりと良かった消防局の耐震補強	21				
まさかここに地震が来るなんて…	東北	平成20年(2008年)岩手・宮城内陸地震 (平成20年6月)		22	
軽トラック横転、必死の脱出 ～道路が真ん中から「バーン」と割れた～			23		
「ここにいるよ!」と笛をひと吹き			24		
効果あり、天井までのすきま家具			25		
思い知った水の有り難さ ～一瞬にして沢の水止まる～			26		
役に立った保存水と意外に使えた発煙筒			27		
縦揺れでストンと落ちた窓ガラス			28		
不安から希望へ ～道路工事の進み具合を知り、気持ちも前向きに～			地域・ご近所	29	
判子と通帳もってきて ～何度もヘリで貴重品をとり家に帰る～				30	
避難するときはまわりに言づけて ～行く先わからず安否確認に手間どる～				31	
安否確認は、日頃の近所づきあいでスムーズ ～苦労したのは、情報収集～				32	
宿泊施設の食料に感謝 ～シーズンに向けたストック活かす～				33	
学校に行かなくても安心 ～先生からこまめにメール～				学校	34
杉の木につかまり、揺れがおさまるのを待った ～チェーンソーで、道路切り開き～	企業・職場	35			

平成21年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
地震・津波	「ドーン」、「グラグラ」、まったく動けず	東北	企業・職場	平成20年(2008年)岩手・宮城内陸地震 (平成20年6月)	36
	長引く避難生活で苗くさる				37
	経験活かして事前準備 ～すぐに役立った応急危険度判定用紙～		行政		38
風水害	お嫁さんの足はキズだらけ ～川になった道路歩く～	中国	家庭	平成11年6月末梅雨前線豪雨 (平成11年6月)	39
	間に合わなかった急傾斜対策 ～測量開始が一週間前～				40
	救急車来ず、自力で病院へ ～3回目の119番に「行かれませぬ」～				41
	やっぱりあそこは危なかった ～時がたてば岩も風化する～				42
	早めに避難しないと犠牲者はなくなる				43
	蒲つぼにきれいなまさ土 ～水に気を取られて市役所に通報せず～				44
	「サラサラサラ」と流れていった隣りの家 ～「99%中に人がおる」の一言でレスキューがすぐ救助～		地域・ご近所		45
	ちょっとの手助けきっかけにみんなが動き出す				46
	こういう時に避難させてええんかどうか ～難しい自治会長の立場～				47
	遠い人から順に「帰らなさい」 ～集中豪雨のときの決まりごと～		企業・職場		48
	顔色みながら職員と会話し、アフターケア		行政		49
風水害 (高潮)	膝までの水にパソコン持って部屋の中をうろうろ ～最後は水の中に「ポイ」～	中国	家庭	平成11年台風第18号 (平成11年9月)	50
	1.5mの家の嵩上げを過信 ～床板流され14畳の深い池～				51
	水は「ズンズンズン」と押し寄せた				52
	勝手にライトやクラクション ～浮いた車が柱にぶつかり家ごと揺れた～				53
	まるでドラマの水攻め ～天井まで数十センチでストップ～				54
	「これから避難生活」と机の上でオニギリ頬張る				55
	台風通過の全国ニュース、地元の状況分からず ～避難勧告の空振り「最高」～				56
	修繕前に捨てる作業が大変 ～水を含んでズシリと重いじゅうたんや座布団～				57
	犬は冷蔵庫の上、ネコはタンスの上				58
	2度目の経験 記録に残そうと写真撮る				59
	水は静かにスーッとやってきた ～できなかった主人の供養～				60
	床下収納のフタが「ポコッ」と浮いた				61
	いたるところに丈夫な棚				62
	道の両脇にゴミ山積み ～気の毒でわき見できず～		地域・ご近所		63

平成21年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
風水害 (高潮)	まちの電気屋さんで家電製品を無料修理 ～直後はご近所から部屋借りる～	中国	地域・ご近所	平成11年台風第18号 (平成11年9月)	64
	特定の避難所より2階や親戚 ～自主防災会で計画～				65
	高潮きっかけに自主防災会 ～やっぱり日ごろのおつき合い～				66
	30センチの水が急に胸まで ～普段は気付かない道路の凸凹～		企業・職場		67
	前日の注意呼びかけ記事も切迫感なし ～過去の経験に高をくくる～				68
	空港の水没、「そんな馬鹿な」 ～忘れられやすい犠牲者ゼロの災害～				69
	ロープ1本だったレジャーボート ～打ち上げられて町の中～				70
風水害	近くの大災害もニュースで知る	中国	家庭	平成21年7月中国・九州北部豪雨 (平成21年7月)	71
	ふだんどおりに朝のコーヒー ～みるみるうちに川から水～				72
	たな田がナイアガラの滝のよう				73
	やっていたのは川の洪水対策 ～土砂災害は予測せず～				74
	まるで地獄の使者のよう ～木、岩、砂が家に「バリバリ」～				75
	竹やぶの水止まったと思ったら、家の前に土石流				76
	水の入った長靴は「ゴボツ」、「ゴボツ」				77
	今年は書けない「明けておめでとう」				78
	自分の捜索願いに驚く		地域・ご近所		79
火山	「もう帰って来られないかも」 ～「7分の7」の確率知り～	北海道	家庭	平成12年(2000年)有珠山噴火 (平成12年3月)	80
	万全の体制で実家に避難 ～2日後、目の前に噴火口、すべて置いてまた逃げる～				81
	準備万端でクールに受け止め ～ニュースにならないとメディア引き上げ～				82
	安全な時期に学ぶ山と共生の大切さ ～火山防災への地域の積み上げ～		地域・ご近所		83
	ひとりに量1枚の支給に喜ぶ ～避難先で郷里を案ずる毎日～				84
	直前まで楽しい火山教育の企画会議 ～「有珠山が動き出したよ」のひと言で一転～				85
	避難所内の取材規制で被災者の心を守る ～子どもたちの居場所作りにも苦心～				86
	避難所の自治会を組織 ～ご近所の小グループの話し合いでルール作り～				87
	噴火前から避難所新聞 ～生活の約束事など知らせる～				88
	指定避難所の間近で火口開く ～50キロ先の長万部まで転々と～				89
	避難所は20～30人で班作り ～苦情に応え勉強場所や遊び場にも配慮～				90
	九州から来たボランティアの結婚式に北海道から参列				91

平成21年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
火山	役立った地域のきずな ～子どもたちの避難先確認に協力～	北海道	学校	平成12年(2000年)有珠山噴火 (平成12年3月)	92
	取材陣の真夜中チェックアウトに宿泊料金取り忘れ		93		
	避難より商品の出荷 ～避難勧告も聞き流す～		94		
	助かった1日前の避難勧告の事前情報 ～道路規制前に移動終える～		95		
	自主避難せずお年寄りと施設で日常		96		
	避難中も空き事務所で商売続ける ～一旦離れたお客は二度と戻ってこない～		97		
	患者の避難は職員も一緒 ～避難先の治療体制も万全に～		98		
	介護保険スタート前で全員の状態把握 ～避難後もすぐに巡回診療～		99		
	乳牛60頭も3カ月避難でストレス		100		
	籠城のつもりで冷蔵庫の食料残す ～3カ月後に「ドドド」～		101		
	ゲートボールしたがる老人クラブも説得してチェックアウト		102		
	農協のバスで勧告地域内のハウス通いで苗守る		103		
災害共通	3、4年探してやっと見つけた次の自治会長	中国	地域・ご近所	平成11年6月末梅雨前線豪雨 (平成11年6月)	104
	災害時にも必要だった女性の視点	中国	地域・ご近所	平成11年台風第18号 (平成11年9月)	105
	体育館の避難所は問題山積 ～高齢者に苦痛な和式トイレ、消灯すると真っ暗～	北海道	地域・ご近所	平成12年(2000年)有珠山噴火 (平成12年3月)	106
	貴重品の管理に頭悩ます避難所運営		企業・職場		107
	避難者対応に栄養士さんが大活躍 ～コンビニ弁当のメニューも考案～		企業・職場		108
	人の目が負担だった避難所生活	東北	地域・ご近所	平成20年(2008年)岩手・宮城内陸地震 (平成20年6月)	109
	被災地の神経逆なで、カメラマン		企業・職場		110
	さすが、自衛官ボランティア	中国	地域・ご近所	平成21年7月中国・九州北部豪雨 (平成21年7月)	111

平成 21 年度「一日前プロジェクト」
エピソード集

「うちの崖、落ちそうなので、避難して」

～下の家に呼びかけホテルへ～

(呉市 60代 女性)

その日は職場でバザーがあって、食堂に集まっていたところで地震がありました。揺れはそんなにひどくはなかったのですが、家に電話してみてもつながらなかったのので、「これは大変」と思って帰ることにしました。それでも、あんなになっていると思わなくて。家へ上がる階段を登って、我が家を見てビックリしました。土台の石積みが落ちそうになっていて、家の基礎の角が浮いていたんです。主人は地震のとき、庭で植木の手入れをしていたそうで、足元はひび割れるし、そこに植木鉢が落ちたりで、「もう、生きた心地はしなかった」と言っていました。

その日は雨が降って聞いていたので、「これはやばい、ひび割れから水が入って崩れでもしたら、下が大ごとや」と思って、職場からブルーシートをもらってきてかけました。下の家の方には「うちの崖が落ちそうなので、避難してください」と言って、ホテルに避難してもらったんですよ。それで一応落ち着きました。

とにかく応急措置をしなければどうにもならないので、主人の勤めている建設会社のツテで、すぐ電話してもらって、次の日には現場を見に来てもらうように手配しました。



半日までお断り、消防団の同行取材

(呉市 60代 男性 元消防団員)

わしらが消防団で地域の片付けしよったらね。テレビ局が後ろ付いてくるんよ。「一日付かせてください」ってね。だけど、こっちは一日付かれたら仕事にならんから、「昼までこらえてください」と言ってお願いしました。わしらはそれどころやないから、取材の人が質問しても何も返事しなかったね。無線で消防局がやかましく言うてくるけど、それにも答えんくらいで。テレビ局さんは消防局からの無線をじーっと聞いて自分でメモしてましたわ。わしらの映像はよく流れましたよ。

マスコミさんはテレビ映りのいい、家がガシャガシャになっているところから映すでしょ。被災者の中には、「デリカシーがない」って腹を立てる人もいましたが、その人も、ちゃんとルートを通じて依頼したときには、取材を受けたいらしいですよ。やり方を少し考えてくれればいいんですけどね。



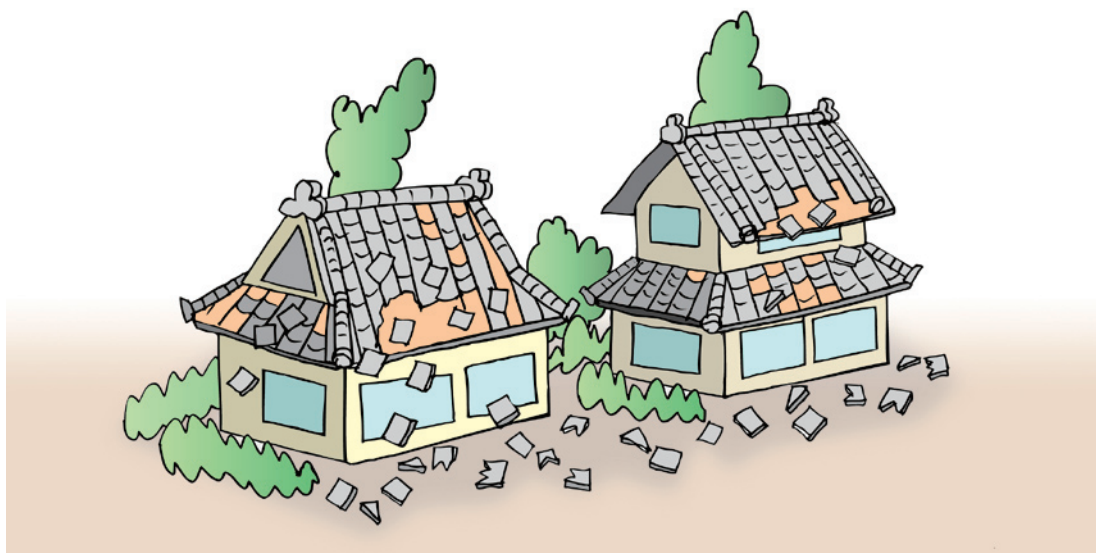
屋根瓦、雨のように落ちてきた

(呉市 50代 男性)

当日は、妻と二人でおやじの墓参りに行っていました。ちょうどJR呉線のすぐ近くを歩いていたときに地震があって、最初はガタガタガタって音がして、「えらい呉線、音たてながら走ってくるな」と思っていたら、急に揺れが始まって、そこから辺の屋根の瓦が雨のように落ちてきたんです。私たちは高架の下に入って、立っておられんからしゃがんで揺れが収まるのを待ちました。

家の近くまで帰ってくると、近所の人に「大変よ」と言われたので、家を見たら、裏の石垣がいっぱい落ちてきて、八畳間がつぶれてたんです。部屋の中には石がごろごろして、庭には割れ目が一直線に入っていました。長女は自宅の2階にいたので、怪我も何もなかったんですが、おふくろは普段その八畳間にいたんですよ。ちょうど外に出ていて助かりました。

家の中の皿とか食器とかは何ともなくて、そのまんまなんですけど、ボール転がしたらコロコロという感じで、家全体が傾いているのが気持ち悪かったです。



植えたばかりの種イモが、地震で全部飛び出した

(呉市 70代 男性)

私は畑にいて、ちょうどジャガイモを植え終わったところでした。地震の揺れがドーンときたんです。そしたら、ウネが全部なくなって、種イモが全部上に出てきました。「こりゃ大ごとや」と思って帰ったら、近所の人が集まっています。「石垣がだいぶ、いかれとるよ」と言われました。

私は家からカメラを取り出して、壊れた石垣の様子を写真に撮っておきました。後々、その写真が市長さんや東京の大臣さんの所にも行ったらしいです。急傾斜の被害の様子がよく映っていたんでしょうな。

地震で一番困ったのは、住むところですね。自宅に通わなきゃいけない事情があったので、できるだけ近くの市営か県営の住宅に入れてもらえないか、自治会長さんに相談に行きました。運良く近くの住宅に一軒空きがあって、「中はきれいになってないけど」と言われましたが、「それでもいいです」と言ってすぐに入れてもらいました。



崩れたのは盛り土だけ

～崖の上の暮らしは難題山積～

(呉市 60代 女性)

崖の上の家を片付けるのは大変でした。重機が入らないところなので、崩れた瓦とか塀を取り除くにも、個人で業者に頼んだらすごい費用がかかるなと思っていたんですが、外部のボランティアさんに手伝ってもらって、本当に助かりました。階段にすらっと並んで一つ一つおろしてくれたんですよ。

最終的には、家は手放すことにしたんです。土地を市に寄付して立ち退けば、工事費用を補助してもらえることになって。そういう行政からの支援も、わりと早くしてもらえたので助かりました。

ここは下が岩盤だから、地震には強いんですよ。でも、盛り土のところだけが崩れてしまって。大学でも調査研究が入ったので、そういう報告書とかの情報は、今でも自治会長さんが回覧板でお知らせしてくれているようです。

でも、崖の上に暮らすって大変なんですよ。台風や雨に備えて、庭から水が浸み込まないように、コンクリート舗装するとか、石垣に排水パイプをつけるとか、とにかく排水をちゃんとしないといけないんです。そうでないと、崖が落ちてしまいますから、お金のかかる管理ばかりでね。



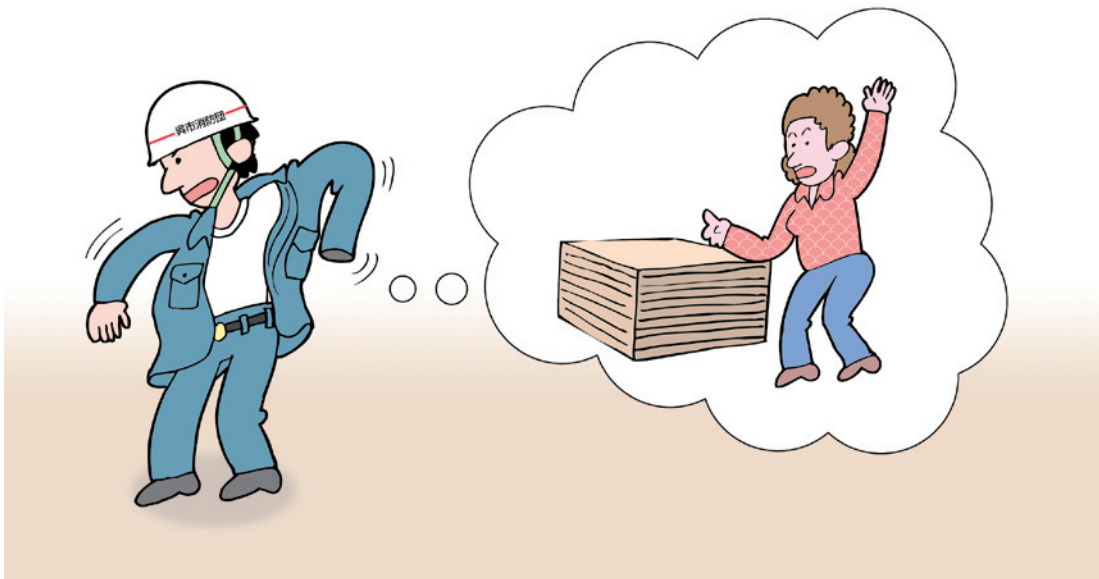
指令待たずに消防団の服着て駆けつけ

(呉市 60代 男性 元消防団員)

土曜日、たまたま市外へ出かけていたのですが、地震が起きたのですぐに呉へ帰って来ました。家の近くへ来るとだんだんひどいことになっていてビックリしました。

女性の自治会長さんから、「ブルーシートを配るの手伝って」と言われたんで、消防局から指令があったわけでも何でもないですが、すぐに消防団の制服を着て手伝いに行っただけです。地元がSOS出しているんだから、助けるのが一番やと思って。まず、自治会長さんが現場を見てOKと判断した人に配っていったんですけど、それ以外の人を取りに来たときには、少しもめましたね。

その後で、ブルーシートを屋根にかけてまわった時には、市からは「危ないからやってくれるな」と言われたけど、「気に入らんやったら消防団の制服を脱いでボランティアでやる」と言って、とにかくやりました。市のいうこともわかるけど、それでは何も進まんからね。



「あんたがやるんよ」

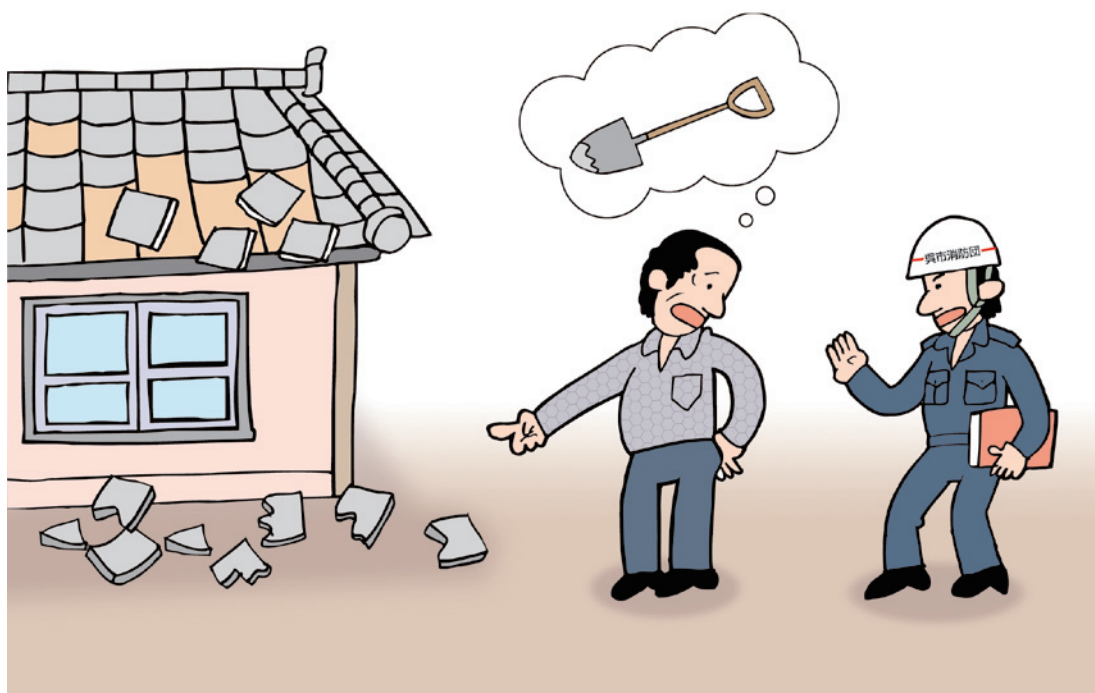
～わざとスコップ持たずに地域の見回り～

(呉市 60代 男性 元消防団員)

地震のあと、地域の見回りをしていると、「うちのガレキは誰が片付けるん」って声をかけられました。「あんたがやるんよ」と言ったら、不満そうな顔をされましたね。

私は、被害はそれほどでもないのに、自分の家の瓦も自分で片付けない人がいるんだと、ちょっと残念に思いました。で、それからはわざとスコップを持たずに歩きました。

被災して人に頼りたい気持ちはわかるけど、どこでも地震が起こる可能性があると言われてるんやから、みんながその気になって用意せないかんと思います。うちの自治会では、自分たちで土のうを作るようにグランドゴルフ場のそばに砂を用意しているし、いちばん山の上の自治会なんかは、防災倉庫を作って、そこにスコップなどの道具をいっぱい揃えています。その会長さんは、「消防はすぐ来やせん。ここまで来るのに20分はかかるだろうから、その間はわしらで何とかせなけん」といつも言っていますが、ほんとうにそのとおりだと思いますね。



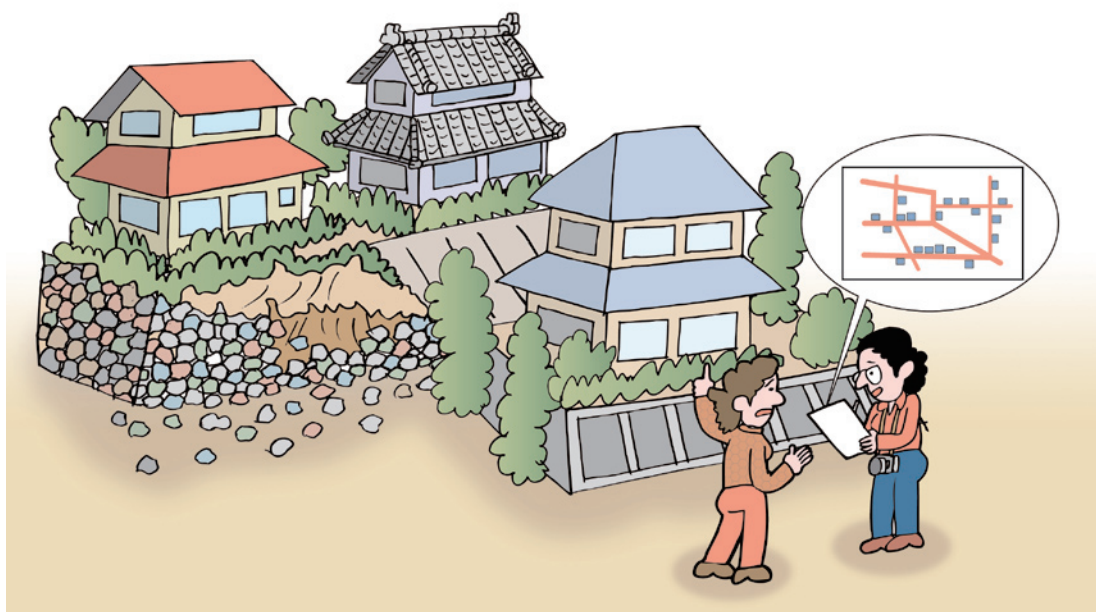
被災情報をまとめて役所へ向かう

～子供の安否はさておき～

(呉市 50代 女性)

地震のとき、私は1階におりまして、いろいろなものが棚から落ちてきましたが、柱を抱えて揺れが収まるまで立っているのが精一杯でした。しばらくすると、裏に崖がある家の人から「大変！崩れた！自治会長さん来て！」という電話があったので、地図とカメラを持って出かけました。電話をもらった家にたどり着くまでにも、被害にあった家がたくさんあって、瓦が落ちているとか、地盤がどうなっているとかが、そういうのを全部メモしながら、現場写真を撮って行ったんです。

調査から帰ったときに、「そういえば、うちの家族はどうしたの？」と、子供のことを思い出しました。夫は地震のときに家にいたのですが、子供二人は出かけていて携帯もつながらなくて。4時間ぐらいたった夜の19時半ころですかね、娘が広島のおばあちゃんのところに泊まると連絡してきました。息子とは連絡がまだだったんですが、「まあ、大丈夫やろ」と思って、20時過ぎくらいに、地区の被害情報をまとめて役所に向かいました。その日はとりあえず、ブルーシートと土のうをもらって帰りました。



地震で上に何かあったら下へ、高潮で下に何かあったら上へ

～隣接の7自治会で助け合い～

(呉市 50代 女性)

私らの地区はこういう急傾斜地なんですけど、下の地区は平地なので被害が全然なかったんです。被害がないところって、あんまり情報がないんですよ。ボランティアさんが下の地区で、「被害のひどい地域には、どこから行くんですか？」って聞いたときに、「知らん」って言われたそうなんです。ボランティアさんは「なんと変な街だな。冷たい街やな」って思ったみたいなんですけど、被害のあったところと、ないところでは、必死さが違って、下の方は「知らんわ」で済んでいたんですね。

それをすごく感じたので、地震の後で、自主防災組織を立ち上げるときに、私は「7自治会そろわんと自主防災組織は立ち上げない」って頑固に言いました。「一緒に立ち上げましょう」ってね。だって、下の地区は海が近くて、高潮が来た場合には浸かるんです。だから、高潮のときは、私らの地区へどうぞって言える仕組みを作りたかったんです。上で何かあったら下へ、下で何かあったら上へ、って7自治会の中で助け合いができればいいなと思って。



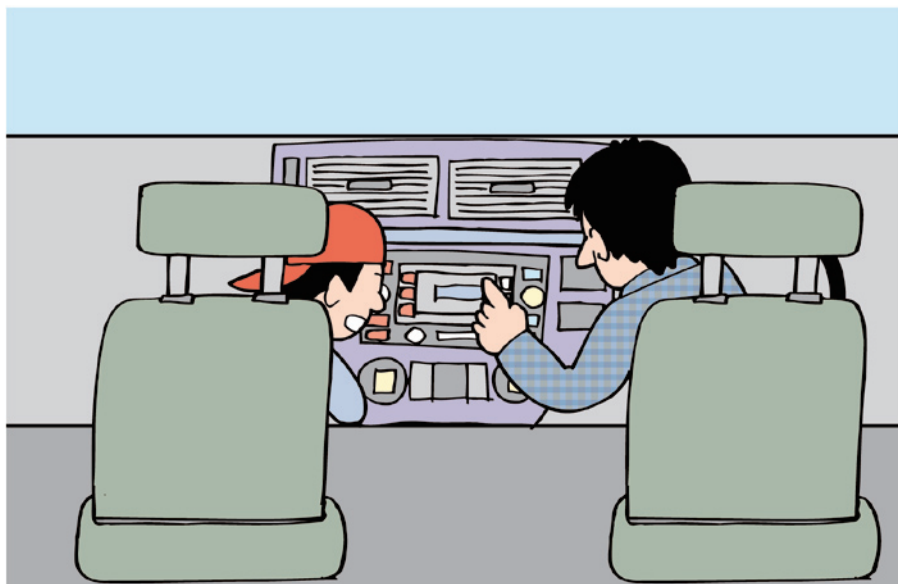
運転中で地震の大きさ気付かず

～カーラジオで規模知り職場へ直行～

(呉市 50代 男性 市役所職員)

地震が起きたときは、ちょうど土曜日でしたので、子供を連れて広島へ行くため、車に乗っていました。信号待ちをしているとガタガタしだして、最初は地震だとは思わず、車の調子が悪くなったかなと思いました。揺れが長く続くので地震だとわかったのですが、車の中にいたので、そんなに大きいとは感じませんでした。カーラジオをつけると、なんだか大きな地震みたいなことを言っていたので、すぐに職場に行かなきゃと思い、車で引き返しました。職場から自宅が近くて、子供も中学生だったので、子供は職場から歩いて帰らせました。

市役所に来たらガラスが割れていたり、壁にはヒビが入っていたり、ロッカーや机の引き出しがいろいろな方向にとび出たりしていて、部屋の中は足の踏み場もないような状態でした。とにかく職員を集めなきゃいけないとは思ったんですが、電話が混雑してつながらない状況でした。



地面がうねって見えたゴルフコース

～即座に中止し、役所に参集～

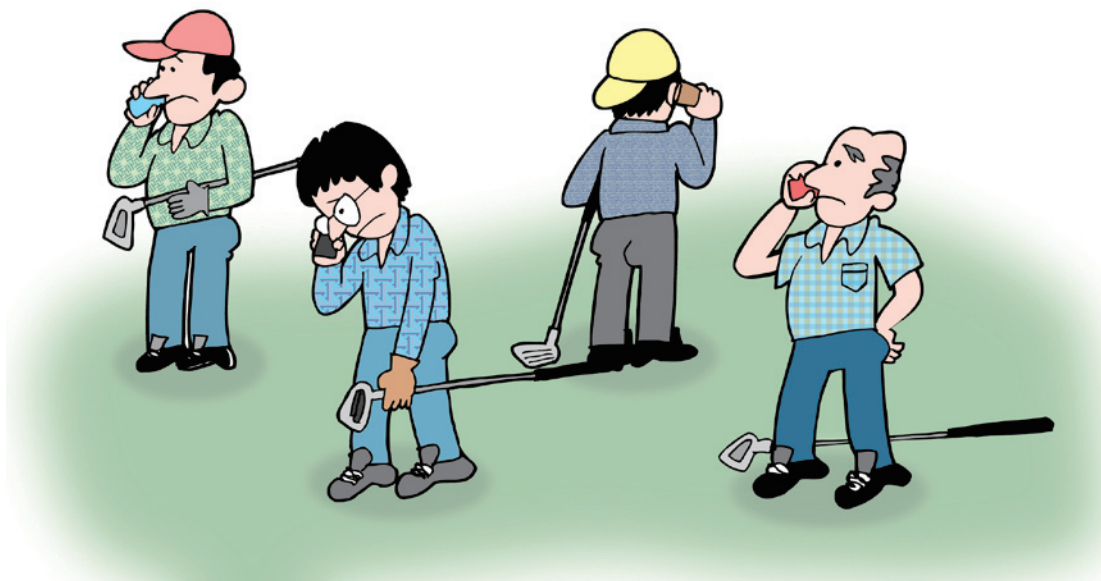
(呉市 50代 男性 市役所職員)

芸予地震は、平成11年の豪雨災害*から2年後に起きました。豪雨で犠牲者が出たので、職員での慰安旅行やレクリエーションも全部控えていたのですが、久しぶりに部でゴルフ大会を開くことにしたちょうどその日でした。ゴルフの最中に地震があり、ゴルフコースの平べったい地面がうねるところを見ました。こりゃ大きな地震だということで、各自が携帯で家とか役所に電話しましたが、どこに電話しても通じなかったので、これは何かあったんだと思い、即座にプレイを中止して役所へ向かいました。

豪雨を経験して、職員にも危機管理の意識ができていたので、自主的な参集ができたんだと思います。それまで、神戸の六甲とか芦屋とか被災地を回って見てましたけど、まさか呉で地震が起こるとは誰も思っていないからね。

私は役所へ向かう車中で家族と電話がつながり、家族は無事で自宅は瓦が落ちている程度ということがわかったので、そのまま職場へ行って、すぐに被害調査に出ました。それから3日、4日帰らなかったのですが、実は自宅は屋根瓦はないし、中はぐちゃぐちゃで大変なことになっていました。たまたま通りかかった人が消防団へ言ってくれて、消防団の方に応急処置してもらったみたいです。女房にはいまだに「いてほしい時におらんで」と言われますよ。

*平成11年の豪雨災害とは、平成11年(1999年)6月末梅雨前線豪雨のこと。呉市では、がけ崩れや河川の決壊・氾濫などにより、8名が亡くなり、5名が重軽傷を負いました。



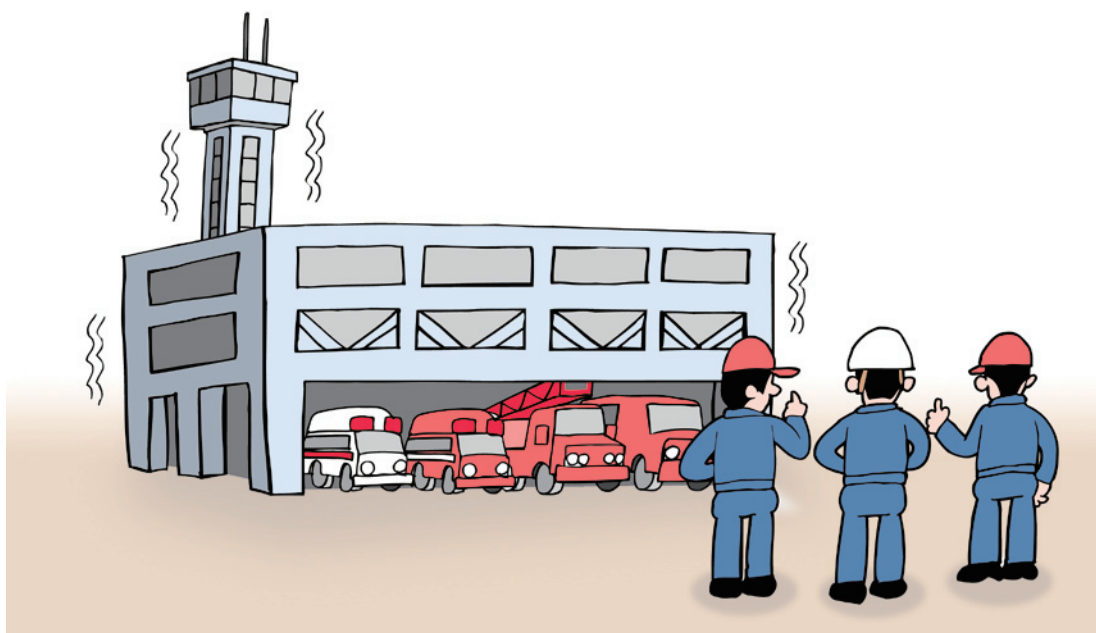
阪神教訓ににとって良かった消防局の耐震補強

(呉市 50代 男性 市役所職員)

阪神・淡路大震災の教訓を踏まえて、平成9年に消防局は建物の耐震補強をしました。スペースはものすごく狭くなったんですが、部屋の中まで全部筋交いをいれました。芸予地震の時は、望楼*がグラグラ揺れたんですけど、なんとか折れずに済みました。アンテナが設置されている望楼が倒れると、消防無線がものすごくダメージを受けるので、あれ耐震補強しとって良かったね、という話を仲間うちでしました。

阪神・淡路大震災の教訓で、被災宅地危険度判定士とか、応急危険度判定士とかの制度ができていますが、勉強をして判定士にメンバー登録している市の職員もいるんですよ。

*望楼とは、火災の発見などのために設けられた見張り台で、火の見やぐらともいう。



まさかここに地震が来るなんて…

(栗原市 50代 男性)

からだか横に飛んだという感じでしたね。何回も行ったり来たりの大きな揺れがありました。よく地震が来たらどこかに入れとか言いますが、もうそんな余裕はなかったです。モノというモノは全部落下しました。不思議とからだにぶつからなかったので、ケガはしませんでした。が、「運が良かった」のひと言です。

このあたりは、専門家の人たちも災害のないところと言っていたので、わたしたちも地震に対して全く注意していませんでした。それが突然に来たわけです。

地震の揺れは局地的でしたね。こことすぐ下の集落と、さらにまたその向こうと全然違うんですよ。同じ地域でも家がどっち向きに建っていたとか、地盤がどういふところに立っていたかで全然壊れ方が違うし、まったく被害のないところもありました。

あとで調査に来た専門家の人たちが言っていたのは、加速度*がばかみたいに大きかったということなんですよ。うちの木のドアとその上の敷居との間も2、3ミリしかあいてないんですけども、それらがぶつかってついたと思われる跡が2ヶ所、敷居にはっきりとついています。

絶対に地震が起こらない地域なんてないんだなと、今はそう思います。

*加速度とは、地震の揺れの規模のこと。



軽トラック横転、必死の脱出

～道路が真ん中から「パーン」と割れた～

(栗原市 60代 男性)

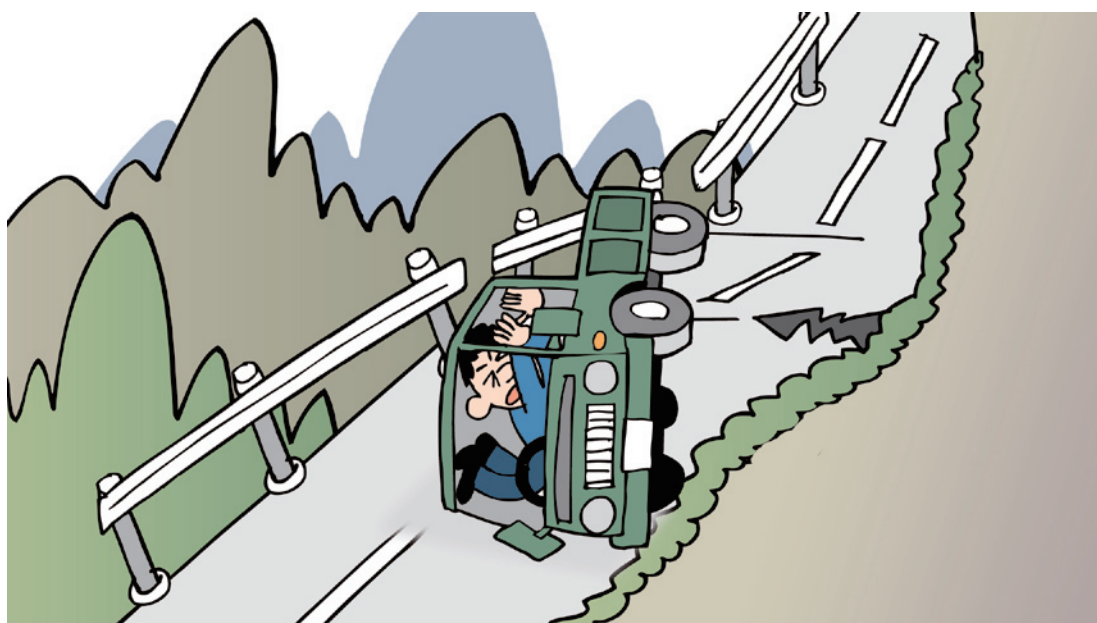
その時私は、今回の地震で大きく崩落した近くの尾根道を軽トラックで走っていました。で、ズンと急に車が持ち上げられたのです。ふだん石とか木の枝とかを踏んだときのような感じがして、「あれ、何もなかったよな」なんて思っているうちに、揺れ始めました。「あ、地震だ！」と、かなり大きな地震だと思って車をとめました。

そうしたら、道路が真ん中からパーンと割れて、その割れ目に車の右側の前輪後輪が入っちゃった。で、もう動けないわけです。

「わあ、何だろう」って、一瞬何だろうでしかないんです。そう思うまもなく道路の側面がドドドンと崩れていって、振り返ると、今通って来たところが、もう赤土の山に変わっていました。

そうしているうちに、今度は2つに割れた道路の片側だけが、ポーンと1メートルぐらい下がっちゃって、乗ったまま、軽トラックがズルズルズルっと横向きに倒れてしまったんです。

「うわ、巻き込まれる」と思って、車のドアをあけて出ようとしたらこれが重いんですね。後から思えば、窓のガラスを下げれば簡単に出来るのに、あわてていたからドアをあけなきゃと必死でした。



「ここにいるよ！」と笛をひと吹き

(栗原市 60代 男性)

地震で道路が割れて、運転していた軽トラックもろとも横転してしまい、何とかかんとか車からはい出して、一応安全かなと思うところに逃げ込んだんですが、余震が来て、また道路にひびが入ったんですね。

怖かったけれど車に戻り、靴を山用に履き替え、リュックを持って、車から離れた広いところへ避難したんです。山岳救助隊の隊員でもあるので、私のリュックにはいろいろなものが入っているんです。で、「さあ、どうするか」ですよ。歩いて山を越えたとしても、自分の住む地区も多分山が崩れているだろうし、山岳会では「何かあった時は動くな」というのが鉄則ですから、その場でじっと動かずに待っていました。

1時間ぐらい経ったころ、地元の人たちが見回りに来たらしく話し声が聞こえてきたのです。「おおい！」と呼んでも答えがないから、今度は笛を吹きました。すると、すぐに区長さんが来てくれて、「とにかく避難所に行きましょう」と。

笛というのは、200メートル、300メートル先まで聞こえますからね。持っていてほんとうに良かったなと思います。



効果あり、天井までのすきま家具

(栗原市 40代 女性)

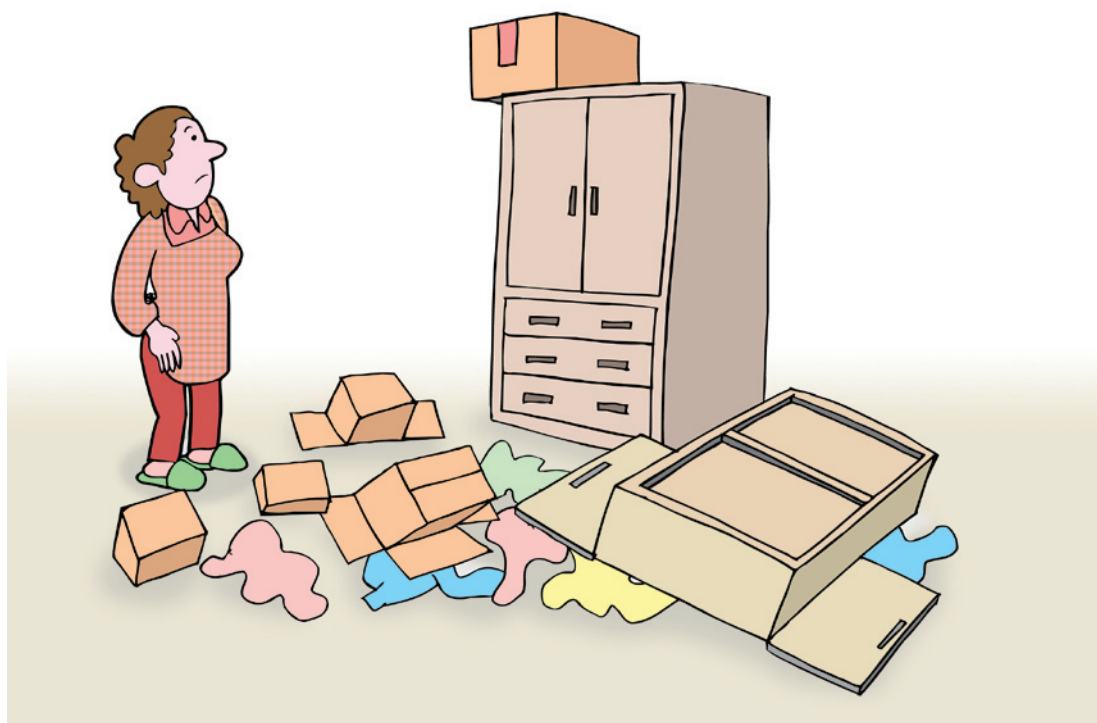
うちは豆腐店です。朝、おばあさんたちが『豆腐すり』が終わるころに、ドーンと揺れて、テレビが6センチぐらいポンと持ち上がりました。一瞬「はてな？」という感じだったんですけど、その後にドドドって来て、上から大きな物が落ちてきたので、「あ、だめだ。普通の地震じゃない」と思いました。

で、そばにいた孫たちを抱えて立とうとしたんですけども、もう立てないんですよ。二人を引っ張るようにして、テーブルの向こう側まで行くのがやっとでした。

家の中は、茶ダンスは倒れ、テレビは倒れ、めちゃくちゃでしたが、上に額縁がいっぱい飾ってあったのに、ぶら下がった状態で下まで落ちなかったのは幸いでした。

今回の地震を経験して、上に物があるというのは危ないってわかったんですけども、「でも、置く場所ないし」って、いまだに高いところに物があるんです。

ただひとつ、地震当時、天井とのすき間にぴったり入る大きさの箱に物を入れてダンスの上に置いていたら、そこだけはあまり動きませんでした。災害に備えるというテーマのテレビ番組を見てやっていたものですが、たしかに効果はありましたね。



思い知った水の有り難さ

～一瞬にして沢の水止まる～

(栗原市 40代 女性)

大きな川もあるし、沢々にはきれいな水が常に流れていますから、水で苦労するなんてだれも考えていませんよ。それが地震発生後、一瞬にして沢の水も止まったのです。あんなに流れていた水がどこに行ったんだろうと思いました。出ていたわき水も濁っていないのは一つもなく、泥んこの水という感じになっていましたね。

当日私たちが避難した集会所も水が出ませんでした。下に降りればいくら水が出るだろうということで、みんなで一番低いところにある家のほうに行って、ペットボトルに水を汲んできては、持ち寄ったバケツに集めるということをやっていました。水は茶色に濁っていたけれど、厚紙をかけてごみが入らないようにして、なるべく上澄みを使おうって。

その茶色の水でご飯を炊いたのですが、汚れた手を洗う水もなく、ラップの上からおにぎりを握って、みんなに出していました。トイレに行っても、だれも手も洗っていなかったと思いますね。水の余裕は全然ありませんでしたから。

体力のない子どもたちは水でおなかをこわして、しばらく病院に通わなければなりません。何と言っても、やっぱり水は大事だと、つくづく思いましたね。



役に立った保存水と意外に使えた発煙筒

(栗原市 60代 男性)

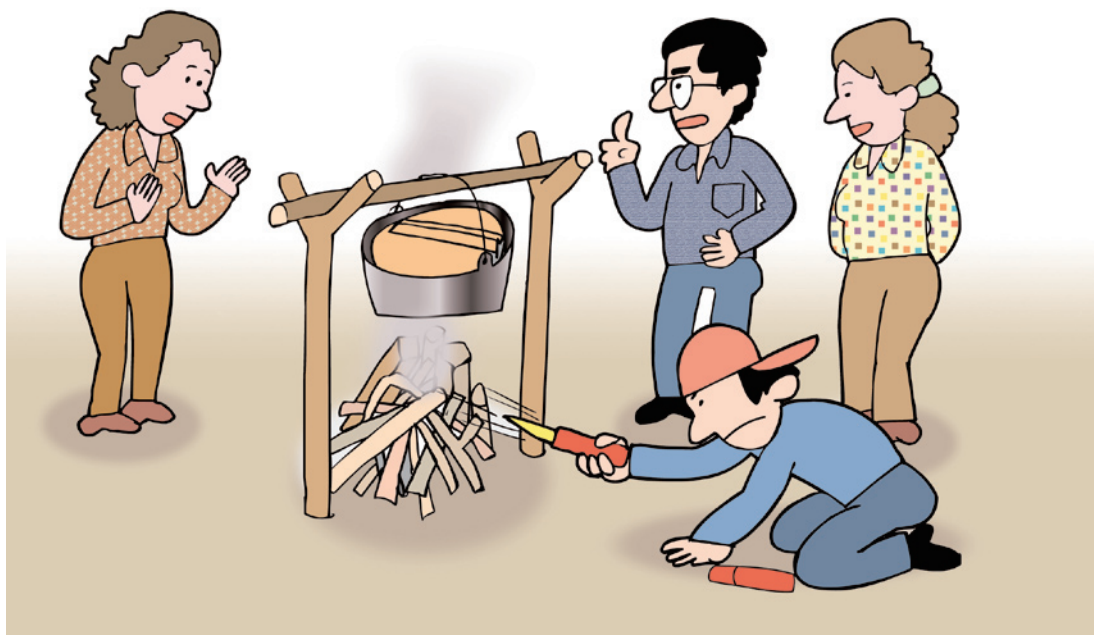
前の宮城県沖地震*当時、仙台の方に住んでいて、やっぱり水で苦労したのだから、10年だかもつってというペットボトルの水6本入りを買っていたんですよ。

ここに移住する時に、「山の中でわき水も豊富だから、もう使わないだろう」と思いながらも倉庫に入れておいたら、それが今回うんと役に立ったわけです。

それから、こういう災害の時に割と持っていて便利なものは、発煙筒です。何に使うかというと、発煙筒2本ぐらいで、枯れ木にはすぐに火がつくんですよ。だから、暖をとることも、煮たり焼いたりすることもできます。

発煙筒って、どの車にもひとつはついてますよね。以前は修理工場に行くと車検の時に交換した発煙筒がいっぱいあったんです。私は、そういうのを100本ぐらいもらってきて、山岳会の人たちに「何かあった時のために、5本ぐらいずつリュックに入れて歩きなさい」って、あげていました。それを思い出して使ったわけですが、思わぬところで意外なものが役に立ったなという感じです。

*昭和53年(1978年)6月12日に仙台市を襲ったマグニチュード7.4(震度5)の地震で、死者16人、重軽傷者10,119人、住家の全半壊が4,385戸、部分壊が86,010戸という多大な被害が生じました。



縦揺れでストンと落ちた窓ガラス

(栗原市 80代 男性)

朝ご飯の支度をしている時に地震が起きて、湯立ったなべが飛んできて体にぶつかりました。飛び散ったお湯が首もとにかかりましたが、幸い首の長い服を着ていたので事なきを得ました。歳をとると、やっぱり若い人のようにパッと体が動かないんですね。

あの時、あたり一面、頭の裂けるような、ものすごい音がしました。「何が起きたんだろう」と思って、揺れが止まってから家の外へ出てみると、裏のほうが真っ赤に染まって見えました。山が崩れて、そこにあった杉の木が根もとから全部落ちてちちゃって、赤い土がむき出しになっていたからなんです。

揺れ方も場所によって全部が全部一様じゃなかったみたいです。私のところはまさに直下型。いきなり縦にガタッと来て、上下に激しく揺れました。だから、窓ガラスは割れないで、戸を外すみたいに窓枠ごと全部ストン、ストンと下に落ちていました。不思議ですね。



不安から希望へ

～道路工事の進み具合を知り、気持ちも前向きに～

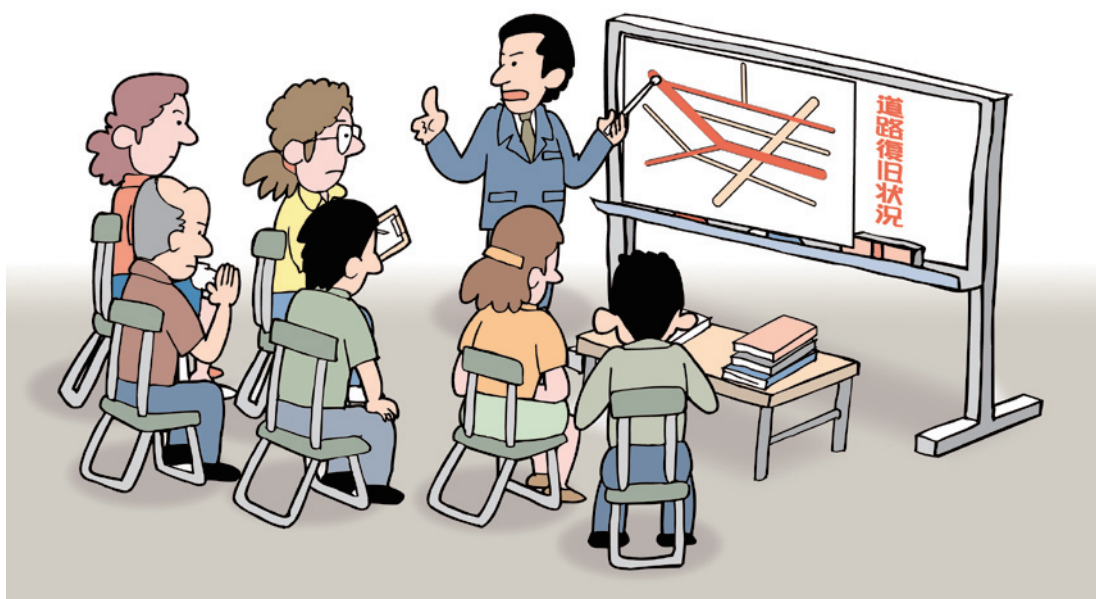
(栗原市 60代 男性)

被災して、自分たちの住むところから外に出されて、集団生活をするわけですが、やっぱりその時には、まず自分たちが先行きどうなるのかなということが心配なのです。その見通しというやつが見えないと不安なんですよね。だから、何を見ても、何を聞いても、何を食べても、うわの空でした。

果たしてもとの生活に戻れるのか、「これからどうするべ」というのがわからんうちが、ほんとうに苦しいんですよ。だから、本音で言えば、やっぱり1カ月ぐらいは、「もうほっといてくれよ」という感じでしたね。

で、避難生活に少しずつなじんでくると、山に戻るための道路をつくってもらえるのかとかが気になり出しました。行政がどのように考えているのか、ひょっとしたら集団移転させられるのかという不安もやっぱりありました。

でも、早い時期に県知事が、「被災地を見捨てはしない。必ず復興させる」というコメントを発表してくれましたし、国とか県の方たちが、大きな図面とかを持ってきて、道路工事の進捗状況を途中途中で開示してくださったので、私たちの気持ちもだんだん前向きになっていきました。



判子と通帳もってきて

～何度もヘリで貴重品をとりに家へ戻る～

(栗原市 50代 男性)

余震が起こって危険だから、山から全員下りなくちゃならないと言われたときは、目の前が真っ暗になりましたね。「これから先、どうなるんだろう」という、地震と同じぐらいの衝撃でした。「とりあえず家に1回戻って、貴重品だけ持ってヘリに乗るように」という指示でしたが、家の中はもうメチャメチャですから、持っていきべきものが見つかりませんでした。

その後も何回かヘリコプターで物をとりに行かせてもらいました。靴を履いたまま家に入って物を持ってくるわけですが、時間制限があって大変なんですよ。「何時までに、必ず来なかったらヘリは飛びます」と言われてね。おいていかれたらという恐怖のほうがありました。

それから、ヘリは人数に限りがあるので、乗れない人に頼まれて物をとりに行ったこともあります。家の略図をかいてもらって、「玄関があって、ここにダンスがあって、ダンスの引き出しの3つ目の真ん中に判子と通帳があるから、もってきてくれ」というわけですが、ダンスも何もひっくり返っていて、図面どおりにないのには困りました。



避難するときはまわりに言づけて

～行く先わからず安否確認に手間どる～

(栗原市 60代 男性)

山道で地震に遭って、そのままその地区の避難所に連れていってもらったものだから、私自身「行方不明者」のひとりになっていました。午後4時過ぎにNHKの取材を受け、それが6時の全国ニュースで流れて、「ああ、生きてる!」ということになったわけです。

そんなわけで、集落の皆さんに大変な心配をかけたうえに、区長としてその日絶対にやらなければいけなかった安否確認などもできなくて、「何の役にも立たなかったな」と、今もそういう気持ちでいます。

翌日の午前中になって、ようやく地元の避難所に移動することができ、さっそく皆さんの安否確認を始めました。ひとりずつ全員をチェックしていったのですが、子どもさんが来て連れていったとかいう人たちは、何も言わずに行くものですから、電話番号を調べたり、行き先を確認するのに、すごく時間がかかりました。

とにかく誰もが自分が逃げることしか考えていませんからね。「ドコドコへ行くよ」なんて言づける余裕はないわけです。やっぱり、前もって情報を出し合っておくことが必要だなと思いました。



安否確認は、日頃の近所づきあいでスムーズ

～苦労したのは、情報収集～

(栗原市 40代 女性)

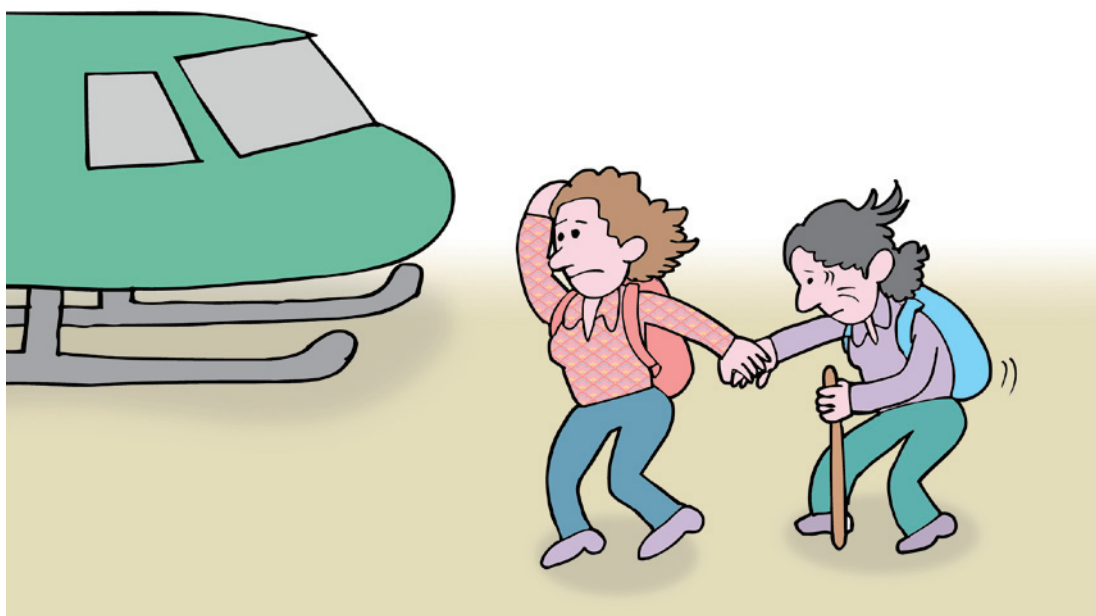
役場の方たちが来て、「2時に自衛隊のヘリが来ます。歩ける人は歩いて下りてください」という話があって、ヘリに乗って避難する人は、2時間の間に必要な荷物を持って集まることになりました。

時間が限られているうえに、地震で家の中もガタガタになっているものだから、1人暮らしのおばあさんなんか、保険証はどこにいったかな、あれがない、これがないって言って。で、私も家の中に入って一緒に探してあげて、あるだけのものと着替えになりそうなものをぱっと詰めて、ヘリの乗り場まで連れて行きました。

この集落ではこういう近所づきあいは普通なんです。町場と違って、ここにどういいう人が住んでいて、子供はどこへ行っていて、ダンナさんはどこに勤めに行っているとかは、みんなわかっているから、安否確認の面ではよかったと思いますね。

ただ、停電でテレビもつかない、車のラジオはガーガー言うだけで聞き取れない、携帯電話も通じないといったことで、情報がまったく取れませんでした。だから、「来る、来る」と言われていた宮城県沖地震がついに来たかと。前の宮城県沖地震*の時には全く被害がなかったのに、「ここがこれだけやられたのだから、きっと仙台のほうは壊滅的だろう」と心配していました。

*昭和53年(1978年)6月12日に仙台市を襲ったマグニチュード7.4(震度5)の地震で、死者16人、重軽傷者10,119人、住家の全半壊が4,385戸、部分壊が86,010戸という多大な被害が生じました。



宿泊施設の食料に感謝

～シーズンに向けたストック活かす～

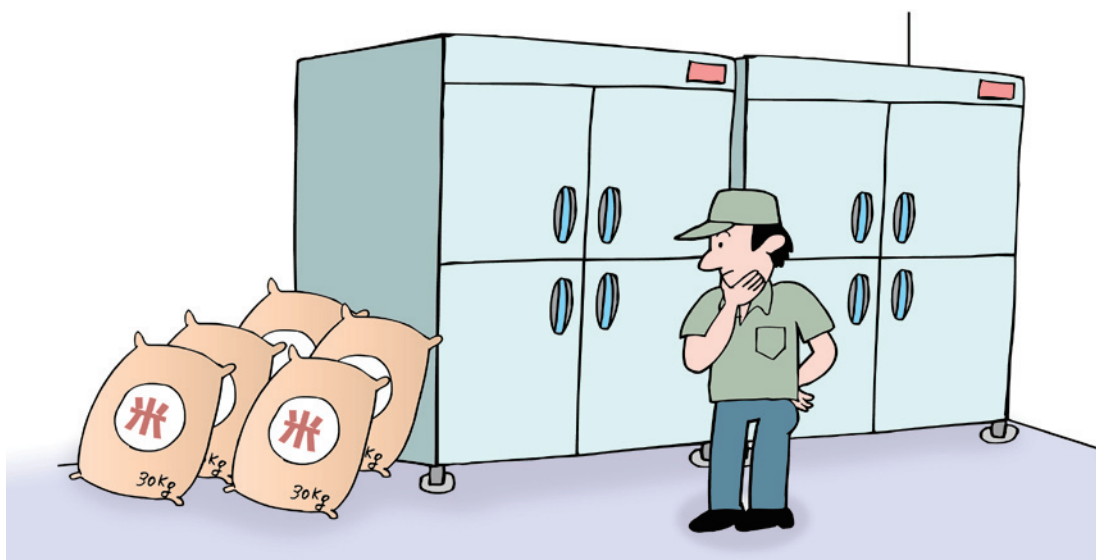
(栗原市 60代 男性)

地震発生と同時に電気と電話、携帯も通じなくなっちゃったんです。だから8時43分の地震発生から、行政との連絡がつき始めた11時半を回るまでは、地域の人たちだけで対応しました。

で、区長の私は、全員が下山するんじゃないかと、まずけが人、病人、あとは高齢者、子供を避難させなきゃならないだろうと判断して、みんなで手分けしてそういう人たちに声をかけ、地区の指定の避難所に避難してもらいました。

われわれ若手は、最初は下山するということは毛頭考えていませんでした。というのは、地域内に大きな宿泊施設があって、6月の半ばで、シーズン本番に備え食料をたくさんストックしていたし、私たち農家は、お米は30キロの袋で3つや4つ、いつもみんなストックしていましたから、食料に関しては「1カ月ぐらい下から補給がなくても生活できるね」という状況でした。

避難所となった宿泊施設の厨房が使えたので、そこで煮炊きしました。何と言っても食料が豊富にあって、助かりました。



学校に行かれなくても安心

～先生からこまめにメール～

(栗原市 40代 女性)

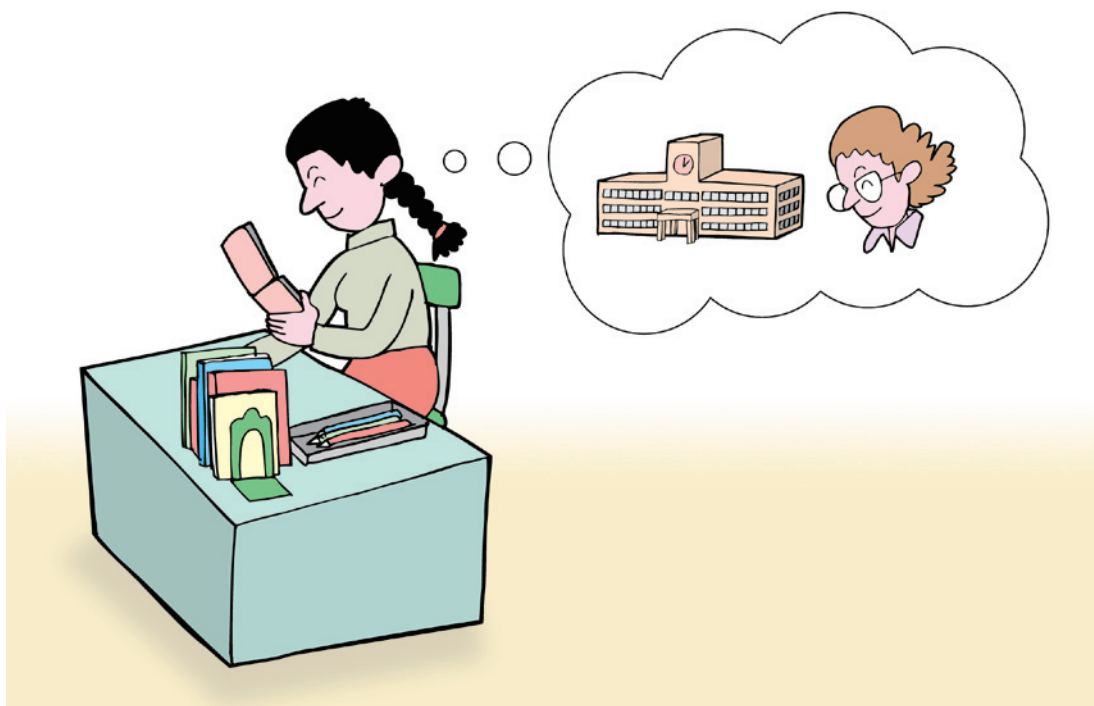
当時、私の娘は高校3年生でしたが、ちょうど模擬試験を受けている最中に地震が起きたのです。でも、ちょうど避難訓練を受けた直後だったこともあり、特に混乱なく避難できたようです。

前の宮城県沖地震*が6月12日だった関係で、この辺の学校はよくその時期に避難訓練をするんですよ。まず全員が校庭に出て、その後、落ちついてから男の子たちが教室に荷物をとりに行ったと聞いています。

親として有り難かったのは、避難した校庭で、先生がみんなの携帯の番号とメールアドレスを控えて、連絡網をつくってくれたことです。その日からしばらく学校は休みになってしまったのですが、「先生たちは、今日、こういう片づけをしたよ」といった便りや、学校からの連絡事項を、担任の先生がこまめにメールで流してくれました。

学校の施設にもかなり被害が出ましたが、「階段がこんなになっちゃったよ」と、先生が撮った写真を送ってくれたりもしました。子どもたちが意外と不安なく過ごすことができたのは、こんなふうに、先生とのコミュニケーションがとれていたからではないかなと思います。

*昭和53年(1978年)6月12日に仙台市を襲ったマグニチュード7.4(震度5)の地震で、死者16人、重軽傷者10,119人、住家の全半壊が4,385戸、部分壊が86,010戸という多大な被害が生じました。



杉の木につかまり、揺れがおさまるのを待った

～チェーンソーで、道路切り開き～

(栗原市 60代 男性)

その日もふだんと同じように山に入って、午前8時から間伐作業を始めていました。ただ、朝に小雨が降ったのか、露っぼかったので、みんなで足場のいい平坦なところで作業していたんです。

そこが思ったより早く終わって、「じゃあ、車のところで一息ついて上にあがろうか」なんて言いながら、みんなで車のそばに集まってきた途端に、地震が来たのです。

立ってられないほどの激しい揺れでしたので、みんな近くの杉の木につかまって、おさまるのを待っていました。最初は、何と言うのかな、恐怖を感じたというよりは、何が何だかわからなかったというのが正直なところでしたね。目の前に小さな石がコロコロ落ちてくるのを見て、「これは、ただごとではないな」って思いました。

道路まで出ると、地面が割れ、大きな石がゴロゴロしているといった状況でした。で、それらをみんなで力を合わせてどかして、何とか軽トラックが通れるぐらいに道路を開けて戻ってきました。途中、山が崩れたところもありましたが、道をふさいでいる木を切るのに、いつも使っているチェーンソーが大いに役にたちました。



「ドーン」、「グラグラ」、まったく動けず

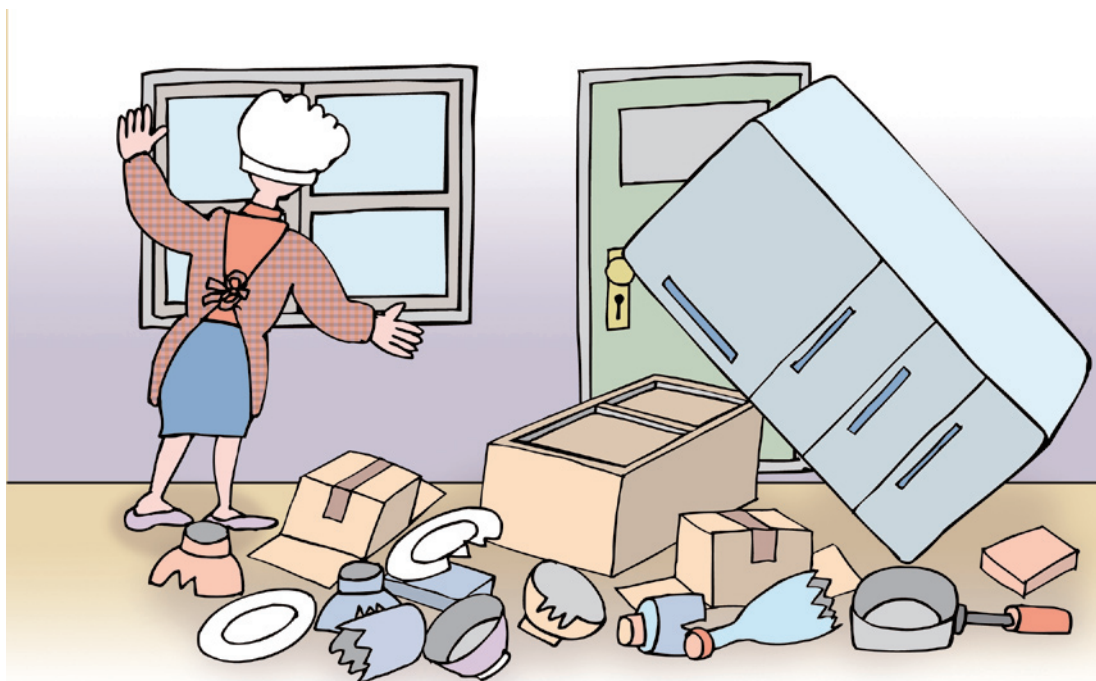
(栗原市 50代 女性)

地震が起きた時は、仕事先の調理場にいました。棚の中の食器は飛び出し、なべやヤカンなどその場にあるものは全部ひっくり返って、お湯やなべに入っていたものなどが飛び散りました。ドーンときて、グラグラ。どこかに隠れるなんてとんでもない。まったく動くこともできませんでした。どのくらい揺れが続いたのか、ずいぶん長かったような気がします。

とにかく外に出ようと思ったのですが、入り口付近は倒れた冷蔵庫やモノがいっぱいで、私ひとりの力ではドアを開けることができませんでした。しばらくして組合長さんが声をかけてくれて、助け出してもらったのです。

で、自分の家に行ってみると、見るも無惨な状況でした。新しく建てた部分は残っていたけれど、古くからある本家は全壊に近かったです。

主人のめがねを探したり、携帯電話を探したりしましたが、どこに何があるかわからないぐらい家の中はグチャグチャでした。仕事場でも運良くケガはしないですみましたが、激しい揺れだと一歩も動けなくなるってことを忘れずに、物が倒れてこないようにしておかなければと思います。



長引く避難生活で苗くさる

(栗原市 50代 男性)

私の家では花の栽培をしています。設備のほうはそれほどの被害はなかったのですが、避難していて手入れができず、ちょうど出荷時期を迎えていたビニールハウスの中の花はぜんぶ満開になってしまいました。手入れをしたくとも、避難指示が出ていて避難しなくてはなりませんでした。

で、その次のために苗木をとって、ヘリコプターで乗せてきてもらって、植えることは植えたんですけども、しょっちゅう行くわけにもいかず、間がいっぱいあいてしまったので、やっぱり雑草がぼうぼうに伸びてしまいました。その雑草に負けて、半分以上の苗がくさってしまったのです。

避難生活も2年近くになりますが、まだ戻れないでいます。生き物を扱う農業や園芸は、やっぱりそこに住んで、ちゃんと面倒をみないとだめなんですよ。自分が地震でこんなたいへんな目にあうなんて、思ってもみませんでした。



経験活かして事前準備

～すぐに役立つ応急危険度判定用紙～

(栗原市 40代 男性 建築士)

役所の人たちも今までの経験から、地震の時には何をしなきゃいけないかというのがけっこうわかってきているんですね。

今回、被災した建物を調査して、余震などによる倒壊の危険性や外壁・窓ガラスの落下、付属設備の転倒などの危険性を判定する『応急危険度判定』のお手伝いをしたのですが、行政の方で、判定に使う緑と黄色と赤の紙をあらかじめ何枚も印刷して段ボールに詰めていたのです。

「地震なんてほんとうに来るかどうかわからない。そんなのは無駄な経費だ」と言った職員もいたということですが、担当課の人は、「これだけは用意しておいたほうがいいんだ」と言って、ゆずらなかつたそうです。

結果的に、どこよりも早くとりかかることができたと評判になりました。その担当者に「動きが速かったですね」と言ったら、「経験者ですから」って笑っておられました。やっぱり事前の備えは大切だなと思いました。



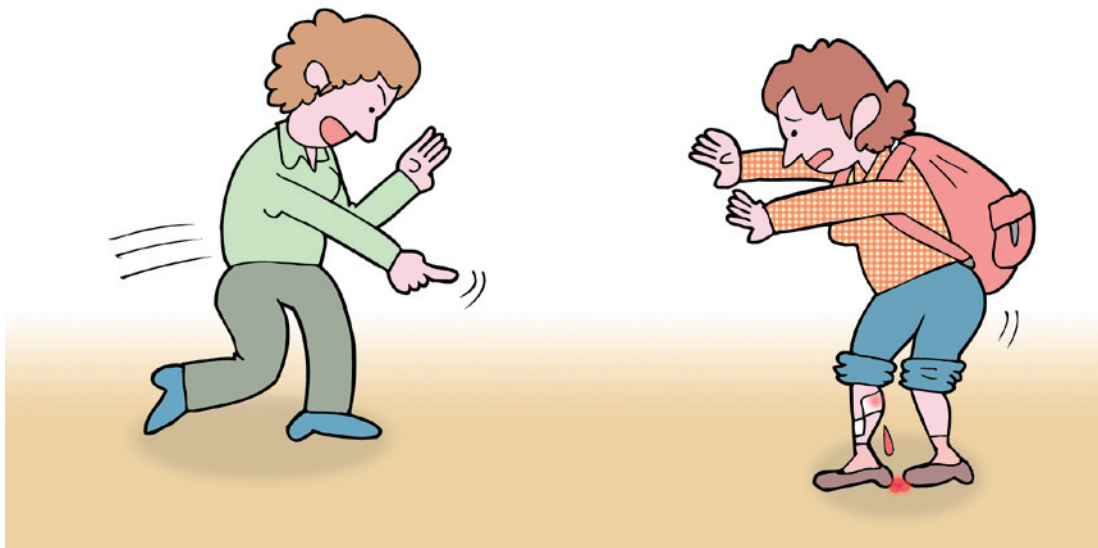
お嫁さんの足はキズだらけ

～川になった道路歩く～

（呉市 70代 女性）

土砂崩れの際には、私のほかに嫁と幼稚園の女の子と2年生の男の子の孫が家にいました。自治会長さんに知らせようと思って出かけるときに、「危ないからここにおりなさいよ」と言ったのに、戻ってきたら誰もいなくて、どこ行ったんやろかと心配で探しまわりました。

町内の方が迎えに来てくれたらしく、家族はセンターに避難していて、そこで再会できました。お互い「良かった」と喜んだんやけど、ふと見たらお嫁さんの足がキズだらけなんですよ。「どうしたん？」と聞いたら、山からの水で川みたいになってる道路を歩いて避難したそうです。子供は町内の方が抱えてくれたんやけど、嫁は自分で歩いたんでしょ、「石やらが当たった」と言っていました。私は慣れてるから、自治会長さんの家に行くにも、センターに行くにも水のない山道を通ったんですが、誰もそんな道知らなかったんでしょね。



間に合わなかった急傾斜対策

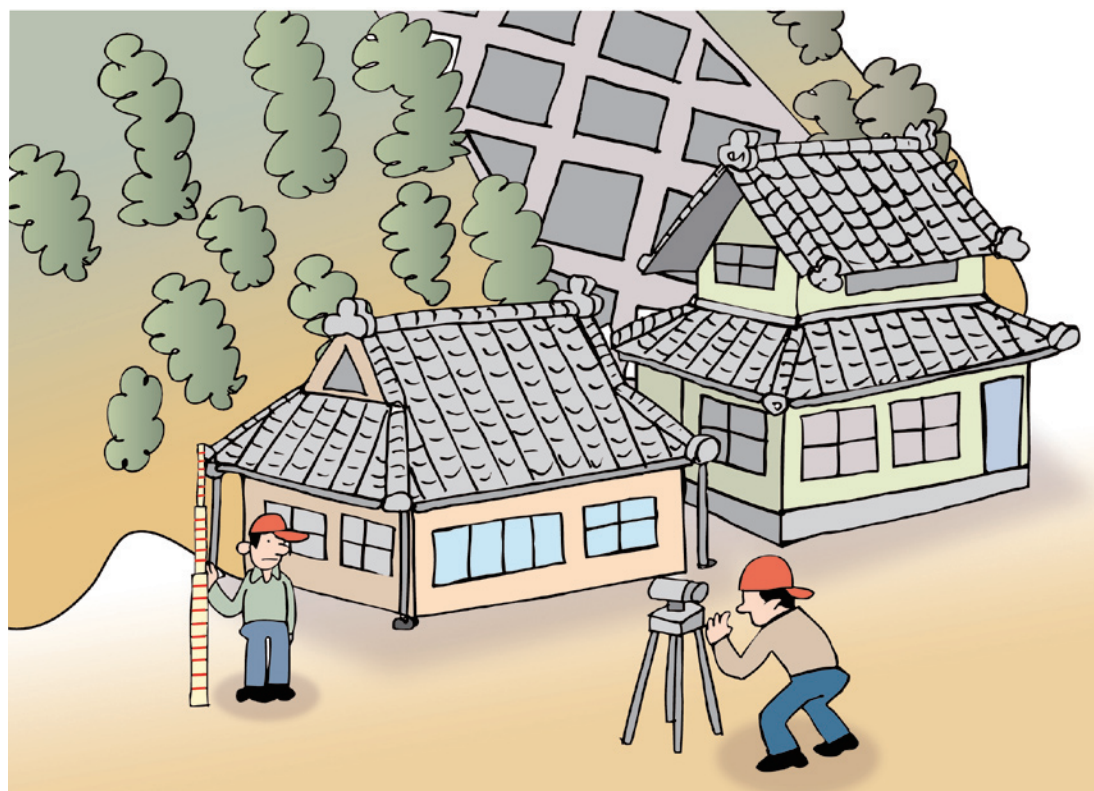
～測量開始が一週間前～

（呉市 70代 女性）

あの日は、山から小石がコロコロ流れ出していたんです。小石が流れ始めると山が崩れるって聞いていたから、心配して隣の家の様子を見に行きました。そしたら、隣の家の裏がすごい滝になっていたんです。私は見た瞬間に、「あ、これ危ないよ、避難せにゃいけんわ」って言ったんですが、家の人に「なあに、大丈夫よ」って言われて、私は怖くて家に戻りました。

帰ってしばらくしたら、ズズズ、ドーンという音がしたんです。土砂崩れが起きるなら、うちの裏か隣の家と、以前からわかっていたので、窓から隣の家を見たら家がないんですよ。3回くらい振り返ってみたんですが、やっぱりない。信じられませんでした。流されていました。

うちの裏は急傾斜対策の工事を済ませていたんですけど、隣の奥さんは、ずっと工事に反対していましたね。山の持ち主の許可もあって、とうとうご主人が印鑑をつけて、ちょうど山が崩れる一週間くらい前から、業者が測量を始めていました。「ああやっぱり工事するんやな」と思って安心していたんですが、間に合わなくて残念でした。



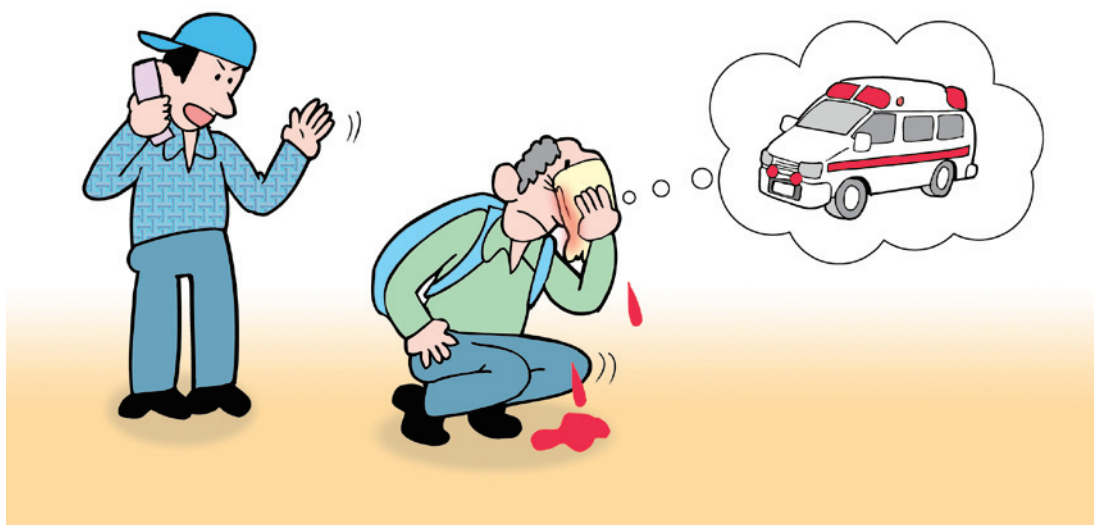
救急車来ず、自力で病院へ

～ 3回目の119番に「行けません」～

(呉市 70代 男性)

災害が起こった日は家内と広島に出かけていて、ものすごい土砂降りの中を家に帰ったところでした。玄関先に着いても、車から降りるのを躊躇するくらいの雨だったので、2、3分車内で待ったんですが、やみそうにないので、決心して家に走り込みました。着替えようと2階に上がってすぐ、雷が炸裂したみたいなドッカーンという大きな音がしたんです。その瞬間、私は家内に、「どうやら山が裂けたみたいやから二人とも生き埋めになるかしらんよ」って声をかけて、体は山の方にむかって身構えたんですが、家に土砂がぶつかった衝撃で整理ダンスの上の方が飛んできて、額を切ってしまいました。

すぐに近くの会社の建物に避難させてもらったんですが、血がとまらないものですから、救急車をよんでもらいました。ところが、20分しても来ない。もう一回電話したら、「行きます」と言うんですが、まだ来ない。しばらくして3回目に電話したら、「行けません」と言われました。あとから聞いた話ですが、あまりにも119番通報が重なり、消防署も動きがとれなかったみたいです。結局、自分で病院を探すことになって、病院を2軒まわってやっと2針縫ってもらいました。



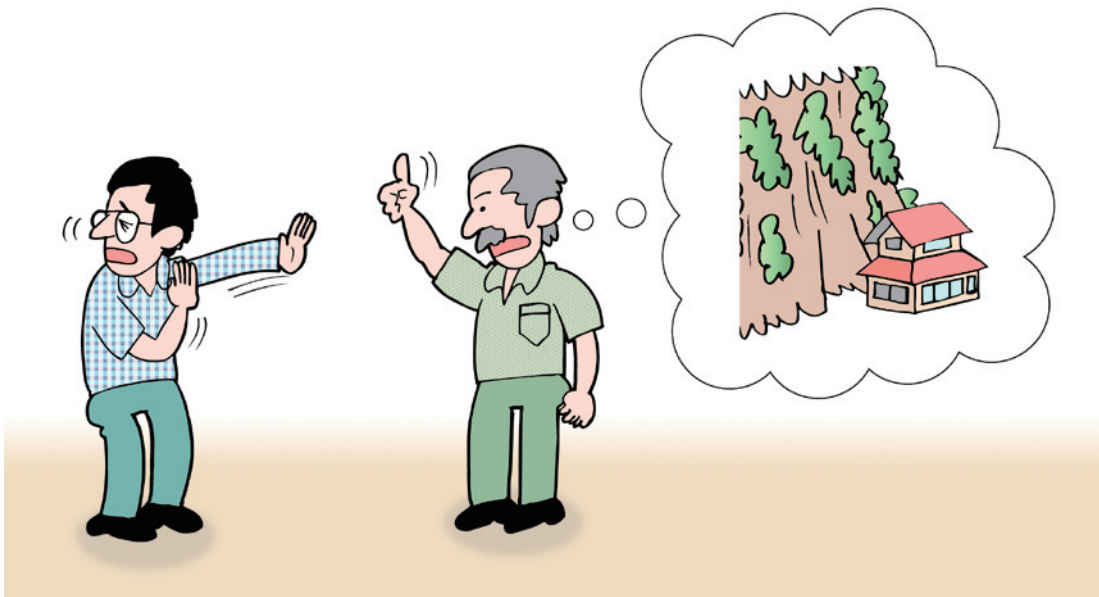
やっぱりあそこは危なかった

～時がたてば岩も風化する～

（呉市 70代 男性）

私もあそこに家を建てるときに心配はあったんです。それでいろいろ人に聞いて回りましたが、「あそこは岩山じゃけん崩れることはありませんよ」と、何人ものお年寄りが言われたんで、大丈夫だろうと思って家を建てました。事実、65年くらい前のものすごい水害の時にもあまり崩れなかったんです。それでも今回崩れたのは、よほどの雨が降ったのと、この地域の岩は花こう岩なので、すいぶん風化が進んだのが原因かなと思っています。時が経つと岩も風化が進むので、その辺も考えなきゃいけないですね。

今は下の国道沿いに移転しています。知り合いの中には、「もとの所に家を建てよう」と言う人もいましたけど、私一人で断固反対しました。あそこはやっぱり危ない所だったんです。今はもう山のそばに住んでいませんが、今度は川の氾濫があるので、それほど安心という訳でもないんです。



早めに避難しないと犠牲者はなくなる

（呉市 70代 男性）

土砂で流されて亡くなった方の親戚に聞きましたが、そこの夫婦は避難する支度をしとっただけなんです。だから見つかったとき、手をつないでたらしくて。間に合わなかったんよね。そこの娘さんは帰ってきたときに、呆然としていました。

逆に、上のアパートの人は、親子して車で帰ってきたところで、いつもなら小さい子がぐずってなかなか家に帰らんのが、その日はお母さんがせきたてて、すんなり家に入ったとたんに、ドンときたみたいだね。ほんのちょっとの差やけど、一秒くらいで生きるか死ぬかがわかってしまうんやなと、つくづく感じました。

だから、避難勧告とかそういうものが出たら、やっぱりみんなで早めに避難していかんと、被害者は少なくならんと思います。危ないよって言われても避難しない人が一人でも二人でもおれば、必ず犠牲者が出るからね。



滝つぼにきれいなまさ土*

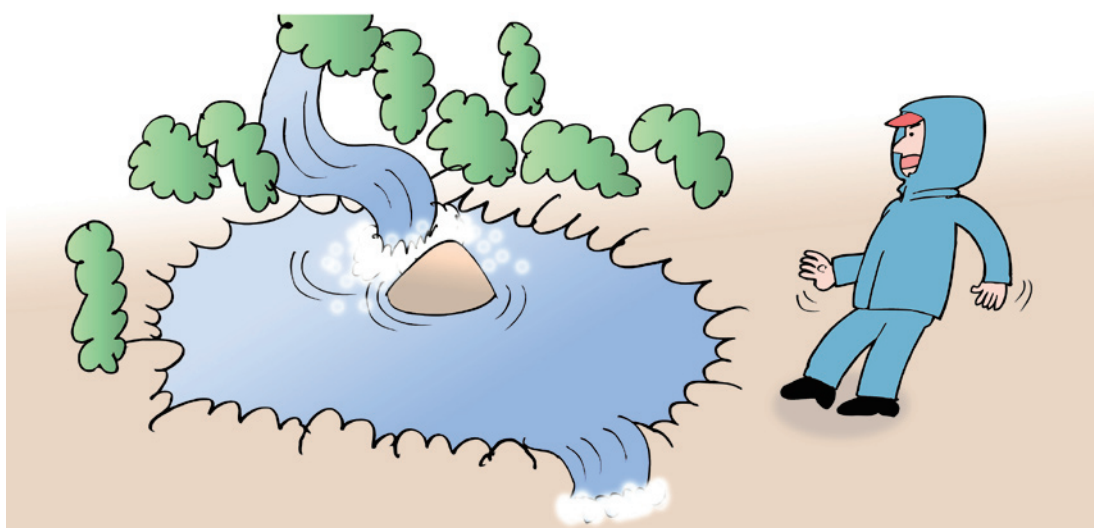
～水に気を取られて市役所に通報せず～

（呉市 70代 女性）

当日の朝、家の外に出てみたら、コンクリートの道の上をものすごい量の水が流れてたんです。長靴でも通れんくらいでした。夕方になって水の勢いが弱くなったから、どうなってるんやろうと思って、山の上にあがってみると、そのあと土砂で流された家のちょうど横から山水がどンドン流れてきてたんです。

家のうらに小さな滝つぼみたいな池があって、その池の排水管の網に笹がつかまって水があふれていました。笹をよけたら、排水路に水が流れたから、これで大丈夫と安心したんですが、そのとき、滝つぼに新しいまさ土が積もっていました。もう上から土が出よった証拠だったんですよね。それを見たときには「これは危険なしじゃないかな」と思って市役所に言おうとしたんですが、水に対する恐怖のほうが強くて、それが流れたからちょっと安心して、それで、市役所に言わなかったんです。

*まさ土とは、主に関西以西の山などに広く分布している花こう岩が風化した土壌のこと。



「サラサラサラ」と流れていった隣の家

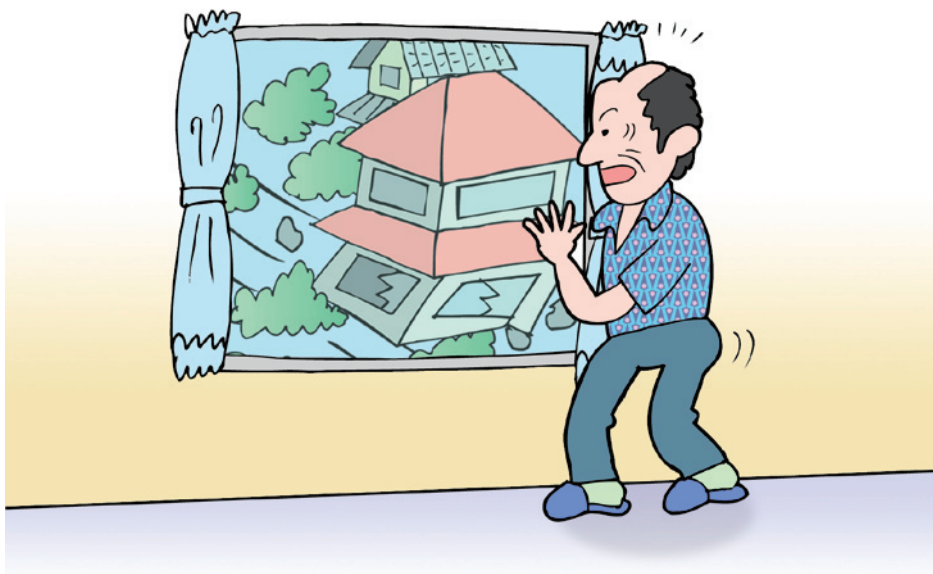
～「99%中に人がおる」の一言でレスキューがすぐ救助～

(呉市 70代 男性)

山が崩れる前に、私は家から道路を見よったんです。道路は川のようになっていて、上から植木鉢やら何やらが流れてきていました。そしたら、「サラサラサラ」と隣の家が流れ始めましてね。裏の山も崩れて来て、流れた家はその土砂に押し出されて、下の家にダンとぶつかったんです。

こりゃ大変だと思って、市役所か消防署かに電話しましたが、どちらかが通じませんでした。でも、たまたま、うちよりもっと上に行こうとしていた消防車が通りかかりましてね。「あの家には誰か住んでいますか？おりますか？」と聞くものですから、「99%おると思う」と答えました。レスキューの方がすぐ救助にかかってくれて、屋根に穴を開けてね、だいぶ時間かかったんですけど、土砂に半身埋まっていた方を救助できました。あのとき、「99%中に人がおる」って言う人がいなかったら、ほっておかれたかもしれないので、助かって良かったなと思います。

今、自治会と民生委員とでやっていますが、一人住まいの方とか体の弱い方がどういう場所におられるのかを書いた地図をつくったり、声かけしたり、というのが、これからは重要だなと思っています。



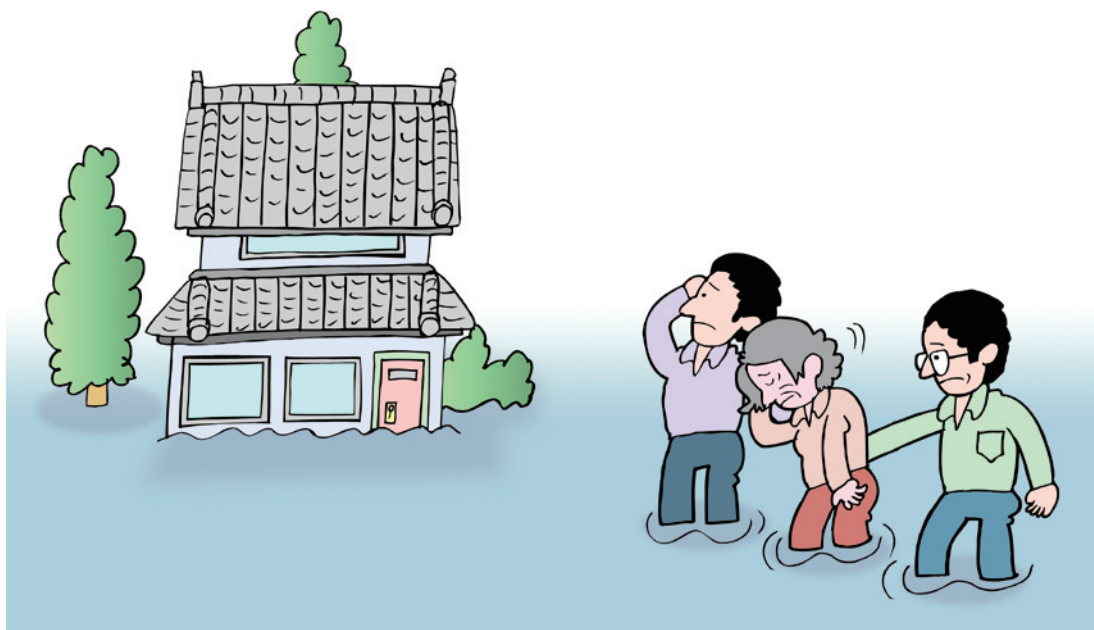
ちょっとした手助けきっかけにみんなが動き出す

（呉市 70代 男性）

豪雨災害のときに、うちの下の家に土砂が「ダーツ」と流れこんだんですが、翌朝見ても、家の人や土をどけようとしなかったんですね。息子二人とおふくろさんがいるのに、皆しょげてしもうとるんです。

私は、会社で働いていた頃、何がなんでもやっちゃると思った仕事を、一人でやり始めたら自然と「手伝いましょう」って来てくれた人がいたんです。そのことを思い出して、下の家の人にも「わしが手伝う」って言わんと、こりゃ動かんぞと思ってね。

それで、「やろうや。今から土のけようや」って言ったら、その家の人も動き出しました。誰かがちょっと手助けしたら動き出すんですよね。災害の後というのは、いつもと違って誰も何にもしようとせんから、きっかけが必要なんだなと思いました。



こういう時に避難させてええんかどうか

～難しい自治会長の立場～

（呉市 60代 男性）

土砂に流されて亡くなった方の中には、家の中にずっとおれば、被害にあってないかもしれない方がいるんですよ。自治会の相談役ともいろいろ話したんですが、こういう災害が起きる時に、避難させてええんかどうかの判断は難しいなと思うんです。自治会長から避難してくださいとか言うルールを作るわけにもいかんし、なかなか結論は出んのです。

避難場所もルートも決まっていますが、そのルートというのが、坂道で水がドードー流れて、石もたくさん流れるところなんです。そこから避難場所まで避難する間に、石に当たって倒れる可能性があるものですから、このあたりの判断を、ちょっと勉強せないかなと思ったり、通報があっても個人の判断に頼るしかないかなと思ったりするんです。



遠い人から順に「帰りなさい」

～集中豪雨のときの決まりごと～

（呉市 60代 男性）

私は当時まだ現役でしたので、職場にいました。湾に面した職場だったんですが、日頃から集中豪雨なんかのときには、家の遠い人から順に「帰りなさい」という案内がされていました。その日も、職場の人間をだいたい帰らせてから、私も職場を出ました。街の大通りを通るときに、タイヤの半分以上が水に浸かるような感じでしたが、そこまでの危機感はありませんでした。エンストしたら困るなと思ったくらいで。

山の方にまわり道をしていると、砂防ダムがありまして、その前を通ったときに、ダムの壁に四角の穴があるんですが、そこから直径1mくらいの水が、20mくらいドーンと飛び出していたんですね。それを見て初めて「これは大変なことになっているな」と思いました。家に着いたら、副会長さんとか4人くらいの方が集まっていて、下の方は道路が流されて、全然通れないという話をしていました。



顔色みながら職員と会話し、アフターケア

（呉市 50代 男性 市役所職員）

平成11年の豪雨のときは、一週間は家に帰れませんでしたよ。一週間ぶりに家に帰って、ご飯食べて、風呂入って、寝ようか思ったときに、電話で呼び出されて、また3日くらい出てという感じでした。睡眠時間は多い時でも1日1時間か2時間くらいでしたね。一日も早く被害状況をとりまとめて国、県に補助の手続きをしなければいけなかったもので、ものすごいプレッシャーで、ご飯が食べれなかったですね。酢の物とかそういうのを流し込むしかなくて。

ある程度職員の数がいたら、「交代で休みなさい」と言えるんですが、担当部署だけでなく、各部から応援を頼んでいるくらいなんで、その辺は一人ひとりの顔色を見ながらやりましたね。特に現場から戻った職員は、市民の方への対応で精神的な疲れが大きいようでした。私が現場に出た時も、市のマークを見て住民の方が10人、20人ワッと取り囲んできましてね。「どうしてくれるんや」と言われて、ただ、その場をおさめるしかありませんでした。それで、外から帰って来た職員には、不安に思うことがないとかか会話をするようにして、アフターケアに気を遣いましたね。



膝までの水にパソコン持って部屋の中をうろうろ

～最後は水の中に「ポイ」～

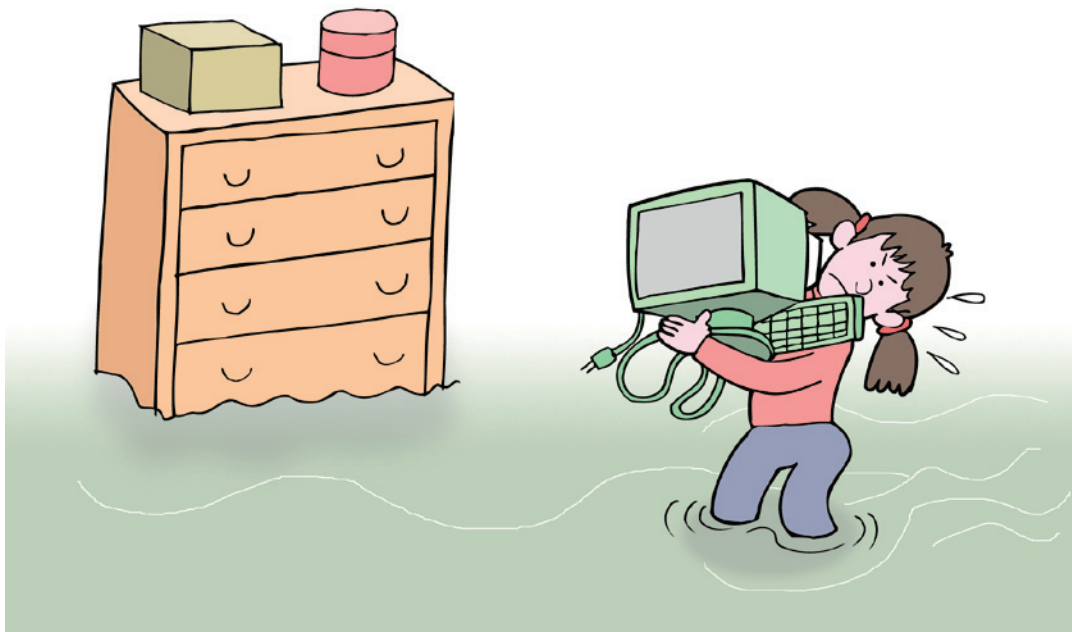
（宇部市 30代 女性）

当時、父がお店をやっていた関係で、旧道沿いに住んでいました。旧道のすぐそばに側溝があって、それまでも大雨が降るとしょっちゅう水があふれたりしていたのですが、家まで水が来ることはありませんでした。

あの朝はものすごい勢いで雨が降っていたので、「もしかしたら浸水するかもよ」なんて言っていたんですけど、あっという間に、水がどんどん押し寄せて来て、和室の畳がグラグラと浮いてきたんです。すぐに家の中は洪水みたいになって、2階がないから少しでも高いところに行こうと家族みんな必死でした。実際、私の目の高さくらいまで、高潮の水が来たんです。

ヒザぐらいの高さまで水が来たとき、パソコンを買って間がなかったので、「パソコンをちょっと避難させよう」とか言って、両手で抱えて逃げようとしたんです。でも、「そんな重たいものを持っている場合じゃないでしょ、捨てなさい!」と、親に言われましてね。

しばらくはパソコンを胸の高さまで持ち上げていたけれど、あきらめて手を離しました。水の中にポイと。すごく悲しかったです。



1.5mの家の嵩上げを過信

～床板流され14畳の深い池～

(宇部市 60代 女性)

確かに前日には台風が来るという情報は十分知っていたし、「いつもよりでっかいし、ヤバいな」と思っていました。でも、台風は1年間に1回じゃないし、以前から何度も来ているというところで、「いつもの台風か」と。

宇部では昭和17年にも大きな高潮があって、そのときには床板まで水につかったと親から聞いていました。で、我が家を建てかえるときに座を高くすることで、道路から床まで1メートル50ぐらいの高さにしたんです。だから、「ぜったい大丈夫」というのが自分の中にあっただと思います。

畳ってものすごく簡単に浮くんですよ、フワフワ、フワフワと。畳の上にあるものは扇風機も何もかも倒れたし、机の上に置いていたものは、ズ、ズ、ズっと下に落ちていきました。

そのうち、畳を支えていた長い座板もブカブカ浮いて流れ出しました。座板がなくなった床下は、床を高くしたために1メートルぐらいの深さなんですよ。そこに真っ黒な水がたまっているのが見えるんです。敷居と棧だけ残った8畳と6畳の二間続きの座敷の下は、まるで池のようでした。私は、「もし、落ちたらどうしよう」という恐怖心でいっぱいでした。



水は「ズンズンズン」と押し寄せた

(宇部市 60代 女性)

朝いつものとおり起きて、台風で風も雨もあったけれど、ウイークデーでしたから、主人も私も車で出勤するつもりでした。カーテンのすき間から外をのぞいた夫が、「車で行けるんじゃないか」と言いよるわけです。

ご飯を食べててしたくをしている時に、主人が「あれ、道路に水が来ているで」って言うんです。「じゃあ、今日は休んだらいい」とか、まだそんなことを言っていたんです。

うちの土地は高いほうで、それが川に向かって低くなり、川は港、海につながっています。だから、うちの家の前を道路が冠水しているということは、てっきり降った雨が川へ向かって流れているのだと思ったのです。

これが大間違いで、水は逆さまに流れて、あれよ、あれよと言う間に、どんどん水位が上がってきました。それが『高潮』だったわけです。

普通、波というのは寄せては返すわけですが、引かないんですね。ズン、ズン、ズンズンズンと水がこちらに向かってくるんです。「車を移動したほうがいいね」って、夫が長靴をはいて外に出て行ったんですが、見ると、もう夫の胸のあたりまで水が来ていました。車をあきらめるといよりも、命の危険を感じて、私は「はやく家に戻って！」と叫んでいました。



勝手にライトやクラクション

～浮いた車が柱にぶつかり家ごと揺れた～

（宇部市 60代 女性）

家の前の道路も高潮で冠水し、外にいられない状況でした。それでも、車庫の車が心配で、カーテンを開けて見ていました。すると、車のライトがパーっと点いたんです。

「まあ、あなたライトをつけたままだったの」、「そんなことないよ」というような会話をしていると、クラクションがバーっと鳴りだしましてね。

だれがライトを点けて、クラクションを鳴らしているのか不思議に思っているうちに、車は舟のように浮いて、車同士が揺れてぶつかるようになりました。そして、その車が車庫の柱にドスン、ドスンとぶつかるんです。

うちの家の車庫は2階建てになっていて、下が車庫で、上が家屋になっているんです。その2階にはピアノが置いてあるから、車が車庫の柱にぶつかるたびに2階も揺れて、2階にあるピアノが上から落ちてきやしないか、気が気じゃなかったんです。

そうこうするうちに、母屋の床のあたりまで水が来ました。年寄りがいいますから、「おばあちゃん、水が来たから、とにかく2階に上がって。車が当たって揺れているけど、大丈夫だから」って言ってね。でも、万一があるから、2階に上がる階段の上の方におばあちゃんを座らせました。「動いたらいけんよ」って言って。



まるでドラマの水攻め

～天井まで数十センチでストップ～

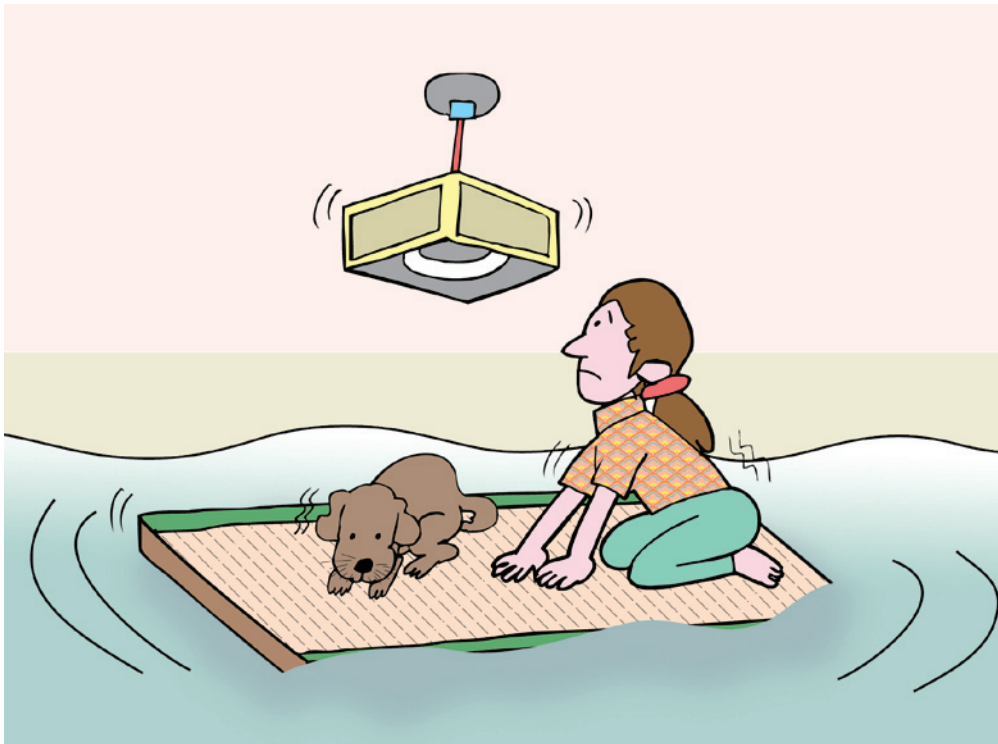
（宇部市 30代 女性）

うちは板間の上に畳を置いているようなつくりだったので、畳は浮いても下に落ちる心配はありませんでした。畳の上に自分と犬が乗っていました。まるで波乗りみたいに。

でも、どんどん畳が浮いて、だんだん天井が近くなってきたんです。ほんと、これ以上、水が来たら呼吸ができなくなると思いました。まるでドラマとかでよくある水責めみたいな感じでした。

昔の家だから天井が低いんですよ。しかも床を高くしている分、天井との間が狭いんです。「これ以上いったらどうしよう」って言っていると、天井まであと数十センチというところで、少し高潮の水の勢いが止まった感じになりました。

水が引くのがずいぶん遅いように思えました。ようやく落ち着いたところで、畳から下りて、バシャバシャと板の間になっている台所まで泳いで行ってね。家族全員、台所のテーブルの上で、水が引くまでじっとしていることにしたんです。



「これから避難生活」と机の上でオニギリ頼張る

(宇部市 30代 女性)

異変に気づいてから水に浸かるまで、全部で20分はかからなかったんじゃないかなと。水の上がってくるスピードは、ほんとうに早かったですね。

反対に、水が引いて、外に出られるようになるまでは結構長かったです。4時間近く、私たち家族は台所のテーブルの上に避難していたわけです。

その間、しっかりものの弟が、「これから避難生活が始まると思うし、今、何もすることができないんだから、食べられるものがあったら、とにかくおなかの中に入れておこう」と言いだましてね。

運良くご飯ジャーが高いところに置いてあって、ご飯が残っていたので、それをおにぎりにして食べました。パンでもミカンでも、何でもいから避難するときには家にあるものを自分たちで持っていく。それも必要だと思います。



台風通過の全国ニュース、地元の状況分からず

～避難勧告の空振り「最高」～

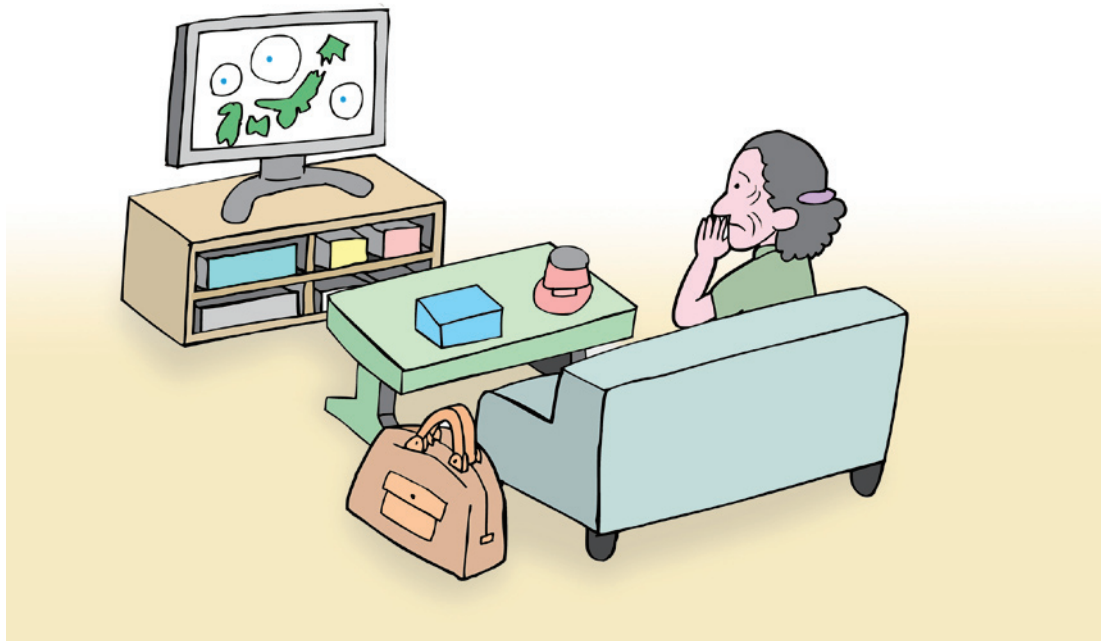
（宇部市 60代 女性）

もちろんテレビは朝からつけっぱなしにしていたのですが、ニュースじゃ台風が通過しているということだけでね。自分の意識がなかったのかもしれないけど、当時、避難勧告とかはなかったような気がするんです。

10年も前ですから、今と違って、ニュースで言っているよりも台風が先に来ることもあったし、気象情報でも放送局がある山口の天気は言っても、宇部の情報はなかったように思います。

だけど、あの時、台風がどういう経路で動くかというのは知っていたわけだし、自分の住んでいる地域を通るというのは少なくとも知っていたわけだから、自分が悪いということは間違いないんですよ。まさしくど真ん中を通ると知っていて、避難しなかったのだから。

今は違いますよ。「情報は待っていたらだめ。自分で積極的に取りに行く」というのと、周りが何と言おうと避難勧告が出たら家にはいないということです。もう、水が押し寄せてきたら、避難なんてできないんですよ。だから避難勧告には絶対に応じないといけないと思います。避難勧告が空振りに終わればラッキー。「空振りばんざい、最高」です。



修繕前に捨てる作業が大変

～水を含んでズシリと重いじゅうたんや座布団～

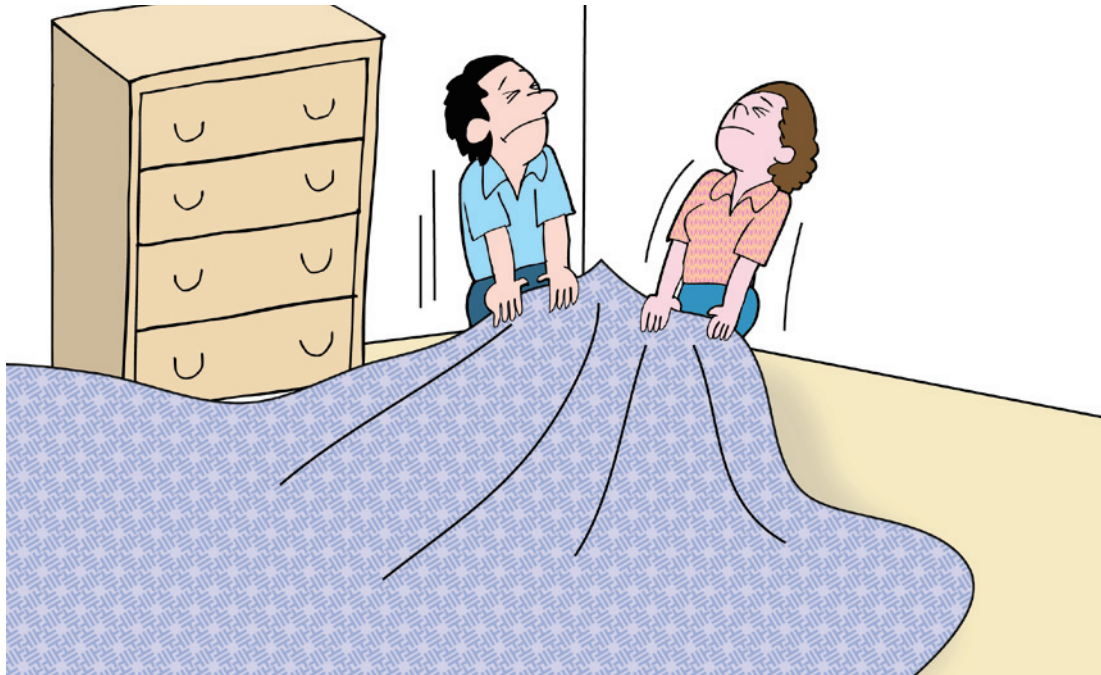
（宇部市 60代 女性）

水に浸かった家は捨てればいいのかもしれませんが、やっぱり住みなれた家ですし、何とか復旧しようと思いました。でも、大工さんに頼む前の作業があるんですね。1階にあったものは、すべて泥水にまみれて使いものにならなくなってしまっていますから、それらをまず捨てなきゃならないのです。

タンスも水が去ったら、ドーンと、変なところに変な形であるわけです。水に浸かったタンスってすごいですよ。引き出しも木が膨張しちゃって開かないんです。中の洋服はもちろん泥水が入って、もう使いものになりません。

とにかく水に浸かった電化製品は全部ダメなんです。ダメなのはいいんだけど、それを処分するという作業の方がもっと大変です。水をたっぷり吸ったじゅうたんは重くて大きくて、それこそ手に負えませんでした。

だから、水害に遭ったところに、力のある人たちが手伝いに来てくれるということは、とてもありがたいことなのです。



犬は冷蔵庫の上、ネコはタンスの上

(宇部市 60代 男性)

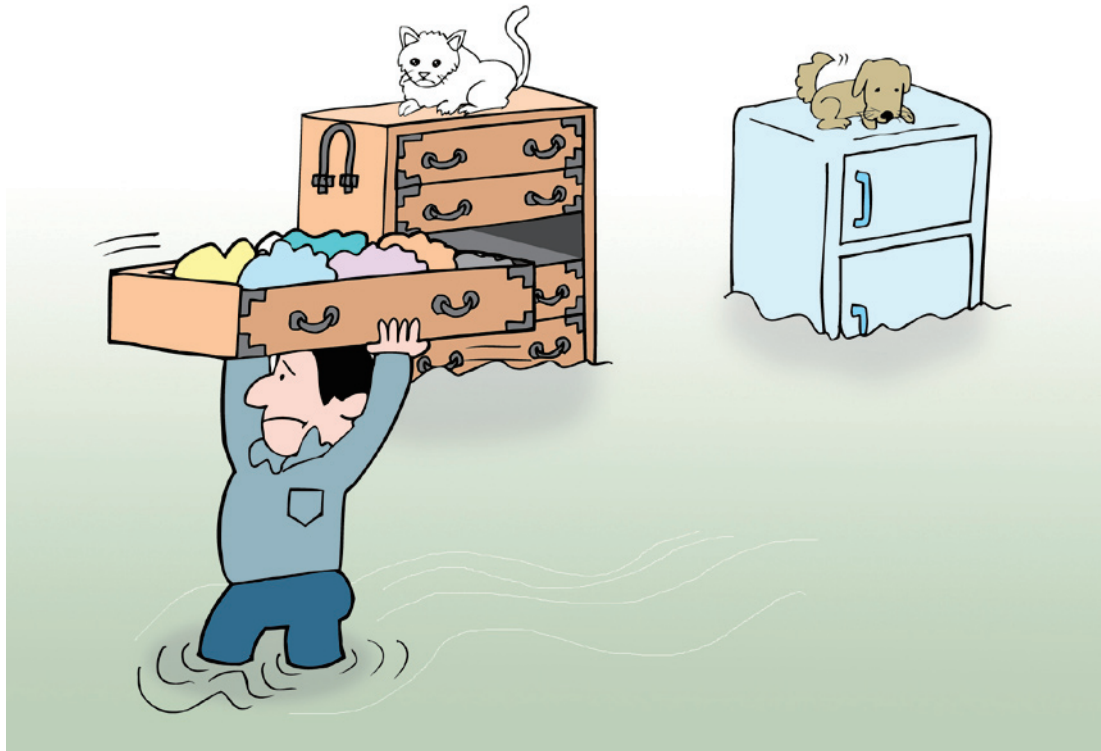
私の家から海まで、直線で2、3百メートルですかね。海のほうがちょっと高くなっています。あの日、家の中にダーツと水が入ってきた瞬間、車庫にある私の車がビーッと鳴り出しました。誰も乗っていないのに、勝手にビーッと鳴るし、バックミラーが開いたり閉じたりして、「亡霊か何かついたんかな」と、一瞬そう思いました。

うちは平屋で2階がありませんから、机の上へ上がろうとしたのですが、のぼれないんですよ。タンスや畳がブワーっとみんな浮いてきちゃって。

私は、家内の着物をぬらしちゃ大変と、必死で和ダンスの引き出しを抜いて高いところに上げました。見ると、犬は冷蔵庫の上、ネコはタンスの上になっていました。

家内がさかんに「逃げよう」と言いましたが、過去の経験から、こういう状況じゃ高潮の水に飲まれて流されてしまうと思い、家の少しでも高いところにいようと言い聞かせました。

もうほんと1、2分の間ですね。水の勢いというのはものすごく速いんです。



2度目の経験 記録に残そうと写真撮る

（宇部市 60代 男性）

私は2回ほど台風災害に遭っているんですよ。1回目は昭和17年、小学2年の時でした。この時は、父も母もどこに行ったか、家族全員バラバラになりました。自分は知らない人に山の手の方に連れて行ってもらい、3日ぐらいその人の家でお世話になりました。その後、家に連れてきてもらって、ようやく姉弟たちと再会できたという非常に悲しい経験を持っています。

それから約50年後、その時の災害のことなんか、すっかり忘れていました。「ああ、台風が来る、すごいな」とか言うて、家の中から庭を見ておりましたら、瞬間に水が胸まで来たわけです。家内が「助けてくれ」と言ったって、どうすることもできない。最悪の場合、屋根に上がるかという話をしておりましたら、水が引き始めたんです。

「よし、この際写真を撮ってやろう」と思って、胸までつかってこの写真を撮りました。写真に写っているのは、流されてきた車です。「この中に人がいるんです。助けてください」と言ったって、どうにもならなかったんです。

水害のときに一番悲しいのは、助けてあげたくても、自分も浸かっているから助けてあげられないということ。だから、自分は一生懸命逃げる。それしかないと思うんです。



水は静かにスーッとやってきた

～できなかった主人の供養～

（宇部市 90代 女性）

台風が上陸した9月24日はちょうど主人の祥月命日*。前日の23日には台風が来ることがわかっていたので、お寺の坊さんに「一日早く、今日拝みに来られたらどうですか」と電話をしたのですが、「いやいや、明日の9時には行きますから」と言われました。

翌朝7時ちょっと過ぎでしたか。かなり雨が激しく降っていたので、私は家の中に水が入らないようにサッシにタオルを当てたりしていました。そのうち、裏の入り口に2センチぐらい水がたまっているのに気づく間もなく、お風呂場も水でいっぱいになりました。私にはどうすることもできず、大声で2階の息子呼びました。

息子が降りてきた頃には畳が浮き始め、背の低い私は胸まで水に浸かって、今にも溺れそうでした。で、息子が応接セットのテーブルの上に私を立たせてくれたのです。

都合の悪いことに、水は静かで、スーッと、いつ来たかわからないほどでした。そして、水が引くときも一気に引いてゆきました。残されたのは、近くの川の工事に使ったセメント混じりの泥の固まり。家中にへばりついて落とすのに本当に苦労しました。結局、その年の主人の供養はできず、10年たった今でも庭の隅にあの時の泥が残っています。

*祥月命日とは、故人となった月日のことで、年に1度巡ってきます。



床下収納のフタが「ポコッ」と浮いた

(宇部市 60代 男性)

近所では、「今度家を建てかえるときには、潮水につからんように高くする」というのが常識みたいになっておって、うちも20年前に家を建てかえる時に、前に床上30センチやったから、盛り土をして地盤を40センチ上げたんですよ。だから、「もう大丈夫」と思っていました。

あの日は風が強くてね。家でじっとしておったけれど、今までの経験から、ひょっとすると水が来るかもわからんと思って、勝手口の方を気にしていました。勝手口はサッシのドアで水は入ってきませんでしたが、突然、台所の床下収納のフタがポコッと浮いたんですよ。床下の基礎のところには風抜き窓があるでしょ。そこから水がドーンと入ってきたんですね。

カーテンをあけて見たら、外は一面の海。「待てよ、外へ出たらかえって危ない。潮はすぐ引くんだから、じっとしとったほうがいい。」と自分に言い聞かせ、私は台所のテーブルの上へ座って、ジーっと水が引くのを待っていました。

水は来るのも早い、引くのも早いんですよ。あっという間です。もう30分もすれば、今度は川のようになって引いていくんです。



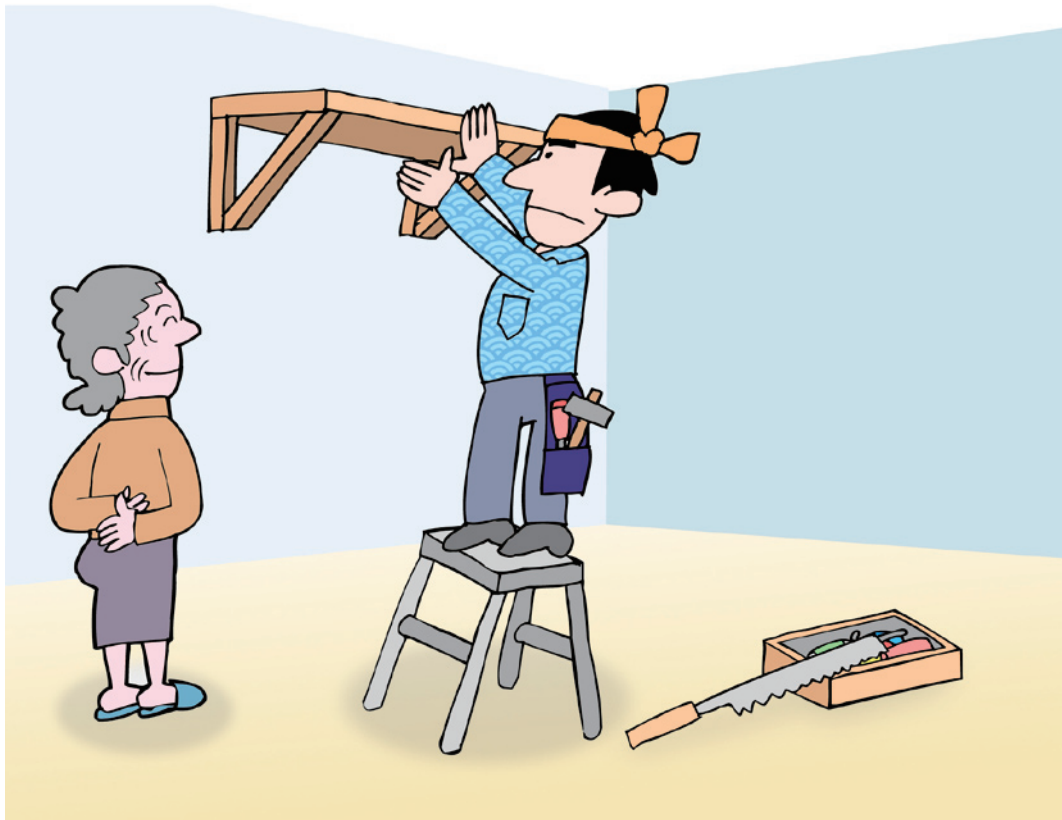
いたるところに丈夫な棚

(宇部市 90代 女性)

高潮に遭うと何もかもみんな捨てにゃならん。うちは畳25枚を捨てました。家の中のものも1階は全てダメになって、10日間ぐらい、毎日ずっと物を捨てていました。だから、うちの前の道路は1キロぐらいゴミが道をふさいで通行止めみたいに、出入りができんくらいになりました。消毒液を持ってくる人が入って来られないのも困りました。

私のところは息子が大工ですから、あの台風の後、家の中のいたるところに丈夫な棚を作って、そこに物を上げられるようにしてもらいました。それから、畳をどけても大丈夫なように、床板を丈夫な厚板で打ちつけてあります。

2階もありますけど、私ももう年ですからね。なかなか走って上がれないし、息子がひざを痛めていますので、台風の時期になる前に、少しずつ大事な物は2階に上げるようにしています。



道の両脇にゴミ山積み

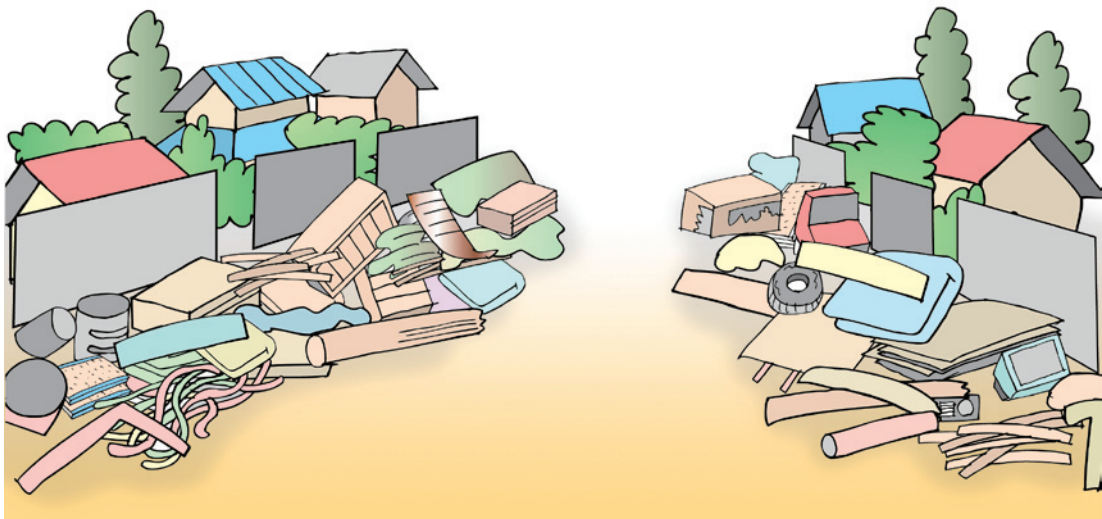
～気の毒でわき見できず～

（宇部市 60代 女性）

「高潮が来てから家の中がすっきりして、要らん物がなくなった」と冗談めかして言う人がいます。だいたいどこの家も押し入れの中にモノを突っ込んでいますよね。そこへ20センチ以上水が来ると、全部水浸しになって使いものにならなくなります。大事にしまっていたアルバムも、布団も何もかも全部捨てなくちゃならなくなる。

水に濡れた布団や畳は重たくて、女性のボランティアではどうにもなりません。特に畳は水をかぶると重たくなって、一人じゃどうすることもできませんから、のこぎりを買ってきて、畳を半分に切ります。半分にすると、どうにかこうにか男性2人で抱えられるようになるんです。

とにかく、いったん泥水に浸かってしまったものは捨てなくちゃいけませんから、皆さん家の前に全部ゴミを並べるのです。私が車で通る道の両脇には、高いゴミの山ができていました。もうほんとお気の毒で、脇見ができないぐらいでした。



まちの電気屋さんが家電製品を無料修理

～直後にご近所から部屋借りる～

（宇部市 30代 女性）

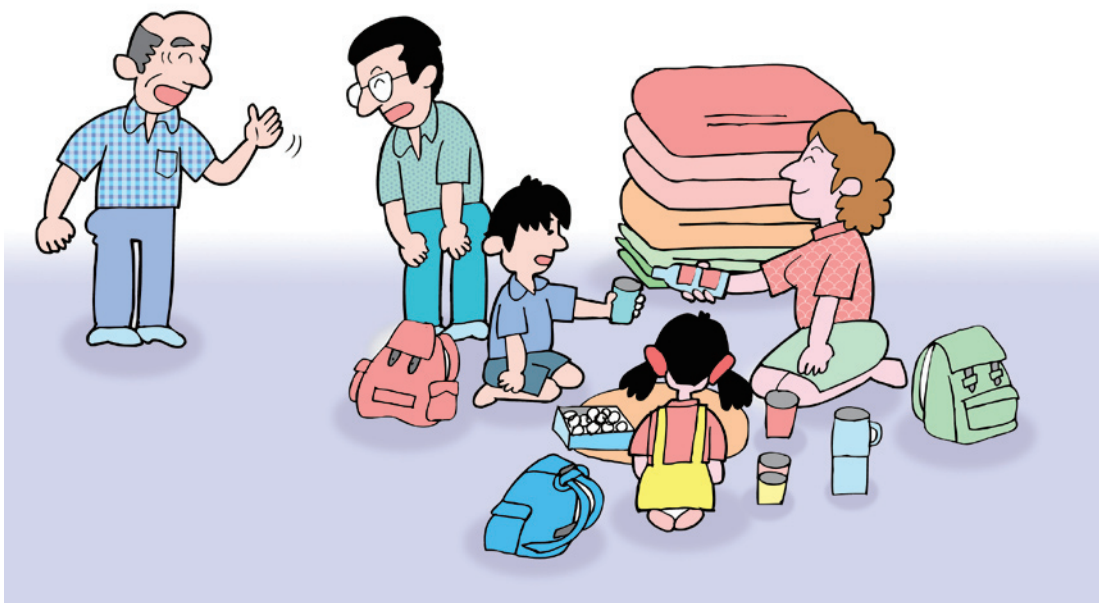
家の中の水が引くまでは外にも出られないんですよ。外からいろいろなものが流れてきて危険な状態なので、台所のテーブルの上に椅子を上げ、足の不自由な父にはそこに座ってもらって、とにかく水が引くの待ちました。

1時間が2時間か、よく覚えてないんですけど、水は引き切ったのではないけれど、「これだったら歩いて出られるね」というところで、近所の方が助けに来てくださったんです。下町で近所つき合いというのをふだんからしている地域なので、みんなが心配して来てくれるんですね。

「家の中も水浸しだし、家電製品も使えないんだから、しばらく泊っていいよ」って、部屋を貸してくださってね。そこのお宅も停電で電気が通じなかったんですが、ふだんからきちんと備えをされている方なので、レトルト食品とかを用意されていたんです。それで犬と一家4人、しばらくやっかいになりました。

普段からまちの電気屋さんにつきあいがあったので、何も言わないでも「分解して洗ったら使える」と言って、持って帰ってタダで修理してくれました。普段からつきあいをしていた良かったです。

ほんとうにあのときほど、ご近所の好意をありがたく感じたことはありませんでしたね。



特定の避難所より2階や親戚

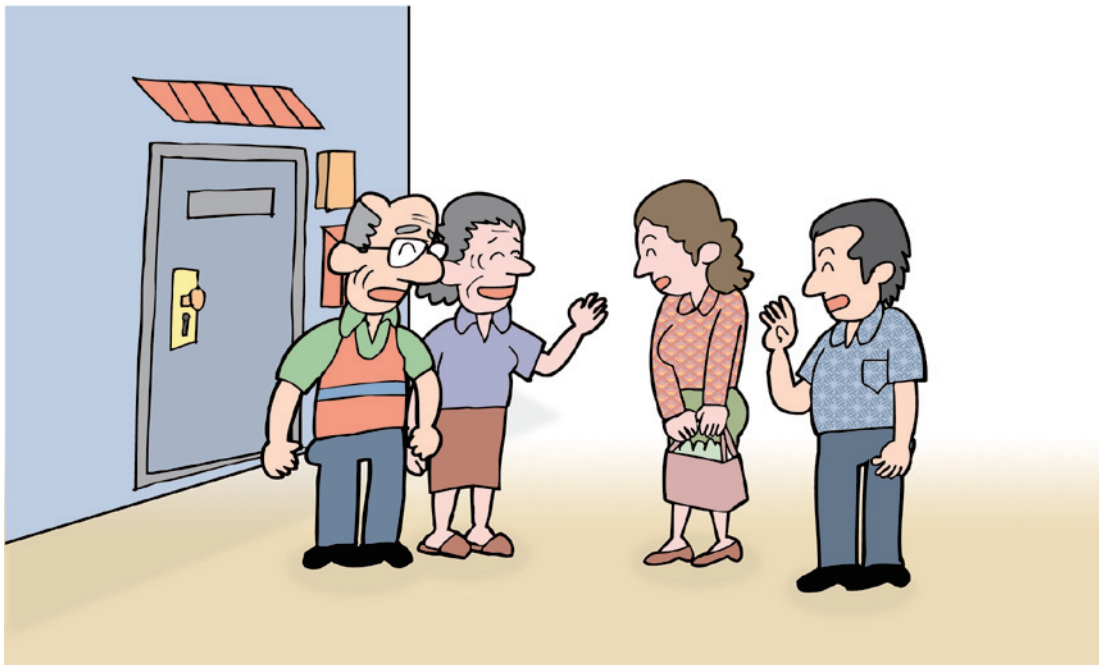
～自主防災会で計画～

（宇部市 60代 男性）

私は民生委員をしていますが、情報を出してくれと言っても、「嫌ですよ」というのが結構あるんです。「じゃ、あなたは死んでもいいんですか」と言ったら、「いいです」と言う人がおられるんですよ、事実。

行政は指定の避難場所に避難してくださいと言うんですが、65才以上のいわゆる災害弱者と言われる方がひとりでそこまで行くのは無理なんです。だから、その人の状況によって、避難場所は親戚でも、自宅の2階でも、指定の避難場所でもいいと思うんですよ。「ここで死んでもええ」と言う人も、極端に言やあ強制的に避難させにゃいかん。これも我々自主防災会の大きな使命だと思います。

地域住民が消防団と一緒に地域のお年よりを援助する仕組みを作成中ですが、何と言っても日ごろからのコミュニケーションが大切ですね。



高潮きっかけに自主防災会

～やっぱり日ごろのおつき合い～

(宇部市 60代 男性)

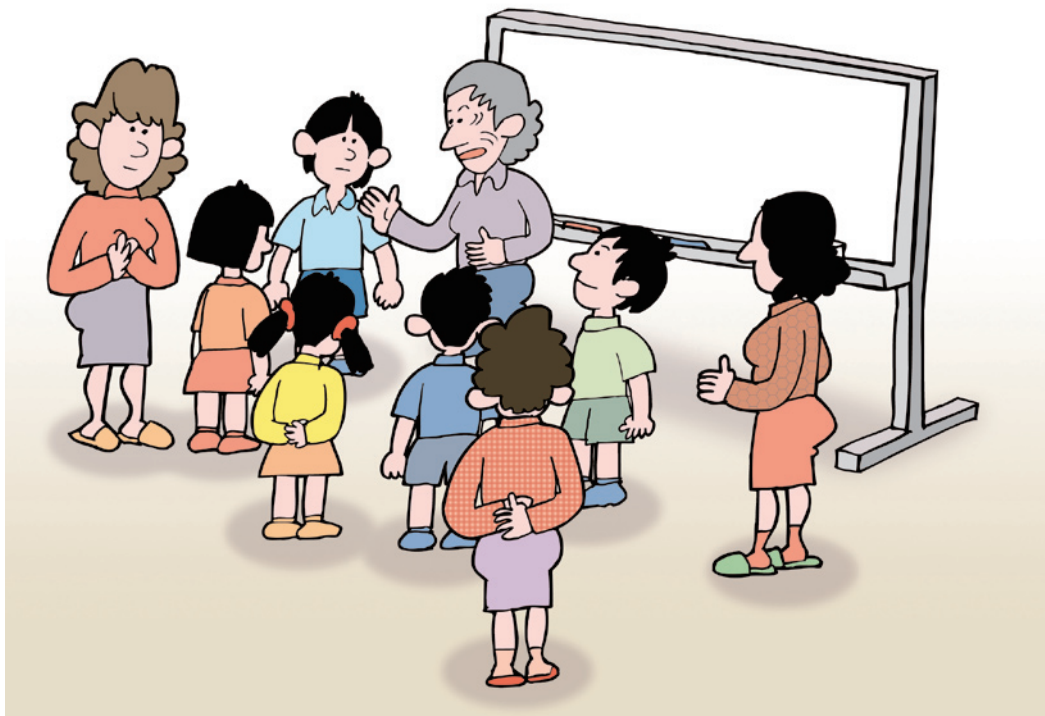
私はあの台風18号を契機に地域の自主防災会を立ち上げました。毎年8月30日に訓練をやっていますが、この自主防災会をみんながもっと理解できるような、きめの細かい方法をとっていくと同時に、日ごろから良い人間関係をつくっておくことが大事なんじゃないかなと思っています。

高齢者になればなるほど、ボランティアといえども家の中に一步も入れんときが多いんですよ。人間にはいろいろ好き嫌いがありましてね。それを解決するのはやっぱり自治会長。各班にいる班長をうまく活用して、気軽に物の言えるような環境を日ごろからつくっておけば、ある程度うまくいくんじゃないかなと思います。

近頃は、向こう三軒両隣のほうが仲が悪いこともあるんですよ。隣に聞いたら「知らん」、ずっと向こうの人が知っちゃったとかいう話でね。だから、となり近所のつき合い方が、昔のような状態に戻らんと、やっぱり自助・共助・公助というのは難しいと思いますね。

今、婦人会では、3世代の交流の場を作って、子どもたちもみんなひっくるめて、お年よりから戦前の台風の話とかを聞かせてもらって、一緒に学びあうということもしています。

災害時に助け合うには、いわゆる『日ごろのつき合い』。これに尽きると思いますよ。



30センチの水が急に胸まで

～普段は気付かない道路の凸凹～

（宇部市 50代 男性 記者）

当時、うち（新聞社）にも情報はなかなか入ってきませんでした。そこで、こちらから情報を取りに行こうということで、長靴をはいて、市役所との間を何度か往復しました。市役所に続く通りは、すでに30センチか40センチぐらい水に浸かっていたと思います。

泥水ですから下の方はまるきり見えないんですよ。「ここら辺が道路だったかな」という感じで歩いて行ったら、急にドカッと、胸のあたりまで水に浸かってしまったのです。ほんとうにあの時はびっくりしましたね。今思えば、市役所の手前が車道になっていますが、ちょうど一段下がったそのあたりだったと思います。

日ごろ、そんなに道路の凹凸とかを気にしていませんよね。浸水して足もとが見えない時は、「ここら辺はまっすぐだったな」とか、記憶だけを頼りに歩いていくわけで、それがちょっと外れると、えらいことになるんだということを実感しました。

大雨の時に歩いて避難して、道路わきのミゾに落ちて大変なことになったなんていうニュースを耳にするたびに、あの時のことを思い出します。



前日の注意呼びかけ記事も切迫感なし

～過去の経験に高をくくる～

（宇部市 50代 男性 記者）

今、当時自分の書いた記事を読み返してみると、「台風18号が接近中です。勢力が非常に強いので注意しましょう」という主旨の内容となっています。

私たちは、今までりんご台風*をはじめとして、いろいろな台風を経験していますからね。大きくても、直撃してもこの程度だろうというような、何となくそんな思いがあったんだろうと思うんです。

きっと、どこの被災者もそうなんですよね。「今までこのぐらいだったから」と自分なりの基準を作っちゃって、慌てることもない。私自身、そんなに大変なことになっているという認識がなかったから、入社間もない女性記者を現場に行かせたりすることができたんだと思います。彼女は軽自動車に乗って出かけて行きました。

無事に帰ってきたから良かったけれども、後から考えると、ぞっとする話です。それまで災害の真の怖さを知らないで過ごしていたというか、そういう反省は確かにありますね。

*平成3年台風第19号は、青森のりんご農家が大きな被害を受けたことから、通称「りんご台風」と呼ばれています。



空港の水没、「そんな馬鹿な」

～忘れられやすい犠牲者ゼロの災害～

（宇部市 50代 男性 記者）

空港が浸かっているという話が入ってきたので、行ってみると、ものの見事に、車の屋根が隠れるほど水に浸かっていました。車高が高い車の屋根は見えるけれども、辺り一面泥水で、歩いて行くと、ゴツンと車に当たるといふ具合でした。

東京では宇部空港のことは報道されず、東京に出張していた社員が羽田で待っている時に、どこかの空港が海に沈んだという話が聞こえてきて、「そんなバカなことがあるか」と思いながら、帰ってきてみたら、空港の近くに留めていた自分の車の中から魚の死骸が出てきたという笑えない話もありました。

そして数日後、東京の業者がこちらの台風の被害を全く知らなかったのには、おどろきました。同時期に他県で何人も亡くなった方が出た災害が起こっていたこともあると思いますが、こちらのことについてはほとんど報道がなかったんです。高潮で実際にどれだけ人々が苦労して、困っているかということがね。

全国ニュースは、台風も終わって3日もたつと、何事もなかったかのように別の話題に移ります。やっぱり報道というのは東京中心。「冷たいな」と感じましたね。



ロープ1本だったレジャーボート

～打ち上げられて町の中～

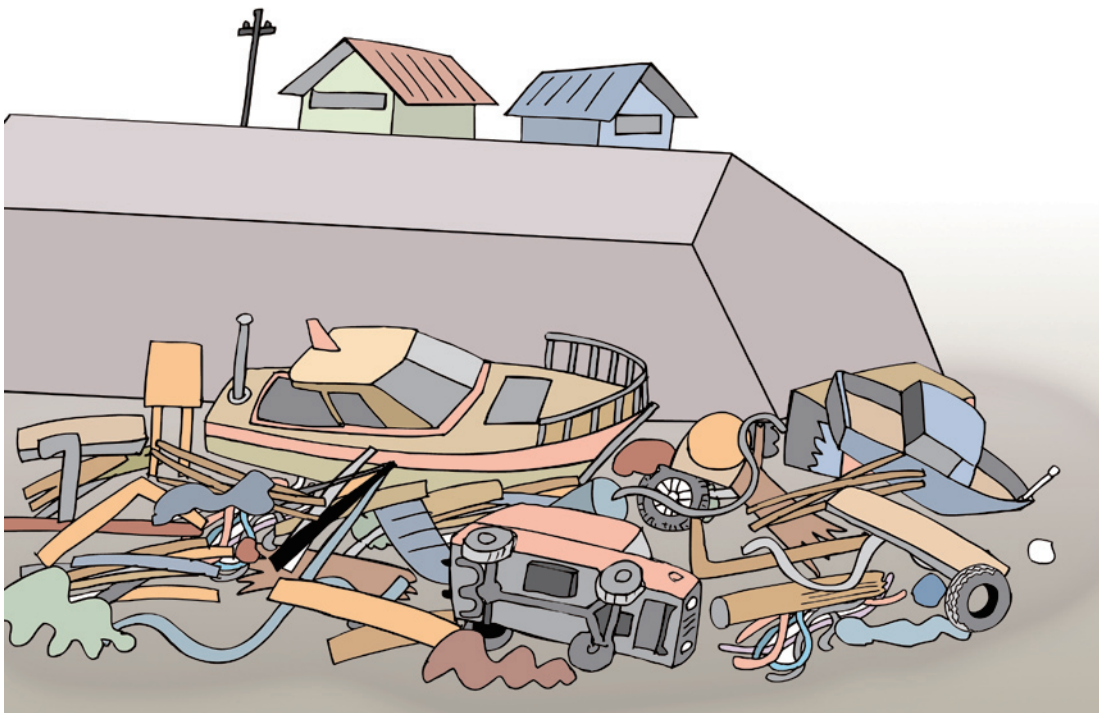
（宇部市 60代 男性）

漁師は家よりむしろ船を大事にしますから、台風が来るといふことになると、皆2、3日前から二重にも三重にもロープを張って、船をつなぐんですよ。

でも、レジャーボートの持ち主は、高潮との付き合い方を知らないというか、経験も少ないから、港の中だから大丈夫と、普段と同じように、ロープ一本でボートをつないでいたんですね。だから、この時の台風で一番多く打ち上げられたのがレジャーボートでした。

水が引いた後、「何でこんなところに？」と首をひねりたくなる町のまん中にボートが取り残されていました。高潮でプワッと浮いて、風と一緒に一気に流されてきたんですね。

それから、海岸に近い地域では、道路に留めてあった乗用車が何十台もはるか沖に流されました。高潮の威力のものすごさは、私たちの想像をはるかに超えるものだったのです。



近くの大災害もニュースで知る

（防府市 50代 男性）

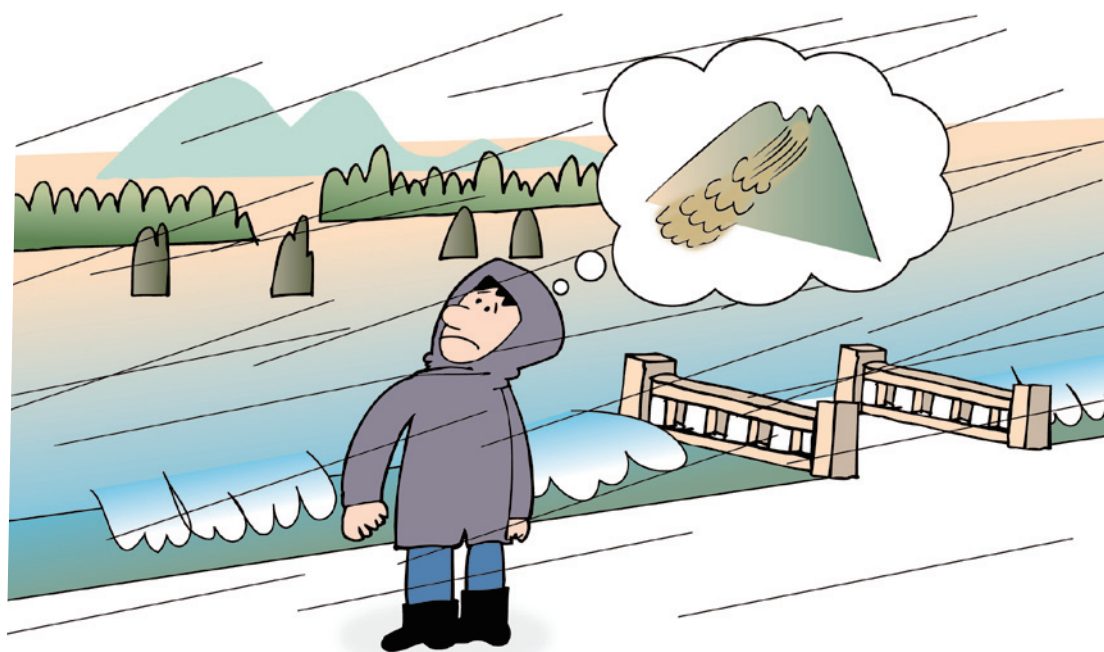
あの日は『海の日』の翌日。朝の8時半ごろから雨がどんどん降ってきてね。これは少し異常だなと思いました。で、車であちこち見て回りました。川には濁流が流れていて、とにかく雨の降り方が尋常じゃないわけです。もう、確実に異常でした。

家へ戻ると、近所の人から「谷が崩れ始めたので、何とかしてくれ」という電話があり、すぐに消防団に連絡をして、軽トラックに土のうを積んできてもらうことになりました。私に道まで出て案内せよという依頼だったので、そのお宅まで誘導しました。

で、土のうを積んで、家のまわりの小さな溝から水が浸入するのを何とか防ぐことができたのですが、軽トラが作業を終えて渡ったとたんに橋がドーンと落ちたんです。ほんのちょっとの時間差でした。

そのうち、はじめは透き通っていた神社わきの溪流も赤み泥に変わり、最後は真っ黒な水となりました。それを見て、「どこかが崩れたな」と直感しましたね。

午後の3時頃だったか、上空をヘリが飛びかうようになって、「何が起こったのだろう」と。でも、すぐ上の老人ホームが大変なことになっているなんて、夕方にテレビをつけるまで知りませんでした。



ふだんどおりに朝のコーヒー

～みるみるうちに川から水～

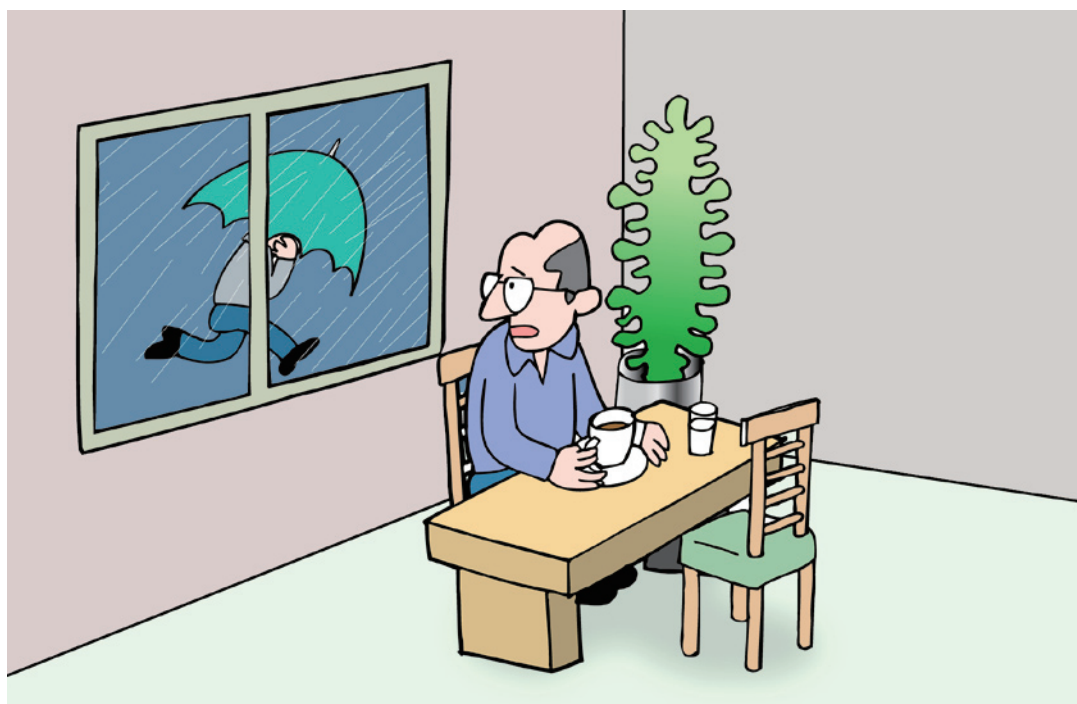
（防府市 60代 男性）

私は朝8時前ごろに家を出て、いつものように近所の店でコーヒーを飲んでいました。かなりの雨が降っても、今まであまり水が出たことがない土地柄ですけれど、雨がますます勢いを増してきたので、「橋に流木なんかひっかかって、被害が出ることにならなければいいな」と、ぼんやり考えていました。

ところが、恐れていたことが本当になって、私の家の裏にある橋に流木が引っかかり、川の水がせき止められて、あふれた水が道の両サイドや田んぼへ一気に流れ込んだわけです。

あの日、10時から11時ごろの間、雨は一時的に小降りになりました。「これでもう大丈夫」と思いましたが、ふたたび雨が激しく降り出して、土石流の被害があちこちに広がっていったのです。

のん気にコーヒーを飲んでいたほんの数時間後に、あんな恐ろしいことになるなんて、まったく想像もできませんでした。



たな田がナイアガラの滝のよう

（防府市 60代 男性）

私らは田んぼをつくっておりますが、毎年8月には土のうを積んで川の水をせきとめて、それでやっと取水するぐらい、この辺は雨がそう多くない地域なのです。

その日は、ちょうど新しい橋もかかり、うちの家のところまで、路盤の整備が終わったと言うことで、県の工事検査が入る予定でした。

朝の8時半ごろ、雨が降っていたので、「ちゃんと水が流れているかな」と橋を見に行ったんです。その頃は、まだ橋まで50センチ以上余裕があって、「まあまあ、大丈夫だな」と思いながら家に帰りました。

それから10時過ぎたころだったでしょうかね。雨がどんどん降るので、「えらく降るな」とつぶやきながら、ひょっと外を見ると、段々畑になっている田んぼがナイアガラの滝みたいに、水と泥がどんどん流れ落ちていました。

そのうち、まわりの道路も水浸しになって、家の敷地内にも水と泥がどんどん入りはじめました。で、「これはどうにもならんな」と、県の土木のほうに電話をしたのです。



やっていたのは川の洪水対策

～土砂災害は予測せず～

（防府市 60代 男性）

地域を一級河川の佐波川が流れているのですが、あの日もちょっと水が増えているかなといった程度でしたし、水害のことなんて全然頭にありませんでした。昭和26年に氾濫して大きな被害が出て以来、堤防を高くしたり、ダムをつくったり、対策はできていましたから、「よほどのことがない限り大丈夫」という気持ちでした。

ところが、今回、それとは関係ないところで土石流が発生してしまったのです。

最近、雨が降るたびに昔採石場だったところから赤い水が出ていたので、「どうなってるのかな」という懸念は少し持っていましたが、それが原因でもないようです。

とにかく、今回被害にあった老人ホームも避難場所に指定されていたぐらいですからね。こんな大規模な土砂災害が起こるなんて、誰も予想できなかったと思いますね。

自然の力の大きさをあらためて思い知らされました。



まるで地獄の使者のよう

～木、岩、砂が家に「バリバリッ」～

（防府市 50代 男性）

地獄の使者のテーマソングのような、地面からゴーっとわき上がってくるような音がしました。その音が上の方からだんだんこちらに近づいてくるような感じがして、両ひざ立ちで窓の外を見ると、30メートルぐらい先に土石流が迫っていました。横倒しになった木と無数の岩、それに大量の砂がどんどん押し寄せてきたのです。

「うわ、家を直撃だ！」と、思わず後ずさりしたとたん、何かがドーンと家に当たり、バリバリッという音がして、すぐに腰まで水に浸かってしまいました。

割れた窓ガラスが勢いよく水と一緒に僕の体のほうへ攻めてきたので、足が切れて、水が血で真っ赤に染まりました。

逃げるためにはどうしたらいいかなと考え、「あっ、そうか、靴を履けばいいんだ」ということでね。裏返しになってスーっと流れてきた片方の靴をはき、倒れたソファやイスなんかの上を歩いて行くと、もう片方の靴が浮いていました。水をかいてたぐり寄せ、それを履いて、一番近い出口から逃げようと思ったけど、サッシが曲がって開かないんです。

で、土石が入ってきた玄関のほうから脱出したのですが、玄関の前は4、5メートル掘られて川のようになり、ゴーゴーと水が音をたてて流れていました。結局、建てて間もない我が家に、再び帰ることはできなくなったのです。



竹やぶの水止まったと思ったら、家の前に土石流

（防府市 60代 男性）

朝起きて見たときには、私の家の西側の竹やぶを水が流れていましたが、1時間も経たないうちに、その水が止まったんですよ。「おかしいな」と首をひねっていると、「家の前がおかしいよ！」と言う家内の声がありました。飛んで行くと、もう家の前は土石と水と砂でいっぱい、家の中も敷居の高さまで埋まっていた。

東側の農道も一つの大きな川になって、水が流れていましたから、逃げようにも、足をすくわれそうでしたので、消防署へ電話をしたのですが、だれかが先に電話されよったらしくお話中で出ないんですよ。

そのうち、消防署の人が来てくれてね。「家は？」と言うから、「大変なことになってる。家内は足が悪いから、連れて出るのはどうしたらいいかと今考えよる」と言ったら、「私がおんぶして、大きな道路まで出ましょう。おたくは後をついてきてください」ということで、家はがらんとしたまま、避難しました。

今回みたいに、土石と流木がみんな流れ出たということは今まで経験したことがないし、僕らよりはるかに歳とった人でも、「こんな経験したことないぞ」というようなことでね。だから、家内を含めて家族がケガをしなかった、無事に逃げられたというのが一番の救いだったですね。



水の入った長靴は「ゴボツ」、「ゴボツ」

（防府市 60代 男性）

最悪の場合、家はだめだろうという考えは持ったんですよ。だけど、幸いにして、私の家の上のほうは、大昔に田んぼだったから段々になっていて、ちょうど2段上ぐらいを境に、私の家を中心に水が左右に分かれてくれたんです。だから、その割に被害を受けんと持ちこたえてくれたんじゃないかなと今でも思っています。

当時、私の家の後ろから大きい道路のほうに出るまでは、長靴に水が入るほど道路が水没しているものだから、歩こうにも歩けないのです。それに、水の勢いというものがありますから、避難は本当に一生懸命でした。

やっぱり長靴に水が入ると重とうてね。ゴボツ、ゴボツとなって、歩かれんですよ。ああいう時には、かえってズックとか地下足袋*とかのほうが歩きやすく、避難するのに適していると今ではそう思いますね。

でも、その時はそういう発想が浮かばんですよ。大雨の時は最初長靴で作業しているでしょう。その続きで長靴が離れんようになってしまうのです。

*地下足袋(じかたび)とは、足の裏にゴム底がつき、足の指が親指と残りの二股に分かれている作業労働用の足袋のこと。



今年は書けない「明けましておめでとう」

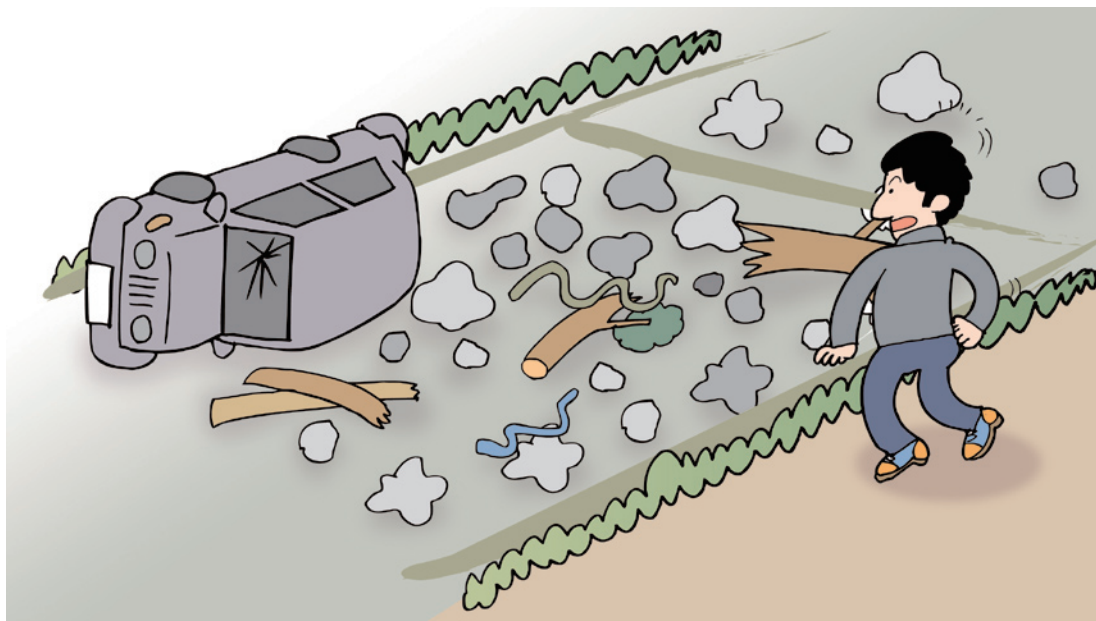
（防府市 50代 男性）

確かにゴーッという音がしたけれど、まさか山が崩れてくるとは夢にも思いませんでしたね。それに、サッシだと防音がしっかりしているから、あまり外の音が聞こえないんですよ。気がついた時には、もう目の前に土石流が迫っていました。

その時、僕の車がパーッと家のほうへ動いたんですよ。それから、すぐそばにとめていた軽四トラックがバーンと家に当たったと思ったら、土砂が家の中に流れ込んできたのです。後日、家を見に行くと、大きな岩が入り込み、自分のいた部屋には太い丸太が突き刺さっていましたが、その記憶はまったくありません。それだけ自分が避難するのに集中していたんだと思いますね。結局、僕の車は80メートルぐらい流されて、田んぼの中で見つかりました。

災害後、近くの中学校で、「日ごろは濁ってないのに濁った水が出たときには、よう気をつけなさいよ」という話をしました。

いつもなら、今ごろは年賀状を書いているころだけど、「明けましておめでとうございます」とは、ちょっと書けないですね。時間が早く過ぎてほしいという気持ちもあるけど、この平成21年7月21日というのは、やっぱり僕らの頭の中から消えないと思います。



自分の搜索願いに驚く

（防府市 60代 男性）

私は自治会の役員で、民生委員もやっています。公会堂が避難場所になっているので、鍵をあげてもらって、避難されるという近所の3、4軒の方の手配をしてから、ひとり暮らしの方がいる下の地区の見回りに行きました。

途中、神社の西側に細い谷川があるんですが、それがもう水が道路を越えるぐらいの勢いで流れていたんです。近所の方に、「こんな状態だから何とかしてくれ」と言われました。一応、下のほうも確認しなければと思いましたが、もう長靴では通れないほどになっていましたので、この状態を連絡せねばと、ぐるりと回って、公会堂に戻ってきたんです。

広場に入った途端に、谷川が切れたのか、ものすごい勢いで水が流れてきました。いったいどうなっているのか確かめようとしたんですが、水の勢いがすごくて、どうにも動けないんですよ。みるみるうちに、この近所もみんな水浸しになってしまったのです。

何とか家に帰ると、私の搜索願が出ておりました。うちの女房は、てっきり私が災害に巻き込まれたと思ったんですね。警察の方にお詫びを言って話がついたんですけど、家族との連絡もおろそかにしてはいけないなと反省しました。



「もう帰って来られないかも」

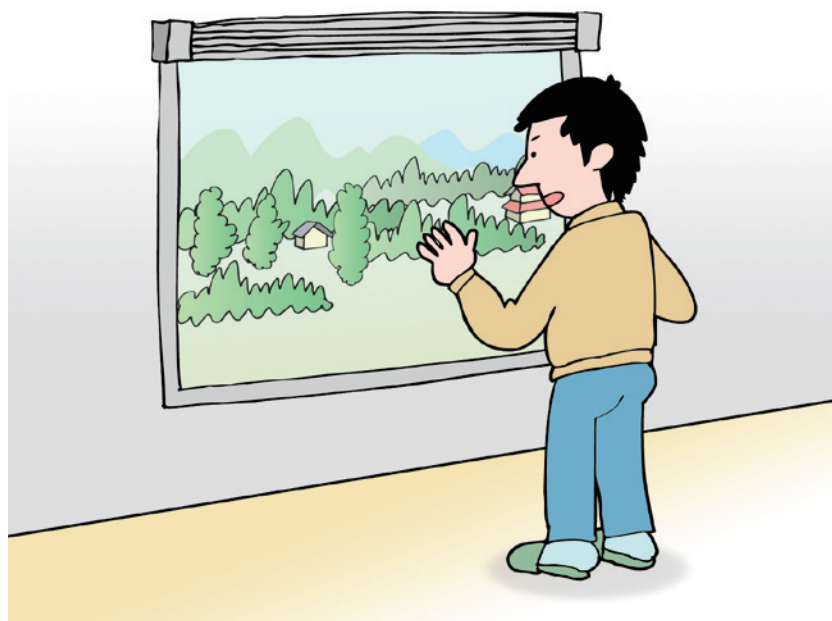
～「7分の7」の確率知り～

(壮瞥町 50代 男性)

有感地震ですよね。夜中にカタカタという音で、数回目が覚めました。翌朝になって、うちのカミさんと子どもたちは全然気がつかなかったというんだけど、私のおやじとおふくろは昭和52年の噴火を経験しているからか、「多分、噴火につながるよ」というような話をしていました。有感地震ですぐに噴火を意識したところが、経験していない人との違いなのだろうと思います。

翌々日、役場の大講堂で、北海道大学の岡田先生の会見がありました。どこかの記者が「噴火の確率は？」って聞いたら、「7分の7」って。もう即答でしたね。それは、ほぼ100%の確率で噴火するという意味で驚きましたが、この山はわかりやすい性格なんだなと変に納得しました。

家族離散というと大げさですけども、おやじ、おふくろは親戚のうち、カミさんは子どもを連れて実家に避難するし、僕は勤め先の施設に残りました。有珠山を眺めながら、「もう帰って来られないかも」と達観している自分がいました。



万全の体制で実家に避難

～2日後、目の前に噴火口、すべて置いてまた逃げる～

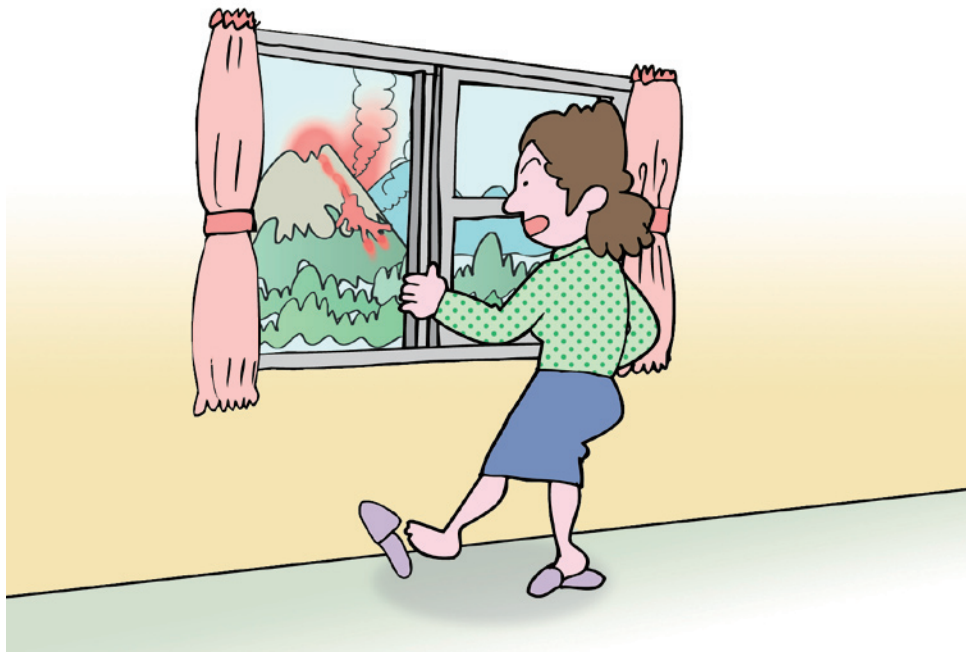
(壮瞥町 50代 女性)

3月29日に避難指示が出たので、虻田町にある私の実家に避難することにしました。大事な子供のアルバムだとか米ビツのお米とか、それこそ持っていける物を全部ピストン輸送をして、犬小屋まで車に積んで避難したんですよ。

で、しばらくゆっくりしようと思っていたら、30日の夜に何回も地震があって、耐震装置つきのストーブは、何度火を点けても、すぐにバチンバチンと火が消えてしまうぐらいでした。

ところが、31日は朝から地震が一つもなく、シーンとしていて、もうストーブが要らないぐらい暖かくて、「いいお天気ね」なんて言っていたら、午後の1時過ぎでしたね、サイレンがウーって鳴って、火事かなと思って、窓をギュッと開けて首を出して見てみると、目の前で、噴火していました。見間違いかと目を疑いましたが、噴煙がこっちへ迫ってきていました。

あんなに一生懸命に、いっぱい荷物を運んだのに、その瞬間から慌てふためいて、ほとんど何も持たない状態で実家を飛び出したわけです。



準備万端でクールに受け止め

～ニュースにならないとメディア引き上げ～

(壮瞥町 70代 男性)

うちの地域は、昭和52年の噴火を教訓に、避難所は住民が自主的に運営して、行政職員は現場に戻ってもらうという主義でやっていたから、避難所の収容人員も少な目にしてプライバシー確保の衝立も用意し、避難したその日から町営の温泉に入れたほど、準備万端でした。

ただ、その避難所から噴火そのものは見えませんでしたから、放っておくと、「もう火の海ですよ」とか、「あの辺一带、全滅ですよ」とか、いかにもそれらしい話ばかりが入ってくるわけです。ですから、できるだけ現場の情報を得てはもって帰って正しい情報を伝えるとともに、毎晩食事の後に、自衛隊が空撮したビデオをみなさんに見てもらいました。すると、自分の目で確かめることができ、「わあ、自分の家は安全だ」と、すごく落ち着くんですよ。危険の及ばない距離から現場を見せると納得するんですね。

私は、地域で積み重ねてきたことがどう機能するか点検している気分でしたし、災害にかみつく人が誰もいない。報道陣にマイクを向けられて「大変ですか」と聞かれても、「自然現象だからしょうがない」とかいうコメントしか出ないので、記事にならないと避難所からも引き上げてしまいました。極めてクールな雰囲気でしたね。



安全な時期に学ぶ山と共生の大切さ

～火山防災への地域の積み上げ～

(壮瞥町 50代 男性)

前回の噴火を経て昭和新山*50年の実行委員会できた共通認識は、私たちの住む街は観光地で、明るい陽の部分もあれば、陰の噴火もあるということでした。それはもうほんとに背中合わせです。奇しくも昭和52年は、火祭りの日でお客さん呼んでにぎやかにという時に噴火になっちゃった。100%逆転しちゃう感じ。それは非常に辛いことなんだけど、あとの30年ぐらいは、ちゃんとすべての恩恵を受けられるわけですね。

そういうことは、やっぱり歴史と経験で培っていくもので、噴火のメカニズムや、地域の特性というものを、安静期といいますか、平穏な時期に、子供も含めて学ぶ機会を持つことって必要なんだろうなと思います。

子供郷土史講座なんかで子どもたちを集めて、一緒に昭和新山に登ったり、大学の先生などの話を聞いたりというのも、重要なことですよね。そういうことが定期的に行われているということが、この町の地域力というものなのではないかなという気がします。

*昭和新山とは、昭和18年に畑がいきなり隆起し、いまでは標高407mまで隆起した活火山です。



ひとりに畳1枚の支給に喜ぶ

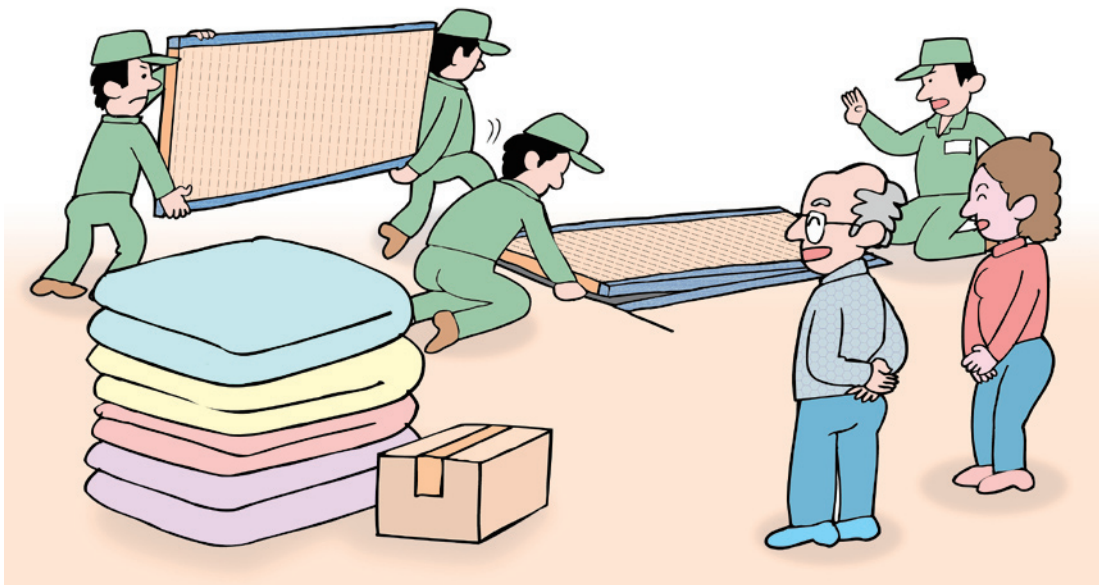
～避難先で郷里を案ずる毎日～

(伊達市 60代 男性)

避難勧告が出て、とりあえず親戚などに避難した人たちも、2、3日すると戻ってくるので、最終的には避難所も9ヶ所にまで増えました。私は自治会長を束ねる役目でもありましたので、避難所1ヶ所に1人ずつ責任者を置いて、その人たちの意見をまとめては、行政と連絡を取り合っていました。

31日の午後1時ごろに噴火したと聞き、「これで家に帰れるぞ」と思ったのですが、まだ危険だということで、立ち入りも許されず、避難生活は16日間に及びました。自分たちの地区がどのような状態かが気になり、自衛隊が空から撮った映像をテレビで食い入るように見つめていましたが、虫眼鏡で見ないとわからないほど小さくて、はっきりしないのです。空き家にしているから不安でね。もっと情報が欲しいと切に思いました。

唯一喜んだのは、3日目に自衛隊が厚さ3センチくらいの畳を運んできてくれて、1人に対して1枚ずつ交付されたことです。あれにはみんな喜びましたね。それまで板間に毛布1枚か2枚で寝ていたわけで、肌触りだって違うし、やっぱり日本人は畳に愛着がありますから、畳に寝られるということだけで感動しました。



直前まで楽しい火山教育の企画会議

～「有珠山が動き出したよ」のひと言で一転～

(壮瞥町 70代 男性)

その日、北海道大学の有珠火山観測所で、この地域の火山の権威が全員集まって、子どもたちに自然災害の教育をするためのプロジェクトの企画会議をやっていました。「有珠山に登ろう」、「昭和新山に登ろう」なんて、熱っぽくワアワアやっていたわけです。私たちとすれば、火山(有珠山)とうまくつきあうノウハウを次世代に引き継ぎたいという思いだったのです。

語り疲れ、家に帰って早めに寝ていたところへ、突然、枕元の電話が鳴り出しました。で、聞こえてきたのは、聞き慣れた岡田先生の声です。「有珠山が動き出したよ」のひと言でした。

急いで観測所に行くと、すでに役場の人も来ていました。みんなで地震計のデータを見守っているうちに、有感地震が発生したとの連絡が入ってきました。それが実際に自分でも揺れを感じるようになって、「これは噴火に間違いない。もう、後戻りはできないな」と思いました。



避難所内の取材規制で被災者の心を守る

～子どもたちの居場所作りにも苦心～

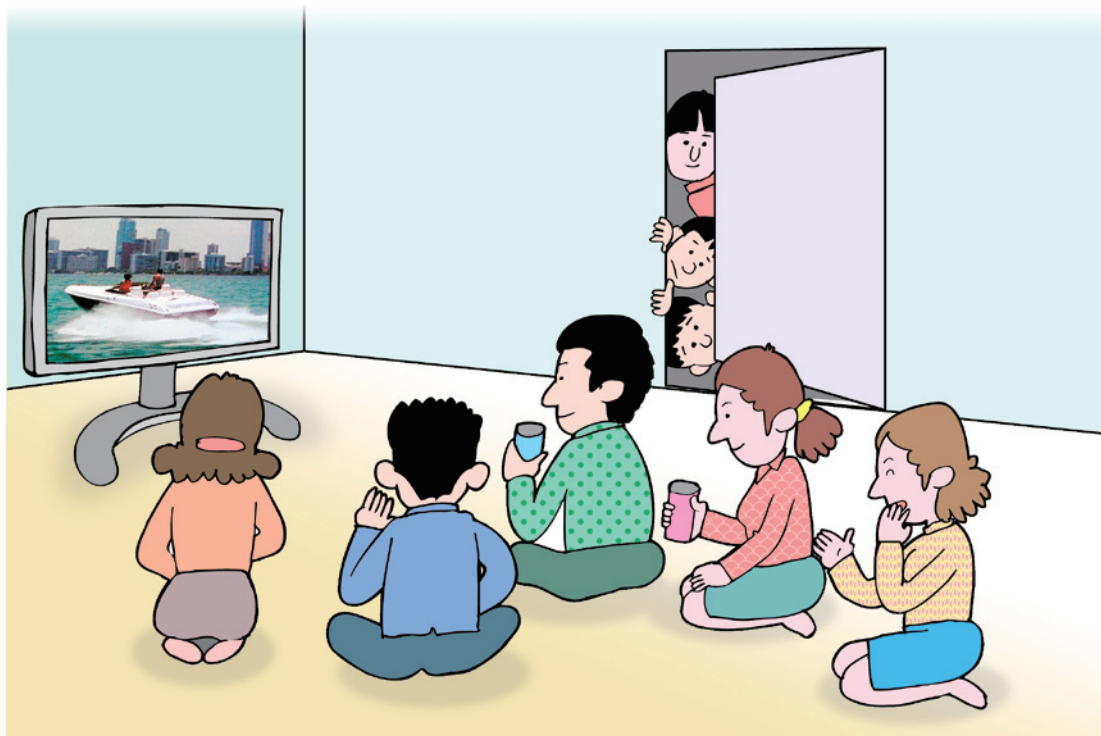
(壮瞥町 60代 男性)

昭和52年の噴火の時は、大人たちはもう慌てふためいちゃって、避難所の中は小学生から高校生、喫煙者までごちゃまぜで、子どもの居場所というものがあったりなかったりです。アニメを見たくとも、大人がテレビを占領しちゃって、子どもは完全に放置状態で、たばこを覚える子も出るありさまでした。

そういうことがあったので、今回の噴火では、避難所の中に子ども専用のテレビを置いたスペースを作るなど、子どもたちの居場所を確保しました。それから、先生方がしょっちゅう避難所に顔を出して、「元気か」と声をかけてくれるようにしました。

マスコミには、こちらからふんだんに情報は出すけれども、決められた時間や枠内でのみ情報収集をするということ、避難所の室内には一切立ち入らないということを守ってもらいました。だから、以前の噴火の時のように、避難所の部屋の中に入り込んで、午前5時から、疲れ切って寝ているところにいきなりライトを当てて写真を撮るといったようなことはなくなりました。

やっぱり、避難所の運営には、人に対するこまやかな気配りが必要なんだと思います。



避難所の自治会を組織

～ご近所の小グループの話し合いでルール作り～

(壮瞥町 60代 男性)

避難勧告が出るということで、役場に話を聞きにいったところ、できれば避難所の自治会を組織してほしいという要望がありましたので、各自治会の会長さんなどに呼びかけて避難所自治会を組織しました。

いざ避難所での生活が始まると、上げ膳据え膳のような感じで、生活が単調なんです。例えば炊き出しがあると、ちょうど中学校は春休みなもんですから、先生方が来て、全部配膳してくれるんですよね。で、私たちはほんとお客さんなんです。

被災した人はひまで時間をもてあましてるんですね。ボランティアとかで支援してくれるのはありがたいのですが、仕事をとられては、畳を見るしかないんです。

それではまずいんでないかと。これから何日続くかわからん避難所生活を自主的に運営しようと、共通の約束をみんなで確認しあいました。それから、避難所にも、畳が入っていましたから、地区ごとに列を作って、さらにその中に小グループをたくさん作りました。

全体で話して物事を進めるのは大変なんですよ。けれども、小グループ単位で話し合いをすると、隣近所同士なものですから、うまくいったなと思います。



噴火前から避難所新聞

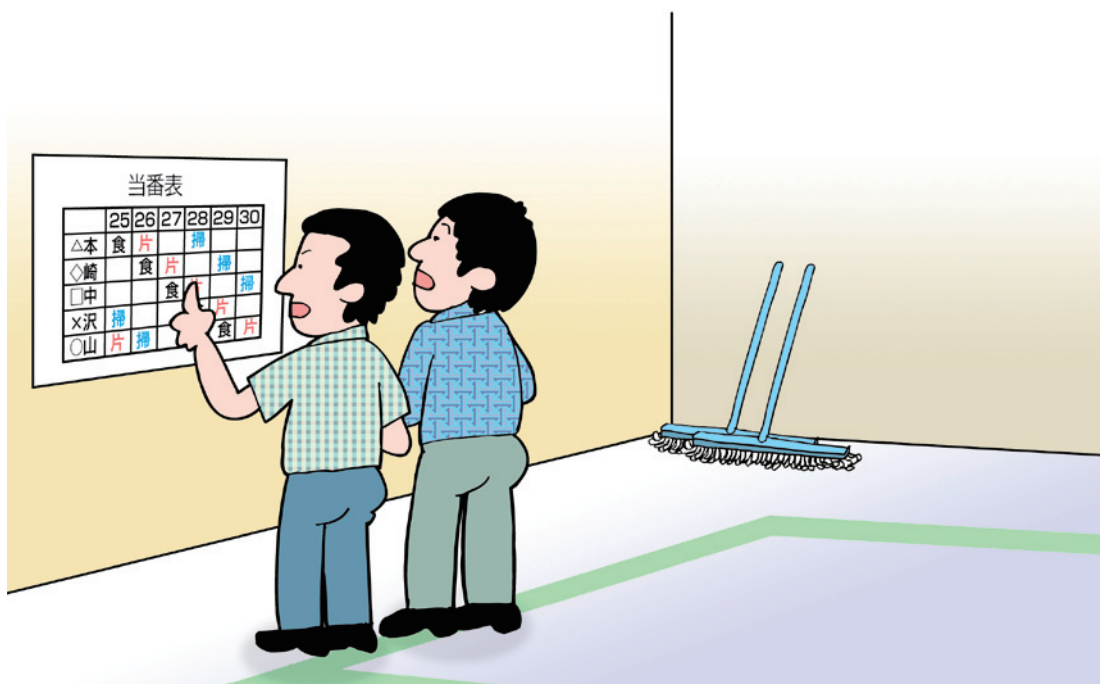
～生活の約束事など知らせる～

(壮警町 60代 男性)

避難所に入ったら、いつ出られるかわかりませんからね。生活のリズムがどうしても単調になってしまうので、何時までに起きて、何時までに清掃して、食事をして、後片づけをする、というように、タイムスケジュールをきちんと作りました。また、それを同じ人がやるのではなくて、毎日、順番に変わってやりましょと、当番表も作りました。

そうして、こういったことを皆さんに周知するために、広報紙「2000年有珠山」を発行したのです。広報誌には、避難所の皆さんがお互いを知らなければならぬということで、「この班にはだれだれさんがいますよ」と班ごとに名前を入れて、何人構成ですよということを理解してもらおう方策をとりました。

もう、個人情報も何もありませんよね。避難所にどういう人たちが生活しているのか互いに知っておくことのほうが大切だと思ったからです。



指定避難所の間近で火口開く

～50キロ先の長万部まで転々と～

(洞爺湖町 70代 男性)

うちの地域は、昭和52年の噴火で土地や家をなくした人たちが洞爺湖温泉街から引っ越してきたところなのです。ですから、地震にはかなり敏感で、避難指示が出ていないうちから、20世帯ほどが自主的に避難していました。

自治会長だった私は、噴火が近づいていることを伝えながら、「指定されている避難場所はここですよ」、「避難するときには連絡をくださいね」と、1軒1軒声をかけて回りました。それから、地域の自治会長が集まった際に、避難所の毛布が足りないぞという話になったので、全部の家庭に毛布の提供をお願いして回りました。

その日は、5、6人で毛布集めをして、うちの玄関前に集めた毛布を積んでいきました。「昼休みをとってから続けましょう」ということにしていたのですが、午後1時ごろに噴火が始まり、そのまま避難するほかありませんでした。

避難所に指定されていた高校が火口間近で危険な地域にあったので、すぐに別の場所に避難することになり、さらに一旦落ち着いた小学校が春休みが終わって明け渡さなければならなくなったりで、いくつかの避難所を転々としました。まさか50キロも離れた長万部まで移動することになるとは、思ってもみませんでした。



避難所は20～30人で班作り

～苦情に応え勉強場所や遊び場にも配慮～

(洞爺湖町 60代 男性)

避難勧告が出て、知り合いの家に1週間ぐらいお世話になってから、伊達のカルチャーセンターに頼み込んで避難させてもらいました。当時そこには7、8百人いたと思います。最後に入れてもらったために、最初の1週間ぐらいは2階の廊下に寝泊まりしていました。

私は、そこから避難所運営に関わることになったわけですが、20～30人でひとつの班を作って、皆さんの困り事だとかは苦情係みたいなものが聞いて、それを班長へ伝えて、班長さんが私ともう1人の方に申し入れるというやり方をとりました。

みなさん、だんだん慣れてくるにつれて、トイレの数が足りないとか、洗濯機が足りないとか、洗濯機の回す時間が遅くてうるさいとか、子供たちが勉強する場所がないとか、子供たちが騒いでうるさいとか、避難しているのに飲んでいびきをかいてうるさいとか、苦情が次から次へと出てくるんですね。それらをひとつひとつ処理してゆくのに悩んだこともありました。

僕らのところは他の避難所に比べて建物も立派だし恵まれていたと思うのですが、避難生活が長引くと、いろいろな苦情が出てくるものなのですね。



九州から来たボランティアの結婚式に北海道から参列

(伊達市 60代 男性)

ボランティアセンターを立ち上げた直後から、昼も夜もひっきりなしに全国からの問い合わせ電話が鳴り、受け入れ体制もできていないうちからボランティアの人たちが来るので、現場は大混乱になりました。それでも、阪神・淡路大震災を経験しているボランティアたちも来てくれたので、その人たちの知恵をかりて、ああ、こうだと言いながら、準備を進めました。

「はい、あなたはこっちに行ってください」、「あなたはあっち」と、我々はコーディネーターのつもりでしたが、言われた方も何が何だかわからないで現地へ行って、大変だったろうと思いますね。一応、活動が終わって夕方に帰ってくると、今日の活動はどうだったかと必ずミーティングをやりました。そのミーティングで情報を得て、次の日の活動につなげていったことは、まあまあよかったのかなと思います。

あの時一緒に活動した人たちとは、同じ釜の飯を食った間柄というか、今も手紙のやりとりなんかがあって、「本部長、来てください」と九州から来たボランティアの結婚式に呼ばれたときは、やっぱり嬉しかったですね。



役立った地域のきずな

～子どもたちの避難先確認に協力～

(壮瞥町 60代 男性)

地震がなんだかありまして、その地震は普通の地震と違う感じでした。下から突き上げるような揺れ方で、昭和52年に経験した地震とかなり似ていたもんですから、「もしかしたら、これ、有珠山かな」と思いながらも、「有珠山は大体30年の周期で噴火するから、まさか噴火するはずがない」と考えていました。

当時、小学校の校長をしていた私は、職員と手分けして、まずは避難している子どもたちの居場所を確認する作業に当たりました。中学校の体育館に避難している子、町内で避難している子、避難しないで自宅にいる子、母親の実家に行った子など、いろんなケースがありました。

すぐに避難先が確認できる子どもたちはよかったです。どこに避難しているのかわからないという家庭があって苦労しましたが、我々が困っている話を聞きつけた近所の方が、その人の消息を知っていそうな人を教えてくれましてね。地域のつながりの強さ、きずなの強さということ、その時にほんとうに感じました。



取材陣の真夜中チェックアウトに宿泊料金取り忘れ

(壮瞥町 50代 女性)

うちはペンションをやっています。当時、近くで建設中の施設の現場監督さんも宿泊していましたが、「有珠山、噴火するんだって？」って聞くから、「そうみたいですね」と答えると、「じゃあ、悪いんだけど、ここ引き揚げます」と、荷物をまとめて、帰られました。

そんなこんなでバタバタやっているうちに、今度は新聞社の方が4名いらっしゃって、「身近で噴火を取材したいから、泊めてください」というんですよね。うちの主人が、「いや、泊まってもらってもいいけれど、避難指示が出たら逃げてくださいよ」と言うので、「あ、それは大丈夫です」と。で、お部屋に通すと、すぐに取材に出かけて行きました。

その日の夜中の12時に、ピンポンピンポンってフロントの呼び出しが鳴るんで、どうしたのかなと思って出ていくと、新聞社の人たちが、「すみません、チェックアウトします」と言うのです。本社から「そんな近くで取材していたら危ない」と言われたからということでした。

真夜中に、「すみません」のひと言だけ残して出ていきました。こっちもあたふたしていたから、宿泊代もらうのを忘れちゃいました。



避難より商品の出荷

～避難勧告も聞き流す～

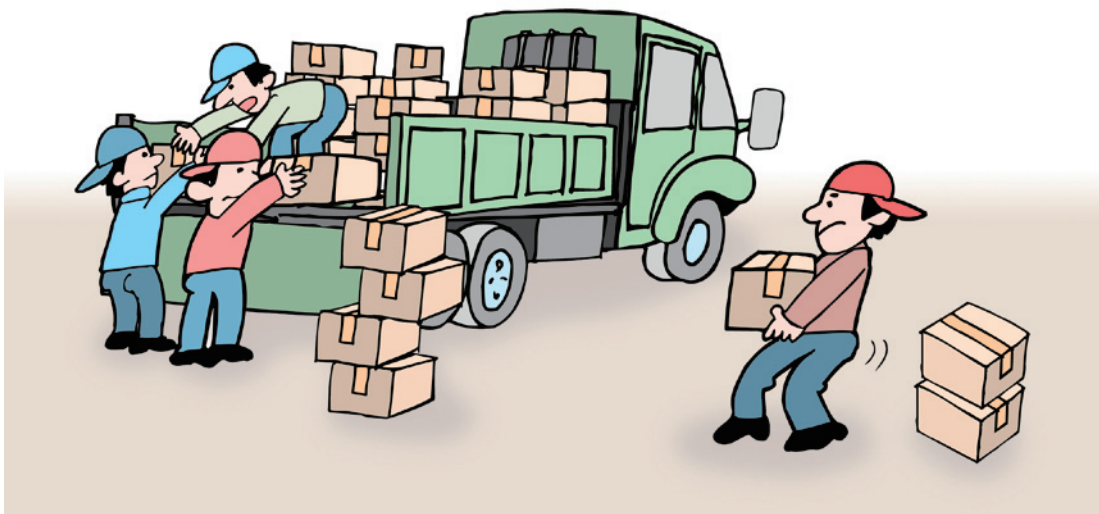
(洞爺湖町 70代 女性)

噴火の3日前には、ちょこちょこと身の回りのものを記憶に残るところに集めてみたり、懐中電灯を各部屋に置いてみたりし始めていました。次の日は、倒れても中の食器が外へ飛び出して壊れることのないように、食器棚のガラス戸と中の食器との間に全部、段ボールを入れました。

ここに越して来たときから、山が近くにあるから気をつけなきゃと、背の高い家具とかは、部屋の中に一切置いていませんでした。だから、いつでも避難所へ行く準備はできてはいたんですよ。

うちはホテルなどに食品を納める商売をしているものですから、ストップするとお客様に迷惑がかかるので、男連中は大急ぎで食品をトラックに積み込んでいました。で、みんな出荷作業に夢中になっていたから、当日も噴火したことさえ気づかずに、嫁からの電話で山を見て驚きました。

あんなに「出なさい、出なさい」って、勧告まで出ていたのに、家にいたなんて言ったら、しかられちゃいますね。私は昭和52年の噴火を知っているものだから、どこかに、「前に比べたら、まだ大丈夫」といった気持ちがあったのだろうと思います。



助かった1日前の避難勧告の事前情報

～道路規制前に移動終える～

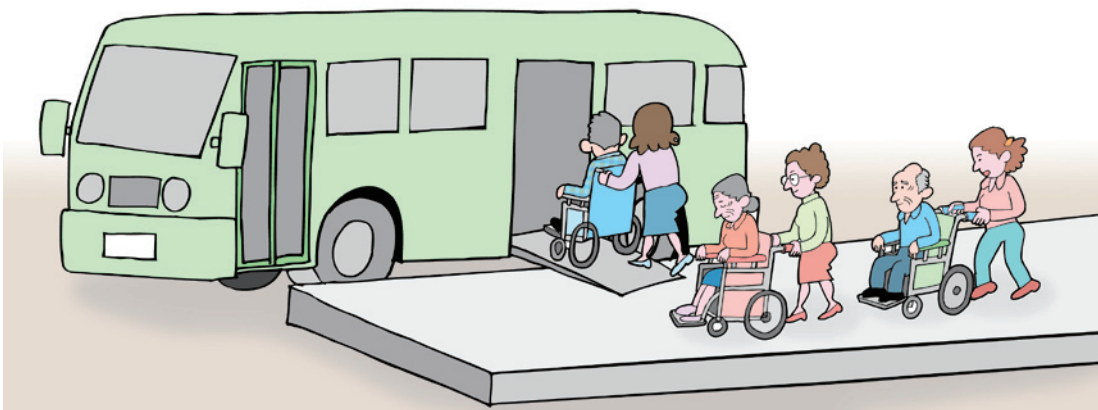
(伊達市 60代 男性)

昼すぎに市の高齢福祉課から「避難勧告が出される可能性がある」というお電話をいただき、避難先はどこにしたいかという問い合わせがありましたので、「サポートセンターひまわりさんにできれば避難したい」というお話をしました。

その日の3時か4時ごろ、「では夕食後、避難してください」という連絡がありました。で、通常6時の夕食を5時に出し、6時に施設を出るという計画を立て、関係各所に連絡をしました。それからは大慌てで、まず職員の非常招集をかけた後、ひまわりさんに行って、どこの場所を使わせていただけるのかの確認をしたりしました。

午後6時に、いろいろな方の応援を得て、ショートステイの6名を含む66名の避難を開始しました。避難勧告前なので、まだいつもの交通量でしたが、障害を持たれている方がほとんどで、車いすやストレッチャー等を使っての輸送となりますので、車で15分の距離を2時間半かかりました。到着してからは、すぐに部屋割りや運んでいった寝具等の振り分けを行いました。

町全体に避難勧告が出てからは道路が混み合い、職員が荷物を取りに行くだけで4時間ぐらいかかりました。1日早く避難の情報をいただいて、非常に助かりました。



自主避難せずお年寄りと施設で日常

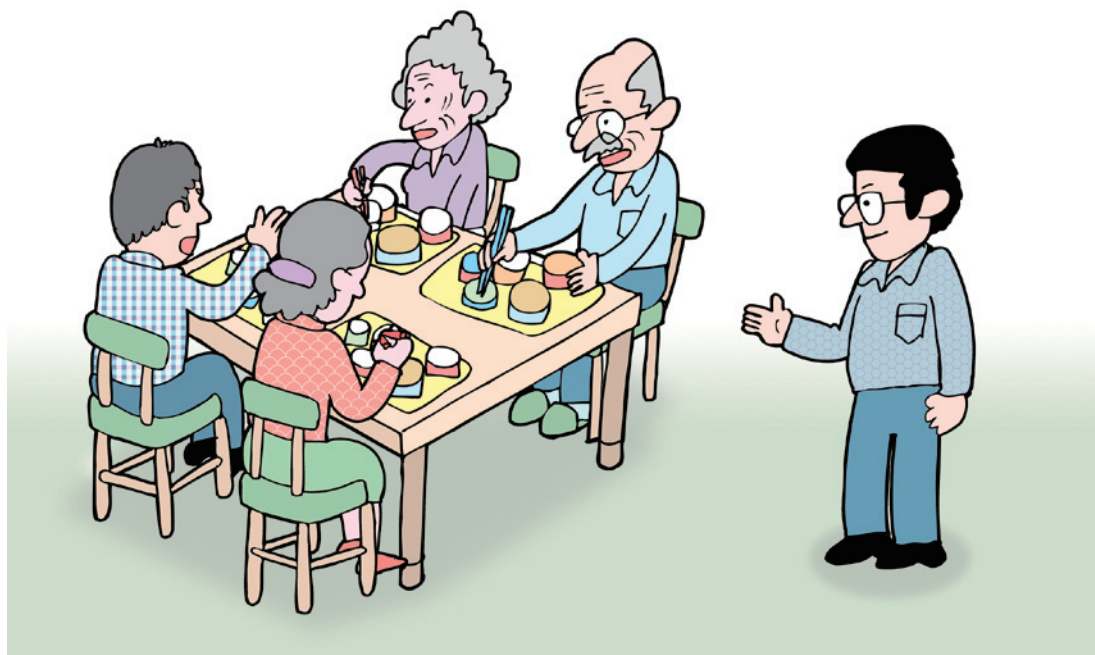
(壮瞥町 50代 男性)

うちの施設がある場所は、避難勧告エリアには入っていませんでしたが、「風が強かったら、山頂から半径6キロ以内にこぶし大の石が降る可能性がある」という情報を得てはいました。関係者間で、さあ、うちの老人介護施設をどうするかといった時に、移動する危険や不安、エネルギーの消費を考えると、他の場所へ大移動するよりも、そこにとどまるほうがむしろ安全ではないかという結論に達しました。

なぜかという、昭和52年の噴火当時、僕はまだ学生でしたが、施設がまともに噴火口のふもとにあったので、その晩のうちに避難をして、理事長だったおやじも職員の人たちも大変苦労していたのを見ていたからです。

避難生活というのは非常にハードで、お年寄りたちのストレスも当然ありますが、支える側の職員のストレスもすごいんですよ。だから、そういうことはなるべく回避したいと思ったのです。

ありがたいことに、当時、協力病院だったところからは、「いつでも受け入れますよ」、「移送の際は手伝いますよ」と早くに言っていただいて、いざとなったら、そういうこともできるという選択肢は持ちながら、「今の段階では避難しない」という判断をしたのです。



避難中も空き事務所で商売続ける

～一旦離れたお客は二度と戻ってこない～

(洞爺湖町 70代 女性)

うちの商品は乾物と冷凍食品です。冷凍庫が必要なのですが、一時電気がとまりましたでしょう。だからかなりの損失が出ました。それに、6月に元の場所に戻るまで手つかず状態でしたから、商品は賞味期限切れとなり、全部廃棄処分しました。

自分たちは、昭和52年の噴火の時に、商売を始めたばかりで半年もしないうちに家を壊されて、何も営業ができなくて、ほんとうに長く苦しい時間を過ごしてきた経験がありますから、事業だけは絶対続けなきゃという信念で、すぐに商売を再開しました。

「もうあそこはだめだから、同じものだったら他から購入しよう」というところが出てきますからね。一旦そうになったら、二度とお客は戻ってきません。だから、冷蔵庫がない分、物をいっぱい集めて、注文をとったら配達して、帰ってきたらすぐまた次のところに走るということで、主人と息子は、積み上げた荷物の中に畳1枚敷いて、そこで寝泊まりをしていました。

避難している間に、事務所や倉庫を提供してくれた方々にはほんとうに感謝しています。それがなかったら、営業は続けられませんでしたからね。



患者の避難は職員も一緒

～避難先の治療体制も万全に～

(洞爺湖町 50代 男性)

病院ですので、いわゆる災害弱者の方を抱えているという現状がありまして、一般の人たちより早めに避難を開始しなければならないということで、避難勧告等が出る前から役場と頻繁に連絡をとっていました。

で、噴火の2日前には、一次避難と称して、いくつかの病院に振り分けて避難しました。中には、病院を移っただけでパニックを起こす患者さんもいますから、自宅が被災している職員も一緒について行ってもらって、一病棟分まるごと動かすということもしました。

ただ、噴火の避難は長期化するということが鉄則ですから、常に二次避難のことを考えていました。噴火場所などの状況を見ながら、次の安心していられる病院を探してアレンジするというのが、われわれ職員の仕事でした。

とにかく、安全な場所に患者さんを避難させることに全力を注ぎました。やっぱり病院の場合は治療ができる環境が必要ですから、一度逃げればそれで終わりとならないところが難しいなと思います。



介護保険スタート前で全員の状態把握

～避難後もすぐに巡回診療～

(洞爺湖町 50代 男性)

最初は私も山頂から噴火すると思っていました、「うちの病院のサーモグラフィーを山に向けて温度を測ろうか」なんて冗談も言っていたぐらい。気持ちの余裕はあったんです。

それでも、噴火の3日前ぐらいから下から突き上げるような地震を感じるようになり、携帯電話も通じない状況になってきたので、噴火の危険性が迫っていることは感じていました。けれど、お年寄りたちは大体が以前の噴火を経験しているので、慌てないんですよ。避難の話をして、「まあ、ご飯食べてから考えるか」って。

そんな具合だからパニックにならずにすんだのかも知れませんが、結果的にそのまま帰れなくなってしまったわけで、もっと早めに準備しておけばよかったなと思いました。

ただ、その年の4月1日から介護保険が発足する予定でしたから、患者さん全員の名前と身体の状態をケアマネジャーの人たちが全部チェックしていたんですよ。そのおかげで、すぐに状況を把握できましたし、巡回診療にもつなげることができました。はからずも、介護保険の準備が役に立った感じでしたね。



乳牛60頭も3カ月避難でストレス

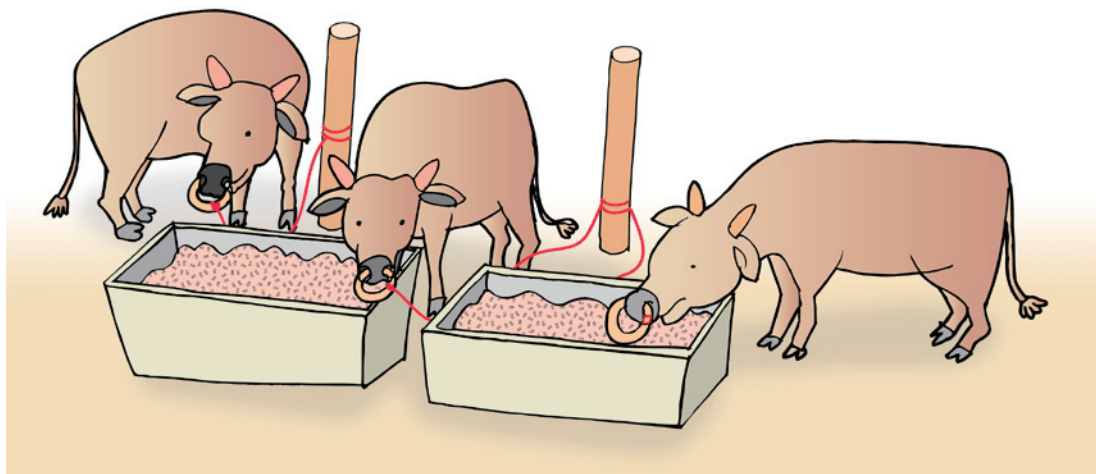
(洞爺湖町 40代 男性)

私のところは乳牛を60頭ほど飼っております。噴火の3日前に、「部分避難指示」というものが出て、自分たちの地域もそれにかかりましたが、避難指示のかかっていないところを通って牛にエサをやりに行くつもりで、半月分ぐらいの準備はさせていました。避難するなんて、最初から一切考えていませんでした。

でも、実際は、噴火の翌日に避難しました。地殻変動のために水道が止まることが予想されたし、全町避難が長引けば、エサが切れても持ってきてもらえなくなるし、搾った牛乳を運んでくれるタンクローリーが入ってこられなくなると思ったからです。

納得したというか、それがいいと思ったのではなく、仕方なく動いたかたちです。結局、3ヶ月近く避難していたわけですが、60頭分の牛のエサを運ぶというのは大変なことで、いただいた草とかで何とかしのぎましたが、環境が変わったストレスで、だめにした牛も、生きて帰ってきたものの繁殖ができなくなった牛もいました。

やっぱり、避難解除の時期などは、もっと現場第一で、きめこまかく進めてもらえたら良かったのと思う気持ちが強いですね。



籠城のつもりで冷蔵庫の食料残す

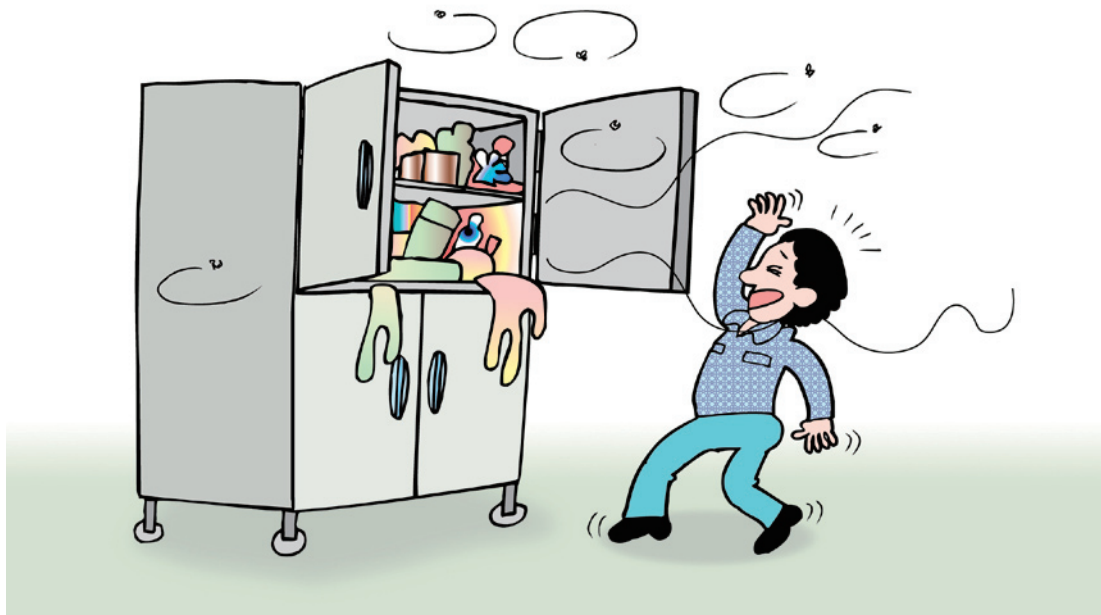
～3カ月後に「ドロドロ」～

(洞爺湖町 40代 男性)

昭和52年の噴火を経験していたからか、何とかなるだろうという気持ちがどこかにあったと思います。避難指示が出された後も、うちのホテルでは当時の社長、専務の私、総支配人、ボイラー係、予約の責任者などが、電気を消して、保守要員という形で、ロビーにひっそりと泊りました。

ホテルですから、冷蔵庫や冷凍庫には食料がたくさんあるわけです。2、3日して戻ってきた時のために食糧は持ち出さずにとっておいたほうがいいだろうし、水もタンクにあるから何とかなんと、のんきに構えていたのです。

結局、電力会社から電気を切りますという連絡が入ってから、3ヶ月後に戻るはめになったのですが、地下室の中は、とてもこの世の物とは思えない巨大なハエがブーンと飛んでいました。冷蔵庫の中もキノコが生え、イモは葉っぱが出て青々としていたし、冷凍ストッカーはドロドロで、「これ何だったんだろう」みたいな状態でした。やっぱり、避難が長期化する可能性があることも考えに入れておくべきだったと思います。



ゲートボールしたがる老人クラブも説得してチェックアウト

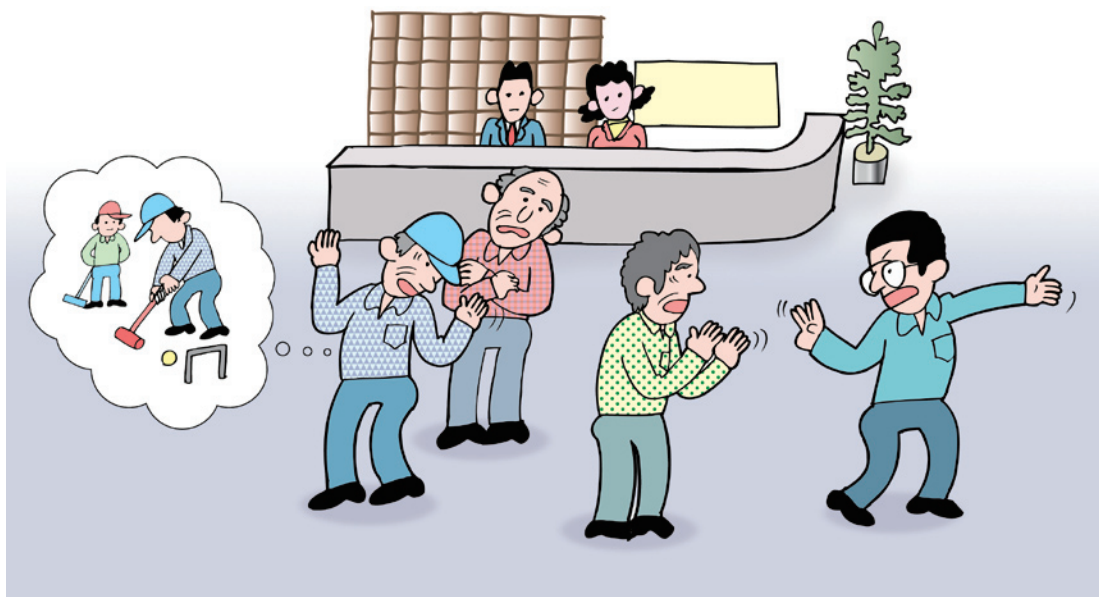
(洞爺湖温泉 40代 男性)

地震の数の多さから見て、このままだと多分避難指示が出るだろうということで、社長と相談して、営業を中断することに決めました。避難と言っても、ホテルの場合、お客様にチェックアウトしてもらえばそれで終わり。「噴火のおそれがありますから、お帰りください」と言って、帰ってもらえば、午前10時で完了となるはずでした。

ところが、老人クラブの方たちが連泊していらっしゃって、お年寄りですから、「噴火とは」といったところから説明しましたが、「きのうのゲートボールがまだ終わっていないから、それが終わったら、昼飯を食べてから帰る」と言われましてね。

みなさん、よほど泊まっていたかったらしく、「あなた方は残っているんだろう」と言い出すしまつで、「逃げていただかないと、我々も避難できないんですよ」と言って、ようやく了解をとりつけ、うちのホテルの午前中の送りのバスで帰ってもらいました。

もう少し遅かったら、噴火のためにバスも入ってこられなくなって、その老人クラブご一行は、自衛隊のトラックのお世話になるところでした。



農協のバスで勧告地域内のハウス通いで苗守る

(伊達市 60代 男性)

われわれ農家は、翌日の昼には帰ってくるつもりで、家を出たのですが、すぐには帰れないということになって、あわてました。で、私は農家を束ねる立場にいましたので、農協に行って、何とか換気と苗の手当てにだけでもと頼みこんで、警察の監視の下、農協のバスで、朝と夜の2回、換気と保温のために入れるようしてもらいました。

私たちの地区は10人までと決められていましたから、その10人が手分けをして20戸以上の農家のハウスを、朝は開ける、夜は閉めるという作業をしていました。一番いい時期に出荷するためには今苗を育てておかなければと、みんな焦っていたんですよ。

ところが、噴火後に有珠山の頂上に亀裂が見つかり、立ち入りは一切ダメということになって、1週間以上も放置した苗は、結局はほとんど使いものにならなくなりました。

仕方なく、ほかの地区のハウスを借りて種をまき、苗を育てて、どうにか出荷時期に間に合わせることができましたが、農家にとって、時期によっては、1日、2日が勝負ということもあり、それを逃したら1年間、取り返しがつかないこともあります。だからその辺をどう考えるのかが、今後の課題ですね。



3、4年探してやっと見つけた次の自治会長

(呉市 70代 男性)

災害の後で、私が会長をやめる時にね。次に会長になる人がおらんのですよ。3、4年ずっと、「この人は？この人は？」って言って回ったんだけど、誰もおらん。こら、死ぬまでやらないけんかな、と思いよったんです。でも、老人会に入ってきたこの人をようやっと見つけてね。

最初は「わしは老人じゃない、老人会なんか入りとうない」って言っていた人が、ご近所のつきあいが大切やからって入ってくれたんですよ。それで、私が自治会長も老人会の会計もやっているのを見て、大変そうだと気付いてくませてね。私もだんだん目が見えんようになるから「誰か代わってくれんか」と言ったら、「わしがやろう」って言ってくれたんです。やっぱり探してみないと見つからないものですね。

次の人もその次の人も立派な人でね、今でもいろいろと相談しながらやっています。三人おれば文殊の知恵じゃないがね、いろんな意見が出てね。今のところ幸せです。



災害時にも必要だった女性の視点

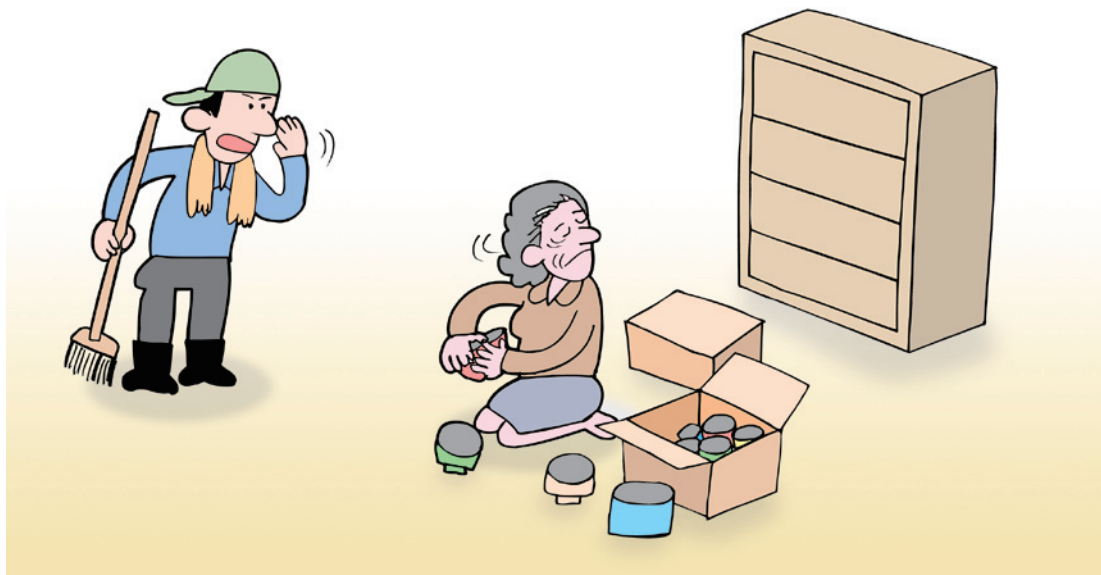
(宇部市 60代 女性)

被害にあったおばあちゃんのところに、ボランティアの方にやっと来てもらったんです。でも、そのおばあちゃんは、結局見てもらいたくないものがあるのか、「女性のボランティアの人に来てほしい」と、こう言われたんです。

で、市のほうに行ったら、女性のボランティアの人は今はおらんと言う。仕方がないので、市の福祉課に電話して、「ばあちゃんが困っているけん、相談相手になってくれんかね」とお願いしました。

やっぱり女性の視点が要るというのは、今どこでも教えられていますよね。部屋の押し入れを片づけてもらう時にも、女性の物や何かがあるから男性では困る。だからと言って、女性の力ではモノを運びきれないという矛盾がありました。

また、災害で避難した女性が着替えをする場所を確保するとか、女性への配慮が必要だということもこれから啓発して欲しいと思っています。



体育館の避難所は問題山積

～高齢者に苦痛な和式トイレ、消灯すると真っ暗～

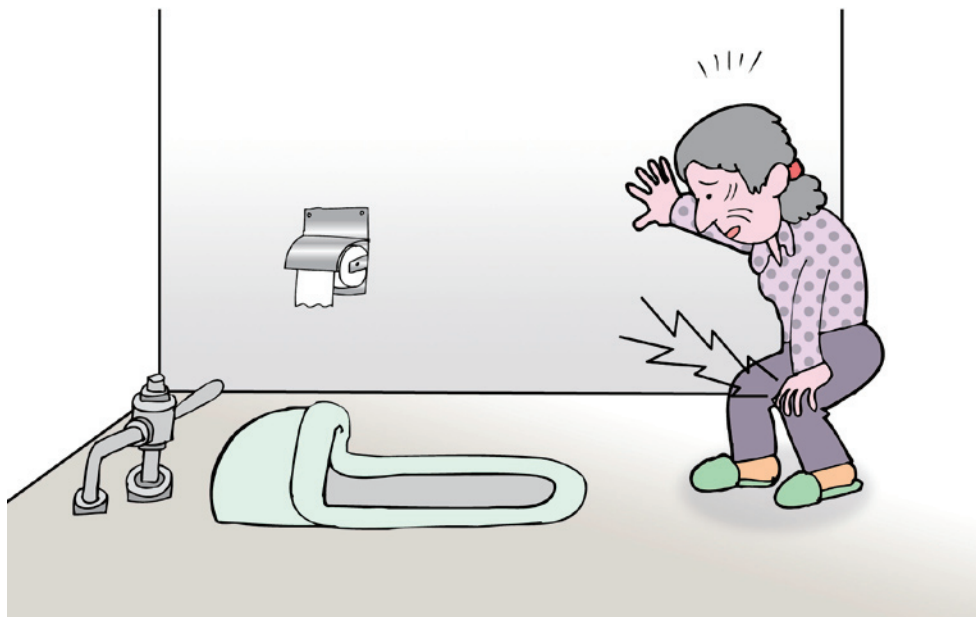
(壮瞥町 60代 男性)

わたしたちの町は高齢者が結構多くて、避難所で生活する上で一番困るのは何かというと、トイレなんですよ。狭いし、まだ当時は和式でしたから、ひざが痛くて曲がらないとかいうお年寄りがたくさんいました。トイレを洋式にとっても、すぐできるわけではないから、和式に簡易式の洋式トイレをかぶせてしのぎました。

それから後で洗濯機とか乾燥機を設置してくれたんですけども、洗濯しても干し場がないということで、ちょうど春休みだったもんですから、学校の教室を干し場に開放してもらえないかと頼んだりもしました。

何と言っても体育館が避難所なもんですから、電気を消すと真っ暗で、点けると真昼と同じになってしまうんです。だから、電気を消しても、どっかの壁とかを照らす間接照明を用意して、安眠できるような環境をつくってほしいとかいう要望も出しました。

とにかく、体育館での生活にはいろいろ問題があることが、暮らしてみてもよくわかりました。



貴重品の管理に頭悩ます避難所運営

(洞爺湖町 60代 男性)

避難所では、印鑑とか、通帳とか、カードだとか、みんなそういうのを持っていて、畳1枚か2枚のところ雑魚寝しているものですから、そういうものをどうやって守っていったらいいかということが再三問題になりました。

銀行の貸金庫みたいなところがあって、そういうところに預けたらどうかとかいろいろいろなことを言っていたんですけども、解決策はみあたりませんでした。よく、「避難する時には貴重品を持って家を出るようにしましょう」とか、言われているのにね。

結局、部屋ごとに無人にならないようにお互いが見張って、不審者の出入りがないうような形をとることにしました。最終的には個人の責任ということですね。

ご近所や町内会とかでまとまってひとつの避難所に入っていれば顔がわかるのですが、地域が違う人たちが一緒だと、どこの人なのかかわからないわけですよ。たまにしか帰ってこない息子さんとかも、不審者みたいに思われちゃう可能性がありますものね。この次は、そういったところにも工夫が必要じゃないかなと思います。



避難者対応に栄養士さんが大活躍

～コンビニ弁当のメニューも考案～

(豊浦町 50代 男性 役場職員)

うちは、町の人口と同じぐらいの4000人の避難者を受け入れました。初めの3日間は学校給食センターとか、道の駅の厨房施設でつくったりしていたんですけど、やはり長期間の対応は無理なんです。

それで、民生課の女性部隊が栄養士さんと相談して、まとめてコンビニ弁当を注文しようという話になったわけです。町内にコンビニはなかったのですが、お願いしたら運んでくれたんですね。でも1週間以上たつと、やっぱり「野菜が食いたい」とか、「緑黄色野菜を」とか、「たまにはつゆ物が食べたい」とか、そういうことが希望として出てくるんですよね。

そこからがうちの栄養士さんたちの頭のいいところと言ったら変だけど、カロリーのバランスを考え、野菜などを取り入れたいろいろなメニューを作って、町の方からコンビニへ注文書を出すようになりました。

最終的に避難所を閉じたのは6月10日。「これ、栄養士学会でも発表したら」なんて言ったほど、栄養士さんたちはよくやってくれたと思います。



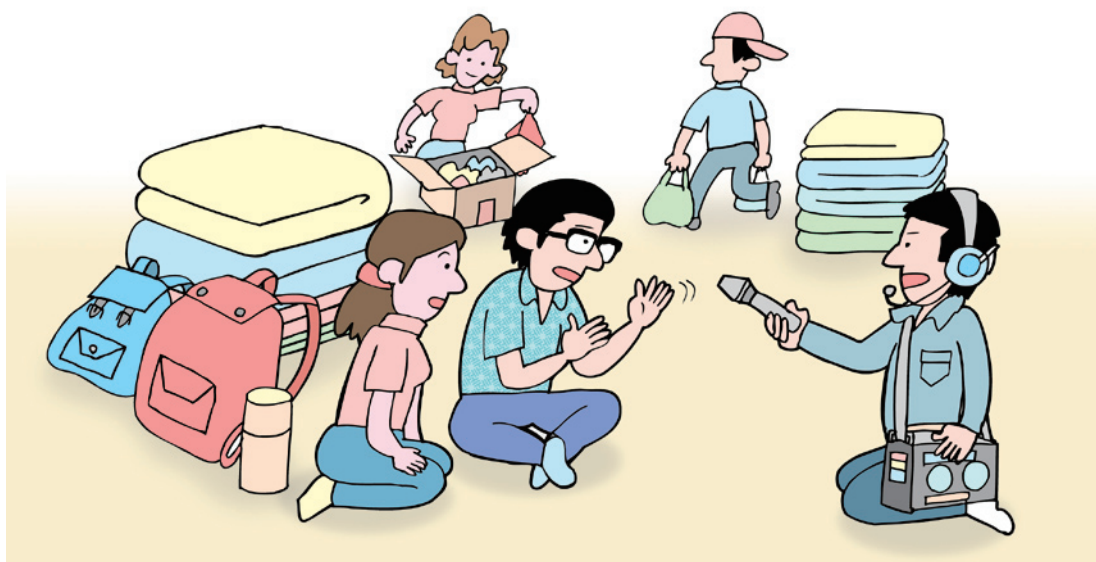
人の目が負担だった避難所生活

(栗原市 60代 男性)

私たちが避難したところは、役場の向かい側にある多目的建物でした。54畳の日本間が3つに仕切られて、寝るところと食べる場所と、あとは日中、たむろっているというのをおかしいんですが、ロビーみたいなところがありました。寝る場合も、いびきがうるさくて迷惑だという人は、体育館のほうの板の間に仕切りをつけて、そっちのほうで盛大にいびきをかいてもらったという具合。

避難所生活というと、人の目のほうが多いんですよね。ボランティアの方々とか市や県の職員とか、われわれよりかえってサポートの人たちのほうが多いです。やっぱり、人の目が自分たちにとってはいちばん疲れたなという感じです。

でも、ひと山全体が私たちの地区なので、全員仲間なんです。みんなでそのまま下りてきたもんですから、チームワークがとれていますので、他人とはいえ、気が楽でした。報道陣とかに囲まれるほうがつらかったというか、疲れましてね。



被災地の神経逆なで、カメラマン

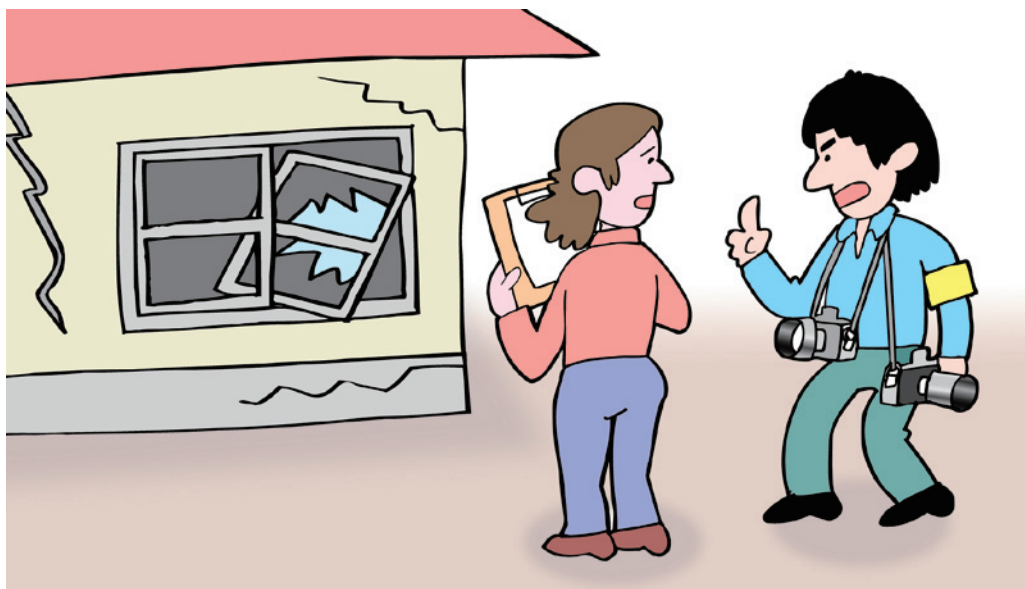
(栗原市 40代 女性 建築士)

当時、すごい数の報道陣がやって来ました。そして、私たちが応急危険度判定*に行ったら、「ニュースで流したいので、あいさつから始めてください」なんて言われました。それどころじゃないのに、判定の赤い紙を張ろうとすると、「あ、ちょっとお待ちください」、「じゃあ、張ってください」って、ニュースをその場で作らされているみたいでした。

それから、山崩れがあった地区に入ったばかりの時は、カメラを持った人が歩いて、「つぶれた家、ないですか」って聞くんですよ。「斜めになっている家はあるけど、つぶれた家はないです」と答えると、何か写真撮れないかなみたいな態度で、「どうしてつぶれないの？」って聞かれました。で、「やっぱり建物ががっちりしているんじゃないんですか」って言ったのです。

神戸の時みたいに、グチャッとつぶれた家の衝撃的な写真が撮れないものかと、一生懸命探しているようで嫌な感じでした。報道の人たちも、ちょっとは被災地の人の気持ちもわかってほしいなと思います。

* 応急危険度判定とは、被災した建物を調査して、余震などによる倒壊の危険性や外壁・窓ガラスの落下、付属設備の転倒などの危険性を判定すること。



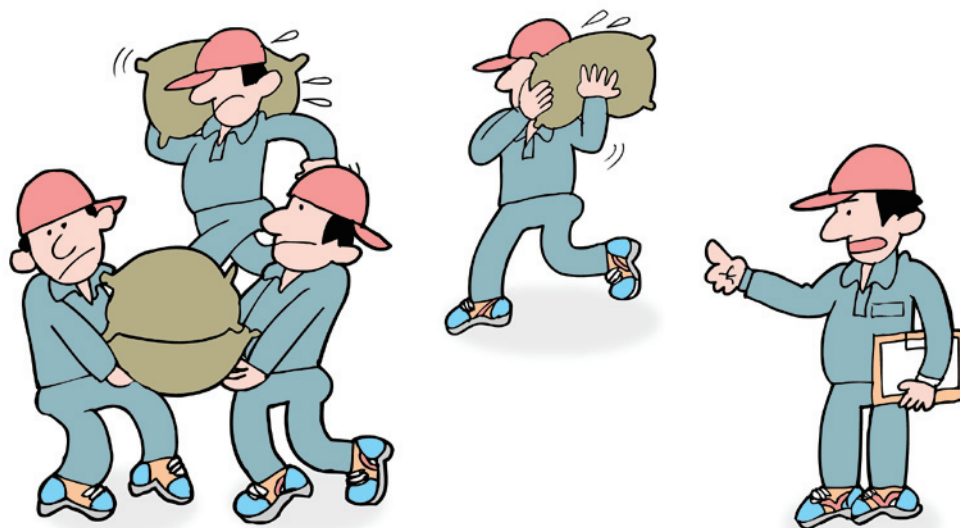
さすが、自衛官ボランティア

(防府市 60代 男性)

自衛隊の若い司令官は、やっぱり違いますね。指揮官がひと声かけると、すぐにホイサ、ホイサと始まるんですよ。普通のボランティアの集まりじゃ、ああいう声は絶対出ないですよ。「せーの」、「あっ、ちょっと待ってください」とか「ちょっとおろしてください」とかが関の山ですから。

当時、自衛官の方たちが、オフにボランティアに来てくれましてね。皆さん、大体ジャージ姿でした。災害対応のプロですから、手際が良くて助かりました。

で、任務として現場に出ておられたその司令官と話をする機会があったので、「きびきびして、ほんと助かりました。ありがとうございます」と言ったら、「お役に立ててありがとうございます」って、また向こうがお礼を言いよるんですよ。



一日前プロジェクト、みんなでやってみませんか？

NPO 法人 東京いのちのポータルサイト 副理事長 鍵屋 一
防災リスクマネジメント Web 編集長 中川 和之
東京 YWCA 副会長 池上 三喜子

一日前プロジェクトの物語をお読みいただいて、いかがでしたでしょうか。皆さんも、難しく考えずに一日前プロジェクトを実施してみませんか？

自然災害に遭遇して体験したことや感じたことなどを語り継ぐことは、災害体験者や被災者の重要な使命であると言えるでしょう。なぜなら、多くの市民は被災経験や災害体験を持たないため、災害に事前に備えることの大切さを頭で理解はしていても、実際に自分が被災したらどうなるかをイメージできず、何も対策を講じていないからです。

災害体験や経験を話したい、語り継ぎたい、語り継がなければならないと思っている方々も、実は大勢いらっしゃると思います。その方法が見つからず、語り継ぐこと・発信することがなかなかできないまま、貴重な体験が風化してしまうことが多々ありますが、ここでご紹介する一日前プロジェクトの手法を用いれば、比較的気楽に「語り継ぎ」を実現できます。

一日前プロジェクトでは、被災された方々のさまざまな「思い」や「本音」を物語にして、災害体験・被災体験を持たない人たちに、災害が身近で、恐ろしいものであることに気づいてもらうことを本来の目的としていますが、被災経験者が自分と同様の思いを抱いた人がいることを知り、災害で受けた心の傷を癒すことができたといった話も報告されています。私たちも、物語作りの担い手をもっと増やす手法を考えていきます。

一日前プロジェクトで作られた物語は、研修やワークショップなどの際に、災害のイメージを膨らますために、導入部として使うこともできます。文字だけでなく、添えられている気の利いたイラストも一緒に使うとより効果的でしょう。テレビニュースの企画で、過去の被災者インタビューの代わりに一日前プロジェクトの物語が使われたこともありますし、ホームページでエピソードを紹介している自治体もあります。

一日前プロジェクトの進め方や活用方法のポイントを以下にまとめましたので、参考にしてください。

※詳しくは、内閣府のホームページ <http://www.bousai.go.jp/km/imp/index.html> をご参照ください。

□物語を集める

一日前プロジェクトの素材となる物語を集める時のポイントは次のとおりです。

1. 「物語」を拾い出す

(1) 話を聞く

同じ被災体験のある人同士に2-4人集まっていたいただいて、2時間程度話を聞きます。何らかの共通性がある方々のほうが、互いに思い出して再発見しながら話が進みますので、その過程も丁寧に聞き取りましょう。聞き手は複数で行い、質問して詳しく引き出すより、話が弾むように仕向け、疑問点は最後に確認すれば良いでしょう。最近の出来事だけでなく、時間がたった災害についても振り返って取り上げることもできます。

(2) 物語を見つけ出す

話を聞き終わったら、聞き手同士で手元のメモを確認しながら、災害を体験していない人にも共感を得られる物語になりそうな話を見つけ出します。1回の聞き取りで10話以上の物語ができることもあります。キーワードなどから、仮の見出しを考えておくといいでしょう。ただ、減災や防災行動としてふさわしくない話に気をつけましょう。

(3) 見出しをつけて編集する

テープ起しなどの記録ができあがったら、上記(2)で拾い出した物語の種を、できるだけ語り口を残して編集します。一つの物語ごとに300字から500字程度にまとめると読みやすいでしょう。一つの話から複数の物語に展開することはよくありますので、単純に元の話の切り分けるのではなく、重なっても単独の物語で流れが分かるようにします。

新聞や週刊誌、広告の見出しのように、内容を一言で言い表して興味を持ってもらえるような見出しを考えながら物語をまとめると、いいでしょう。内容を全部説明するような見出しではなく、「どんな話だろう？」と読んでもらえるきっかけになるように工夫しましょう。この見出し付けが、一日前プロジェクトの核とも言えます。

2. 物語を拾い出す場を作る

この4年間、一日前プロジェクトのコンセプトを生み出した『災害被害を軽減する国民運動に関する専門調査会』の専門委員を中心に、各地で物語を探す聞き取りをしました。今後も、いろんな立場の人が、身近に感じられるような物語を拾い出すために、聞き取りの場をさらに増やすことが必要です。そのために、聞き取りの担い手を増やすことを考えていきます。

災害列島である日本では、不幸なことに毎年のように災害が発生します。その体験は、同じように見えても、一人一人にとっては厳しい経験です。その過程で辛い思いをした被災した人々の声を、一日前プロジェクトとして継続的に後世に伝えていくために、物語を聞き取る場を作り続けていきたいと思います。

一日前プロジェクト みんなでやってみよう！

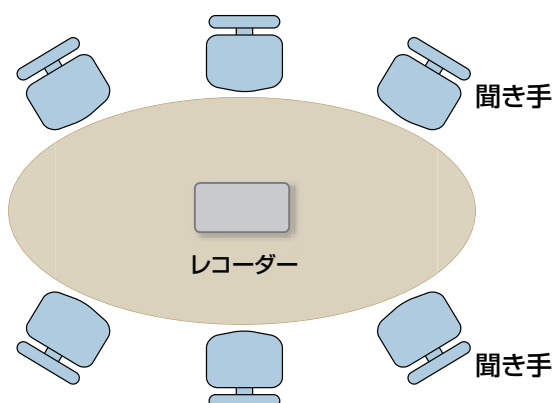
—簡単な手順を紹介します—

まず、過去の自然災害（地震、水害等）の中から対象を選ぶ

その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する ※所用時間は約2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、
体験したり感じたことを話し合ってもらおう ※話し手は、2人～4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を「物語」にする
※物語は、300字～500字程度で、できるだけ語り口を残して編集
※物語の情景を表すイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

■発行
内閣府 (防災担当)
〒100-8969 東京都千代田区霞が関1-2-2 (中央合同庁舎第5号館)
TEL.03-3503-9394 <http://www.bousai.go.jp>